

有岡城跡・伊丹郷町Ⅱ

— J R 伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書 —

第1分冊

1992. 3

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所

有岡城跡・伊丹郷町II

— J R伊丹駅前市街地再開発に伴う発掘調査報告書 —

第1分冊

1992. 3

伊丹市教育委員会
大手前女子大学史学研究所



(株式会社 イピック撮影)



第23次調査（西より）



第30次調査（北より）



伊丹市立博物館所蔵 (187.1×90.1cm)

序

伊丹市は、六甲山地、北摂・長尾連山、千里丘陵に囲まれた武庫平野にあり、市の東西には、阪神間の二大河川である猪名川と武庫川が南北に流れ、そして、猪名川の清流を望む平地や伊丹台地のところどころには、弥生時代から古代・中世に至る歴史的遺跡や社寺などの文化財があり、伊丹市域のもつ歴史的連続性を教えてくれます。

とくに伊丹台地は、市の中央部を南北に縦断した形で形成されており、そこには戦国時代の武将、荒木村重の居城として知られる有岡城が所在していました。

有岡城は、段丘を利用し周囲に堀と土塁をめぐらし、中央部には堀で囲まれた本城があり、その西側に侍町、さらに外郭には町場があるという惣構えをもった最古の城として注目されています。

伊丹市の中核となっている市街地に所在する有岡城跡と伊丹郷町遺跡は、伊丹市発展の基盤となったかけがえのない文化遺産であり、地下に埋蔵されているこれらの遺跡を調査し、記録・保存していくことは私たちの使命でもあります。

こうした中で、昭和61年より、この有岡城跡の主郭部に隣接した西側の部分で、国鉄伊丹駅前市街地再開発事業が計画され、計画地域内の発掘調査を実施することになりました。

この調査の実施のあたっては、伊丹市教育委員会が調査主体となり、大手前女子学園の全面的な協力を得て、大手前女子大学学長、日比野丈夫先生を委員長とする大手前女子学園有岡城跡調査委員会を組織していただき、昭和61年12月から3カ年にわたる現地調査と、ひきつづき平成元年4月から3カ年の整理作業を実施していただきました。

ここに、その調査成果を報告書として刊行されることになったことは誠に慶びにたえません。

末尾になりましたが、今回の調査を開始するにあたって多大の配慮をしていただいた大手前女子学園前理事長、故藤井健造先生のご冥福をお祈りするとともに、調査委員長としてご尽力くださった日比野丈夫学長をはじめ、昭和61年当初から発掘調査を担当していただいた藤井直正教授、川口宏海・前川 要両氏、そして猛暑厳寒の中、早朝より夜遅くまでこの調査に参加された方がたのご労苦に対し、深甚なる敬意と感謝の意を表し、序文といたします。

平成4年3月

伊丹市教育委員会

教育長 乾 一 雄

序

今日の伊丹市の前身である有岡城は、いうまでもなく、天正2年(1574)、荒木村重によって構築された。その規模は、旧来の伊丹城の主郭を抱き込み、周囲に土塁と堀とを廻らした、東西0.8キロ、南北1.7キロに及ぶ壮大なものであった。これはその時代に初めて出現した築城形式で、惣構といわれている。この城は天正7年、織田信長軍の攻撃を受けて落城し、その廢墟の上に今日の伊丹の町が発展したのである。

現在、有岡城の遺跡としては、JR福知山線伊丹駅の付近に主郭の土塁が比較的よく残っており、惣構の遺構としては、北端の猪名野神社境内の「岸の砦」、南端に当る「鶴塚砦」のあとが確認されている。JR伊丹駅前の遺跡調査は、昭和50～55年にかけて伊丹市教育委員会によって行われたが、昭和61年度の調査はこれに関連するもので、本学が伊丹市の委託を受けて実施したのである。場所は伊丹市伊丹1丁目、面積は全体として3,438平方メートルに及んだ。

調査の結果、上記主郭の西側にも縦横に廻らされた堀のあとが発見され、その位置関係や幅なども明らかになるとともに、それらの中には荒木氏築城以前の湧るものもあることが想定されるに至った。すなわち、有岡城主郭の西側一帯には早くから堀や溝に囲まれた地域が存在し、侍町のごとき形態をなしていたこと、その更に西には惣構の中を南北に貫く大溝筋を隔てて、町屋の区域が発達していたとみられるのである。後者は江戸時代から伊丹郷町の中に組み入れられて、今日の市街を形成したのであった。

本書は、上記調査事業の経過報告、関係資料、並びに現在確認された成果の記述から成立している。とくに、発掘に伴って出土した遺物は莫大の量に上るので、その整理と本書の作成は、伊丹市教育委員会の委託により、平成元年度より3年間にわたる継続事業として行われた。今次の調査は、発掘計画の立案より報告書の出版に至るまで、すべて本学の藤井直正教授の手を煩わしたのであるが、作業全般は主任調査員の川口宏海(大手前栄養文化学院講師)・前川 要(現在、富山大学人文学部講師)の両君が当たり、その指導の下に本学卒業生・在校生多数が参加した。その実施については実に多くの方々の協力・援助をいただいたことを想起し、感謝の念を新たにするものである。

終わりに臨んで、伊丹市教育委員会と兵庫県教育委員会とが、終始この事業に関し、適切な指導・助言を与えられたことを銘記しなければならない。ことに伊丹市当局と同教育委員会の学術研究に対する理解と熱意とに心から敬意と謝意を表すのでありたい。

平成4年3月

大手前女子大学学長 日比野丈夫

例 言

1. 本書は、兵庫県伊丹市による国鉄（現在のJR）伊丹駅前市街地再開発事業に伴って、伊丹市伊丹1丁目において実施した、有岡城跡と伊丹郷町の発掘調査の報告書である。
2. 現場における調査は、大手前女子大学日比野丈夫学長を委員長とする「有岡城跡調査委員会」を組織し、大手前女子大学史学科教授藤井直正を調査担当者として、大手前女子学園が伊丹市の委託による事業として実施した。なお、これにかかる経費は委託料として伊丹市より支出を受けた。
3. 調査は昭和60年度・61年度に亘って8次に分け、第23次を開始した昭和61年2月17日から12月2日に及んだが、発掘調査面積は3,438㎡である。この詳細については「調査の経過」で述べ一覽表を掲げた。
4. 現場における調査は、調査担当者である藤井直正の管理・指導のもとに、主任調査員として、川口宏海（大手前栄養文化学院講師）・前川 要（当時、大手前女子大学研究嘱託、現在、富山大学人文学部講師）の両名が専従した。また、調査員として大手前女子大学卒業生の細川佳子・木本由恵・萩野典子・姫路真保、事務員として川端千寿を充ててこれをたすけ、大手前女子大学史学科所属学生のほか、多数の学生諸君の参加・協力を得、調査補助員とした。これら参加者の名簿は巻末に掲げた。
5. 調査資料ならびに出土の整理作業は主任調査員川口宏海・前川 要両名と、その指導のもとに、調査員伊藤裕子・岩谷奈津子・細川佳子・萩野典子、事務員として平井千保、卒業後新たに調査員に加わった赤松和佳によって、現場の終了後逐次、これも多数の学生諸君の協力を得て進めて来た。
資料整理および本報告書作成に向けての作業は、改めて平成元年度より3ヵ年継続事業として伊丹市教育委員会より委託を受けた。主要作業の分担は次の通りである。
なお、整理作業と報告書の作成は、平成元年5月以後、学内調査組織の整備に伴い、大手前女子大学史学研究所文化財調査室、有岡城跡・伊丹郷町調査部に引き継いで実施したことを付記する。
6. 本書の構成は、当初2部に分け、第1部を報告編、第2部を考察・研究編とし、主任調査員・調査員が各々分担・執筆する予定で計画した。しかし、第1部の報告編に収録しなければならない内容が膨大な量に上り、これの作業に時日を費やしたため、第2部の考察・研究編は割愛し、後日を期すこととした。なお、報告編の一部は、原稿の作成が予定期間内に完了することができなかつたため、第23・24・30・36・38次分を第1分冊として本書におさめ、のこりの第27・33・35・40次分は、これを第2分冊として、時期をずらして刊行することとした。
7. 本報告書の作成は企画段階で、藤井の指導・助言のもとに、主として編集作業は主任調査員川口宏海が担当し、主任調査員前川 要と調査員細川佳子・萩野典子・赤松和佳が学生諸君多数の協力によって進めたが、藤本史子（大手前女子大学研究嘱託）の助言を得た。報告書原稿の執筆分担については、目次に明記した通りである。
8. 表紙の文様は第23次調査の際、有岡城時代の溝から出土した中国製青磁梅瓶の破片からデザイン化したものである。この作図は藤井文子が当たった。

9. 巻頭に掲げた口絵写真のうち、『寛文九年伊丹郷町絵図』は、原版を伊丹市立博物館、航空写真はイビソク株式会社よりそれぞれ提供を受けた。

10. 遺構表示記号は、奈良国立文化財研究所の用例にほぼ従ったが、SS（礎石）・SF（堀）のみ独自のものを使用した。

SA	橋	SB	建物	SD	溝	SE	井戸
SF	堀	SI	竈	SK	土壇	SP	柱穴
SS	礎石	SX	その他				

11. 位置の記載は、平面直角座標系Vによる、建設省基本点・基準点、および伊丹市公共基準点を使用し、記載している数値は、X・Yともm単位で、水準はO.P.（大阪湾中等潮位）である。

12. 遺物の色調については、『新版・標準土色帖』（農林省農林水産技術会議事務局、昭和51年）を併用し、すべて肉眼観察によって比定した。

13. 現場における発掘調査の実施に当たっては、伊丹市都市開発関係諸氏、および平成元年度から3か年にわたる資料整理に至るまで、伊丹市教育委員会の教育長以下、担当部局各位の懇切なご指導ご配慮を得た。調査を開始した昭和60年度には、社会教育部社会教育課の所管であったが、以後、社会教育部生涯学習推進室を経て、平成2年度から生涯学習部の所管となった。以下、各位の芳名を列記させていただく（順不同）。

社会教育部長	笹倉 東一	同	宮崎 泰樹
同	宮崎 昌大	生涯学習部次長	桑本 雅行
生涯学習部長	池上 照之	同 社会教育担当主幹	千葉純一郎
同	石井 俊明	同 副主幹	山田 和成
社会教育課長	大沢 欣也	社会教育課・生涯学習主査	垂 伸一郎
同	井上 孝之	同 主任	小長谷正治
同	伊藤 幸雄	同 事務員	城間 季子

また、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課榎本誠一・同松下 勝（平成4年2月没）両氏ほか担当各位の指導・助言を得たほか、株式会社染の川組、西村興業株式会社、写測エンジニアリング株式会社、イビソク株式会社の協力、その他多くの機関と多数の方がたの援助を受けた。

さらに、大手前女子学園藤井健造前理事長（平成3年2月10日逝去）、現福井秀加理事長、大手前女子大学日比野丈夫学長、企画・運営委員会委員諸先生には、調査の進行から本報告書の刊行に至るまで指導・助言と各方面にわたってご配慮を得たことをを付記する。

14. 遺物整理作業の段階では、次の各氏より、出土遺物について、それぞれ有益な助言を得た。

愛知果陶磁資料館	井上喜久男
安土城郭考古博物館	稲垣正宏
大阪府立大学	佐々木文彦
伊丹市立博物館	和島恭仁雄
九州陶磁文化館	大橋康二
堺市教育委員会	白神典之・森村健一
兵庫県教育委員会	岡崎正雄・長谷川 真

本文目次

序	伊丹市教育委員会教育長 乾 一雄	i
序	大手前女子大学学長 日比野丈夫	iii
例 言		v
第1章 は し が き	(藤井)	1
第2章 調査の経過	(藤井)	5
第1節 調査に至る経過		5
第2節 調査組織と調査体制		7
第3章 調査の方法	(川口)	12
第1節 調査区割と図面割		12
第2節 基準点と水準点の設置		15
第3節 調査の方法		15
第4章 調査の成果		17
第1節 はじめに	(川口)	17
第2節 第23次調査	(川口)	18
1 基本層序		18
2 I期の遺構と遺物		18
3 II期の遺構と遺物		26
4 III期の遺構と遺物		50
5 IV期の遺構と遺物		84
第3節 第24次調査	(前川)	94
1 調査区域と調査の方法		94
2 調査の成果		94
3 小 結		125
第4節 第30次調査	(前川)	126
1 調査の方法		126
2 基本層序		126
3 調査の成果		126
第5節 第36次調査	(前川)	142
1 調査の方法		142
2 基本層序		142
3 調査の成果		147

第6節 第38次調査(前川)...	154
1 基本層序	154
2 調査の成果	157
第5章 結 語(川口)...	159
第1節 在 城 期	159
1 I期 伊丹城期	159
2 II期 有岡城期	159
第2節 伊丹郷町期と近代	172
1 III期 伊丹郷町期	172
2 IV期 近 代	174
おわりに	174

目 次

卷頭図版 1 有岡城跡・伊丹郷町から大阪湾を望む	3 SE03
卷頭図版 2 遺構全体写真	4 SE07
第23次調査	5 SE05
第30次調査	6 SK141
卷頭図版 3 第23次調査輸入陶磁器	7 SK129
SF02	8 SK60
SD10・SF01	図版 8 第23次調査 遺構
卷頭図版 4 寛文九年伊丹郷町絵図	1 SK26
	2 SK01
図版 1 有岡城跡・伊丹郷町航空写真	3 SK02
図版 2 有岡城跡・伊丹郷町航空写真	4 SK06
図版 3 第23次調査 遺構	5 SK21
1 第23次調査 第二次面全景	6 SK08
2 第23次調査 第一次面(南側)全景	7 SK24
図版 4 第23次調査 遺構	8 SI18
1 SE06	図版 9 第23次調査 遺構
2 SF03 No.1 畦	1 SI17
3 SF03	2 SI02
4 SF01・02 南北畦	3 SP322
5 SF01 中央畦	4 SI14
図版 5 第23次調査 遺構	5 SK30
1 SF01	6 SI01
2 SF01 中層 瓦出土状態	7 SB01—SS19 二次面
3 SF01 下層 漆器碗出土状態	8 SB01—SS02 墨書
4 SF02 No.3 畦	図版10 第23次調査 遺構
5 SF01・02 接合地点 陸橋状部分	1 SB01
図版 6 第23次調査 遺構	2 SD01
1 SF02	3 SD02
2 SF02 北端部 枕出土状態	4 SE02
3 SF02 中層 石仏出土状態	5 SI09・10
4 SF02 中層 瓦出土状態	図版11 第23次調査 遺物
5 SF02 下層 鉄製鋏出土状態	SE06・SF03・SF01
図版 7 第23次調査 遺構	図版12 第23次調査 遺物
1 SD10	SF01
2 SD10 No.2 畦	図版13 第23次調査 遺物

- S F01・S F02
- 図版14 第23次調査 遺物
S F02
- 図版15 第23次調査 遺物
S F02
- 図版16 第23次調査 遺物
S F02・S D10
- 図版17 第23次調査 遺物
S D10・S E03・S E07
- 図版18 第23次調査 遺物
S E07
- 図版19 第23次調査 遺物
S E07・S K111・S E05・S K141
- 図版20 第23次調査 遺物
S E05・S K141・S D14・S K115・S K129・
S K60
- 図版21 第23次調査 遺物
S K60・S K23・S K01・S K21
- 図版22 第23次調査 遺物
S K21・S K08・S K24・S I18・S K149・
S I17
- 図版23 第23次調査 遺物
S P322・S I14・S K30・S I01・S S09・
S D01
- 図版24 第23次調査 遺物
S D01・S D04・S D02・S E02
- 図版25 第23次調査 遺物
S E02・S K02・S K06・S I09・10・S I02
表面採集遺物
- 図版26 第24次調査 遺構
1 第24次調査 Aトレンチ全景
2 第24次調査 Aトレンチ全景
- 図版27 第27次調査 遺構
1 Bトレンチ S F01 肩部
2 Cトレンチ 全景
3 Dトレンチ 全景
4 Eトレンチ S F01
5 Eトレンチ 全景
- 図版28 第28次調査 遺構
1 Fトレンチ S F01肩部
2 S K03
3 Fトレンチ 全景
- 図版29 第24次調査 Aトレンチ出土遺物
S K02
- 図版30 第24次調査 Aトレンチ出土遺物
S F01 中層
- 図版31 第24次調査 Aトレンチ出土遺物
S F01 中層・S F01 上層
- 図版32 第24次調査 C・Dトレンチ出土遺物
Cトレンチ S K03・S K04・S K06
Dトレンチ S D02・S D03
- 図版33 第24次調査 Eトレンチ出土遺物
S F01・S K01
- 図版34 第24次調査 Fトレンチ出土遺物
S D01・S K03・S K05・S K04・S K06
- 図版35 第24次調査 Fトレンチ出土遺物
S K06・S K05・S K04・S F01
- 図版36 第30次調査 遺構
1 第30次調査 全景
2 S D12・13
3 S F01
4 S F01 橋脚柱痕
- 図版37 第30次調査 遺構
1 S F01 南壁
2 S D01
3 S D15
4 S K28
5 S K02・S I05・06
6 S P78・79
7 S I02
8 S I08
- 図版38 第30次調査 遺物
S D13・S F01・S D01・S D15・S K02
- 図版39 第30次調査 遺物
S K02・S I06・S I05・S P79・S I07・S I08・
表面採集遺物

図版40 第36次調査 遺構

- 1 第36次調査 第二次面全景
- 2 第36次調査 第一次面全景

図版41 第36次調査 遺構

- 1 西側拡張部 第二次面全景
- 2 西側拡張部 第一次面全景

図版42 第36次調査 遺構

- 1 S F01 東壁
- 2 S F02 西壁
- 3 S D01
- 4 S D01 遺物出土状態
- 5 S D02
- 6 S K03
- 7 S K08

8 S I01

図版43 第36次調査 遺物

S F01・S K03・S D01・S I01・表面採集遺物

図版44 第36次調査 遺物

表面採集遺物

図版45 第36次調査 遺構

- 1 第38次調査 全景
- 2 S F02
- 3 S K02内 S I01
- 4 S K02
- 5 S K02内 S I01

図版46 第38次調査 遺物

S K02・S F01

図・表目次

(調査に至る経過)

第1図 J R伊丹駅周辺の既往の調査……………5

第1表 事業実施経過一覧表……………10

(調査の方法)

第1図 5 m方眼割図……………12

第2図 1/20測量図面割図……………12

第3図 有岡城・伊丹郷町調査区割図……………13

第4図 有岡城・伊丹郷町図面割図……………14

第5図 国土座標基準点・水準点網図……………15

(第23次調査)

第1図 第23・27次調査北壁土層図……………19・20

第2図 第23次調査東壁土層図……………21・22

第3図 第23・27次調査南壁土層図……………23・24

第4図 S E06遺構図……………25

第5図 S E06出土遺物……………25

第6図 S F03土層図……………25

第7図 S F03出土遺物……………26

第8図 S F01土層図……………27

第9図 S F01・02土層図……………28

第10図 S F01漆喰出土状態図……………29

第11図 S F01出土遺物(1)……………29

第12図 S F01出土遺物(2)……………30

第13図 S F01出土遺物(3)……………30

第14図 S F01出土遺物(4)……………31

第15図 S F01出土遺物(5)……………31

第16図 S F01出土遺物(6)……………32

第17図 S F01出土遺物(7)……………33

第18図 S F01出土遺物(8)……………34

第19図 S F01出土遺物(9)……………35

第20図 S F01出土遺物(10)……………36

第21図 S F02土層図……………37

第22図 S F02出土遺物(1)……………38

第23図 S F02出土遺物(2)……………39

第24図 S F02出土遺物(3)……………40

第25図 S F02出土遺物(4)……………40

第26図 S F02出土遺物(5)……………41

第27図 S F02出土遺物(6)……………42

第28図 S F02出土遺物(7)……………43

第29図 S F02出土遺物(8)……………44

第5図	AトレンチSK02出土遺物(2)	100	第4図	SD13出土遺物(1)	130
第6図	AトレンチSF01中層出土遺物(1)	101	第5図	SD13出土遺物(2)	131
第7図	AトレンチSF01中層出土遺物(2)	102	第6図	SF01北壁土層図	131
第8図	AトレンチSF01中層出土遺物(3)	103	第7図	SF01南壁土層図	132
第9図	AトレンチSF01中層出土遺物(4)	104	第8図	SF01堀底柱穴エレベーション図	132
第10図	AトレンチSF01中層出土遺物(5)	105	第9図	SF01出土遺物	133
第11図	AトレンチSF01上層出土遺物	105	第10図	SD01土層図	133
第12図	Bトレンチ、Cトレンチ、Dトレンチ遺構全体図	107-108	第11図	SD01出土遺物	134
第13図	Bトレンチ西壁・南壁土層図	109	第12図	SK28遺構図	134
第14図	Cトレンチ南壁土層図	110	第13図	SD15遺構図	136
第15図	CトレンチSK03出土遺物	110	第14図	SD15出土遺物	136
第16図	CトレンチSK04出土遺物	110	第15図	SK02・SI05・SI06遺構図	137
第17図	CトレンチSK06出土遺物(1)	111	第16図	SK02出土遺物	137
第18図	CトレンチSK06出土遺物(2)	112	第17図	SI05・SI06出土遺物	138
第19図	CトレンチSK06出土遺物(3)	113	第18図	SP78・79遺構図	138
第20図	Dトレンチ南壁土層図	113	第19図	SP78・79出土遺物	139
第21図	DトレンチSD02出土遺物	113	第20図	SI01・SI02遺構図	139
第22図	DトレンチSF01出土遺物	114	第21図	SI04遺構図	139
第23図	Eトレンチ・フトレンチ遺構全体図	115-116	第22図	SI07遺構図	139
第24図	Eトレンチ南壁土層図	117	第23図	SI03遺構図	139
第25図	EトレンチSF01出土遺物(1)	118	第24図	SI07出土遺物	140
第26図	EトレンチSF01出土遺物(2)	119	第25図	SI08出土遺物	140
第27図	EトレンチSK01遺構図	119	第26図	表面採集遺物	140
第28図	EトレンチSK01出土遺物	119	第27図	SI01~04・07~09出土遺物	141
第29図	Fトレンチ北壁土層図	120			
第30図	FトレンチSD01出土遺物	121			
第31図	FトレンチSK03・SK05遺構図	121	(第36次調査)		
第32図	FトレンチSK03出土遺物(1)	121	第1図	第二次面遺構全体図	142
第33図	FトレンチSK03出土遺物(2)	122	第2図	第一次面遺構全体図	143-144
第34図	FトレンチSK03出土遺物(3)	123	第3図	第36次調査東壁・南壁・西壁・北壁土層図	145-146
第35図	FトレンチSK05出土遺物(1)	123	第4図	SF01土層図	148
第36図	FトレンチSK05出土遺物(2)	124	第5図	SF01出土遺物	148
第37図	FトレンチSF01出土遺物	124	第6図	SK03遺構図	148
			第7図	SK03出土遺物(1)	149
			第8図	SK03出土遺物(2)	149
			第9図	SD01遺構図	150
(第30次)			第10図	SD01出土遺物	150
第1図	第30次調査北壁・東壁・南壁土層図	127-128	第11図	SI01遺構図	151
第2図	西壁・南壁土層図	129	第12図	SI01出土遺物	151
第3図	SD12・SD13遺構図	130			

第13図 表面採集遺物 ……………152

(第38次調査)

第1図 第38次調査遺構全体図 ……………154

第2図 第38次調査南壁・西壁・北壁土層図 ……155・156

第3図 SK02・SF01出土遺物 ……………158

第4図 SK02遺構図 ……………158

第5図 SI01遺構図 ……………158

(結 語)

第1図 大阪平野の中世末期の主要城郭 ……………160

第2図 有岡城復元案 ……………161

第3図 第30次調査 IV期の遺構と既存建物 ……173

第4図 第30次調査 IV期の遺構と既存建物 ……174

表1 第23次調査、有岡城期遺構内出土遺物数量表 ……163

表2 第23次調査 有岡城期遺構出土遺物組成 ……164

表3 第23次調査、有岡城期遺構出土遺物器種別組成 ……164

表4 第23次調査、有岡城期遺構出土皿組成 ……166

表5 第23次調査、有岡城期遺構出土皿組成 ……166

表6 第23次調査、有岡城期遺構出土摺鉢・甕・壺組成 ……166

表7 第23次調査、有岡城期遺構出土土師質土師皿法量グラフ ……167

表8 第23次調査出土 軒丸瓦計測表 ……………168

表9 第23次調査出土 軒平瓦計測表 ……………170

付 図

付図1 調査区全体図

付図2 第23次調査二次面・第27次調査遺構全体図

付図3 第23次調査一次面遺構全体図

付図4 第30次調査二次面遺構全体図

付図5 第30次調査一次面遺構全体図

付図6 主郭周辺遺構検出図

第1章 は し が き

1

昭和15年(1940)に市制が施行された兵庫県伊丹市は、一昨年の平成2年(1990)に市制施行50周年を迎えた。「生命の輝きをたたえ、青春の歡びがこだまする都市」をスローガンに、明日をめざして発展をつづけるための政策が掲げられている。

この伊丹市の諸施策中、とくに重点的に推進されているのが都市改造で、市民の足として大きな役割を果たしている阪急電車伊丹駅の高架化と周辺の開発・整備、さらに昭和56年に複線・電化された現在のJR福知山線伊丹駅前、それにつづく宮ノ前地区における市街地再開発事業を挙げることができる。

すでにJR福知山線伊丹駅前には、サンシティホールをはじめとする社会福祉施設が完成し、宮ノ前地区の東辺部には、全国的に知られた伊諾関係の資料を取蔵・展示する神衛文庫館^{カミノ}・市立美術館・工芸センターをふくむ芸術文化施設がつけられ、市民の福祉厚生および文化の向上に大きな役割を果たすことが約束されている。また、阪急電車伊丹駅の東側、商店街につづいて、法藏寺・正善寺・大蓮寺とならぶ通称三軒寺の前には市民プラザもつけられている。

さらに、現在宮ノ前地区では、音楽ホールをはじめとする諸施設や、大阪国際空港と直結する県道の拡幅工事も並行して進められているが、古くからその場所にあった小西酒造・大手柄酒造の酒蔵や、国の指定文化財となっている旧岡田家の酒蔵など、伊丹の歴史を担う酒造工業区域の一画、さらに伊丹第一ホテルを中心とする商業地域をふくめて、中心市街地の完成する日も近い。

ところで、ここに述べて来た伊丹市の重点施策として推進されている、二つの市街地再開発事業の実施されている地域のすべてが、歴史をさかのぼると、伊丹郷町、さらに有岡城跡の惣構中^{ソウカマ}にふくまれる地域であることを忘れてはならないのである。

2

有岡城の歴史は、戦国時代のさ中に織田信長によって、摂津国の守護に任じられた荒木村重が、天正2年(1574)、それより先、伊丹親興によって築かれていた伊丹城を討って入城し、「有岡城」と改めた時にはじまった。

有岡城および伊丹郷町のことについては、『兵庫県史』や『伊丹市史』全7巻など諸書に述べられ、私自身もこれまで何回となく概略を記していることでもあるので重複を避けたいが、たまたま平成4年のNHK大河ドラマが「織田信長」であり、有岡城が所在する伊丹市は信長につながる土地でもあるので、あらましかけを記しておくことにしたい。

荒木村重は、信長のもとにあって、信長が敵とする石山本願寺や、それに大きなかわりを持つ一向一揆や、背後にあってこれを支援する毛利氏の勢力を討つために活躍した。その間、自らの拠点であった有岡城の構築に着手し、工事を進めたが、ここを訪れたポルトガルの宣教師ルイス＝フロイスは、本国に書き送った書簡の中に、「甚だ壮大にして見事な城」「新たに築造せる彼の壮麗なる城」と言った文言で記している⁽¹⁾。

伊丹台地の地形を巧みに利用して、主郭のほか要所に砦をおき、外郭線を堀と土塁でかこみ、武士の住む侍町や、商工業者の居住する町を取り込んだ、いわゆる“惣構”をもつ、都市的機能を備えた有岡城下町

は、こうして出現したのである。

この荒木村重は、天正6年(1578)、突如として信長に反旗をひるがえした。信長の一生を記した書物として著名な、太田牛一の筆に成る「信長公記」⁽²⁾をみると、まず巻十一の「荒木摂津守逆心を企つ並びに伴天連の事」に、

十月廿一日、荒木摂津守、逆心を企つるの由、方々より言上候。不実におぼしめされ、何篇の不足候や、存分を申し上げ候は、仰せ付けられるべき趣にて、宮内御法印、惟任日向守、万見仙千代を似て仰せ遣はさるるのところに、少しも野心御座なきの通り、申し上げ候。御祝着なされ、御人質として、御袋様差し上げられ、別儀なく候は、出仕候へと、御説候と雖も、謀叛をかまへ候の間、不参候。惣別、荒木は、一僕の身に候と雖も、一年、公方様御敵の初、忠節申し候に付いて、摂津国一職に仰せ付けらるゝのところ、身の程も顧みず、朝恩を誇り、別心を構え候。此の上は、是非に及ばざる由にて、安土御山に、神戸三七、稲葉伊予、不破河内、丸毛兵庫をかせられ、十一月三日、御馬を出され、二条御新造御成り。爰にても、惟任日向守、羽柴筑前、宮内御法印を以て、色々御扱ひを懸けられ候へども、御請け申さず候。

と記されている。また、巻十二、天正七年(1579)に入つての「摂津国御陣の事」では、冒頭に、

江州安土御山にて越年なされ認めぬ。歴々御衆、摂津伊丹表数ヶ所の御付城、各御在番の儀に付きて、御出仕これなし。

つづいて、「北畠中將殿御折檻状の事」では、

九月廿一日、信長公、京都より摂津伊丹表に至りて御馬を出され、其の日、山崎御泊り。廿二・三両日雨降り、御滞留。

(中略)

九月廿四日、山崎より古池田に至りて、御陣を移さる。

九月廿七日、伊丹四方御取出御見舞。古屋野にて、滝川左近所に、暫らく御逗留。其れより塚口、惟任五郎左衛門が所に御成り、御休息なされ、晩に及び、池田へ御帰り。次の日。

九月廿八日、御帰洛。其の日、初めて茨木へ御立ち寄り。

とある通り、有岡城に対する攻撃と信長の積極的な行動が展開されたのである。そして、同じく巻十二の「伊丹城謀叛の事」では、

十月八日、戌の刻、二条を御立ちなされ、夜もすがら御下り、次の朝、九月の日の出に、安土へ御帰城。

十月十五日、滝川左近調略を似て、佐治新介使を仕り、中西新八郎を引き付け、中西才覚を似て、足輕大将の星野、山脇、隠岐、宮脇、謀叛いたし、上藤塚へ滝川人数引き入れ、多数切り捨て候。取る物も取り取へず、上を下へとなって、城中へ逃げ入り、親子兄弟をうたせ、泣きかなしむ計りなり。町をば居取にいたし、城と町との間に侍町あり。是れをば火に懸け、生か城になされたり。きしの取出、渡辺勘大夫、楯籠り、同者紛に、多田の館まで罷り退き候を、兼て申し上ぐるの儀もこれなく、曲事の旨御説にて、生害させられ、又、ひよどり塚に、野村丹後、大将として、雑質の者相加え、拘へ候。悉く討死にて、丹後、御詫言申し候ところ、中御許容なく、生害候て、くびを安土へ進上候。荒木妹、丹後後家、城中にて此の由承り、うさもつらさも身ひとり、泣きかなしみ、いきて甲斐なき身ながらも、此の上、又、如何なる憂目をか見んずらんと、あさましく思ひ歎く有様、目も当てられず、哀れなり。諸手四方より、近々と推し詰め、城樓かねほりを入れ、攻められ、命御助けなされ候へと、御詫言申し

候へども、御許容これなし。(後略)

このあと、『信長公記』には、「伊丹の城これある年寄りども、妻子兄弟置き捨て退出の事」さらに「伊丹城相果たし、御成敗の事」の、項目があって、えんえんとその順来が述べられている。

これが、有岡城および荒木一族の最後であった。

3

有岡城の主郭部分は、現在のJR福知山線伊丹駅のあるところとその周辺であり、江戸時代に描かれた数枚の絵図には「古城山」と記され、廃城以降後世に至るまで、城郭の遺構が姿をとどめていたようである。明治37年(1907)に開通した阪鶴鉄道(現在のJR西日本福知山線)が、これを突切って敷設されたため、その大半が失われた。それでもJR伊丹駅の西側一帯、荒木村重の菩提寺とされている荒村寺の旧地や、忠魂碑の建っているところに土塁の痕跡をとどめている。

昭和50年から55年にかけて、国鉄伊丹駅前の整備事業に伴い、この区域での遺構の残存状態を確認するための発掘調査が伊丹市教育委員会によって行われている⁽⁴⁾。

この主郭部分のほか、現在にのこる有岡城の遺構としては、猪名野神社の境内地になっている“岸の砦”があり、境内の西辺と北辺にかけて、境内を囲繞する形で土塁がのこっている。また南端に当たる“轡塚(ひよどりづか)砦”がそのままの姿で依存し、この南北二つの砦を結び、伊丹台地の縁辺に沿って連なる惣構えのラインは、地図上では明瞭にたどることができ、また現地においても地形の高低差によってこれを確認することができる。

発掘調査が行われて明確な遺構が検出された主郭の残存部分と、南北2カ所の砦跡、およびこれを結ぶ惣構の西側のラインは、昭和54年12月28日付を以て「有岡城跡」として、文化財保護法により国の史跡に指定された。ただし主郭残存部分の西がわには堀のめぐらされていることがわかっており、史跡指定に当たってどこまでにするかという点については、堀跡の確認調査が必要であり、市街地再開発事業との絡みもあって保留されていた。今回の調査には、この堀跡の確認調査をふくんでいるが、その結果、主郭を囲繞する堀の状況と幅を確認することができた。これによって、昭和63年5月19日付を以て、この部分から追加指定を受けた⁽⁹⁾。

4

有岡城がほろんだ後も、惣構の西北方に形づくられていた商工業者の町は、近世の村々の経済活動の中心として発展をつづけた。天正年間(1573~92)には、すでに伊丹村内には、竹屋町・中之町・米屋町など15の町が成立していた。元禄年間(1688~1704)には24町にふえ、さらに享保年間(1716~36)には27町となってほぼ町としての形が整った。この伊丹村を中心とし、大広寺村・円正寺村・外城村・植松村など15カ村が一つづきとなって、都市的性乃至機能を備えた在郷町を「伊丹郷町」と総称している。

江戸時代に入るとの寛文元年(1661)、伊丹村をふくむ10カ村は、近衛家の領地となった。延宝3年(1675)には、宇治の領地と引き替えに6カ村が幕府に返還され、また一時は柳沢吉保の領地になったこともあったが、正徳元年(1711)からは、伊丹郷町の大半を占める12カ所が近衛家領となり、そのまま明治維新に及んだのである。

注

- (1) 1578年9月30日(天正6年8月29日)付、ルイス・フロイス書簡、『耶穌会士日本通信異国叢書』(八木哲浩編『荒木村重史料』伊丹史料叢書4所収)
- (2) 桑田忠親校注『改訂信長公記』(新人物往来社刊)を用いた。
- (3) 八木哲浩編『伊丹古絵図集成』(伊丹史料叢書6)に収録されている。
- (4) 伊丹市教育委員会『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』(昭和51～4年)、および『有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ』(昭和58年3月)
- (5) 有岡城跡の史跡指定に当たっては、主郭の残存部分、猪名野神社境内の「岸の砦」と「ひよどり塚砦」が面として指定された他に、惣構の西側が、道路敷・水路敷による線として指定されている。これについては、『日本歴史』第372号(昭和54年5月)所載の「文化財リポート115」に指定理由がのせられている。
- (6) 最近、同朋舎から刊行された『図説日本の史跡8』(近世・近代2)には、「有岡城跡」が収録されている。この解説文は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所課長の要職にあり、永年にわたって兵庫県における埋蔵文化財行政と技術者の育成・指導に当たって来られた松下 勝氏がかかれたものである。去る平成4年2月、49才の若さで逝去されたが、心からその冥福を祈りたい。



整備された有岡城跡の主郭
上一全景(東南方より)
下一土塁と石垣

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

ふりかえって見ると、大手前女子学園が、伊丹市の推進されている市街地再開発事業に伴い、有岡城跡および伊丹郷町の発掘調査に従事して以来、すでに7年余の歳月を経過した。

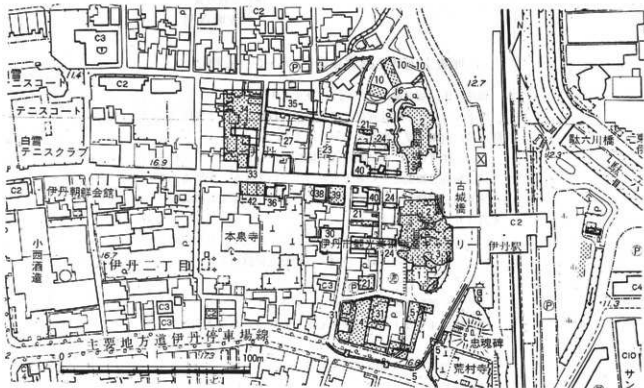
昭和61年4月、大手前女子短期大学は、伊丹市の高等教育機関誘致政策に随って、伊丹市稲野2丁目の旧ダイハツ工業の跡地に校地を求め、そこに校舎を新築・開校した。それに先立つ昭和60年に、有岡城跡によくまれる伊丹市北本町1丁目における発掘調査がその嚆矢であった。

当時の国鉄福知山線伊丹駅前の市街地再開発に伴い、その用地買収によって立ち退かれる方がたへの代替家屋の敷地と、それに隣接する三井不動産株式会社による三井パークマンション建設に伴う発掘調査で、その詳細は次表の通りである。

	対 象	面積	調査期日
第1次	代替家屋敷地	680㎡	5月27日～7月16日
第2次	パークマンション敷地	3700㎡	9月26日～12月21日

この実施に当たっては、学内に「有岡城跡調査会」を組織し、発掘調査と整理事業を進めたが、この調査の報告書は「有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ」として昭和62年度10月に上梓した。

これについて、昭和61年度より62年度にかけて、伊丹市より委託されたのが、「国鉄伊丹駅前市街地再開



第1図 JR伊丹駅周辺の既住の調査

発事業に伴う有岡城跡・伊丹郷「の発掘調査」である。

この事業は、国の史跡に指定されている有岡城跡の主郭部分に隣接する計16,500㎡の敷地を対象として、この中にある既設家屋のすべてを撤去し、これに代わって、市の公共施設であるサンシティホール、および店舗部分をふくむ高層共同住宅を建設するという大規模な都市開発事業である。

再開発事業が実施される区域は、16,500㎡という広大な面積であり、この全域が有岡城跡の惣構、乃至伊丹郷町として、周知の埋蔵文化財包蔵地であるから、全域のすべてにわたって発掘調査が必要である、ということは今から考えてみると当然のことであるが、市当局においてはこのことについてはまったく配慮されていなかったようである。ただ有岡城跡の主郭部分が昭和54年に史跡に指定されているが、西側の外郭線が未決定であるため、市街地再開発事業との関連で、堀跡の確認調査を行ない、これを決定する程度のことと考えられているに過ぎない状況であった。

市当局の内部においては、市教育委員会を中心に、開発担当部局との間で協議が重ねられたはずであるが、その間のくわしい事情については知らないことも多く、ここでは省略する。

伊丹市から大手前女子学園に、この調査について正式に依頼を受けたのは、昭和60年12月のことであった。ここに12月17日付、伊丹市教育委員会教育長佐坂茂男氏の名で、本学園理事長宛に送付された依頼文書の全文を掲げることにしたい。

伊教委社 第351号

昭和60年12月17日

学校法人

大手前女子学園理事長 殿

伊丹市教育長

佐坂茂男

埋蔵文化財発掘調査等について（依頼）

初冬の頃、益々御清業のことと存じます。

平素は、伊丹市行政並びに伊丹市教育行政に何かと御協力を賜り誠に有難く厚く御礼を申し上げます。

さて、伊丹市は、共に生きる人間性豊かなまちづくりをめざして諸施策を推進しているところでございますが、個性ある都市の基盤を整備するにあたりまして埋蔵文化財調査等の必要性も高まりつつあります。

つきましては、今後の伊丹市におきます埋蔵文化財発掘調査など文化財保護行政に対し特段の御理解と御協力を賜りたく存じます。

よろしく御配慮の程、御願ひ申し上げます。

貴学園のますますのご発展を心からお祈りいたします。

記

1. 依頼内容 埋蔵文化財発掘等
2. 資料 別添

(埋蔵文化財発掘調査等について)

1. 調査依頼遺跡名及びその調査地区・対象面積
 - (1) 遺跡名 有岡城跡
 - (2) 調査地区・対象面積
国鉄伊丹駅前地区市街地再開発事業地区
伊丹市伊丹1丁目
1.65ha
2. 調査期間
○学校法人大手前女子学園と伊丹市教育委員会と協議の上決定する。
3. 調査委託
 - (1) 大手前女子学園に発掘調査を委託する。
 - (2) 大手前女子学園と伊丹市教育委員会の間で委託契約を締結する。
4. 調査費について
○大手前女子学園と伊丹市教育委員会と協議の上、決定する。
5. 資料 別添

第2節 認査組織と調査体制

本学園では、さきに北本町における第17次調査を担当したことであり、基本的には藤井健造前理事長（平成3年2月10日逝去）の「できる限り協力するように」という意向を帯し、日比野丈夫大手前女子大学学長を委員長とする「有岡城跡調査委員会」を組織して、これを受託することとなった。当初における組織は次の通りである。

有岡城跡・伊丹町 調査組織

有岡城跡調査委員会

	氏名	担当	役職
委員長	日比野丈夫		大手前女子大学学長
指導委員	今井林太郎	中世史	文学部長
"	若林喜三郎	近世史	教授
"	佐藤直市	"	大手前女子短期大学教授
"	宮川秀一	近代史	大手前女子大学講師
"	高橋正明	人文地理	助教授
調査委員	藤井直正	考古学	大手前女子大学教授
事務局長	田中正明		大手前女子短期大学会計課長

調査現場（事務所）

調査主任	藤井直正	
主任調査員	川口宏海	大手前栄養文化学院講師
〃	前川 要	名古屋大学大学院修士課程卒
調査員	細川佳子	大手前女子大学卒業生
〃	木本由恵	〃
〃	萩野典子	〃
〃	姫路真保	〃
事務員	川端千寿	〃

一方、この調査を完全に実施するためには、それに応ずるだけの体制づくりが必要であり、調査を実際に担当する調査員の確保につとめるとともに、調査期間および調査経費の保障をふくめて、埋蔵文化財の発掘調査の重要性を認識した上での強力な文化財行政の推進を希求する要望書を昭和61年2月3日付で市教育委員会に提出した。その文面は次の通りである。

昭和61年2月3日提出

伊丹市教育委員会委員長
佐坂茂男殿

埋蔵文化財発掘調査の受諾について

貴市におかれましては、益々ご発展の段およろこび申し上げます。日ごろは本学園のため何かとご支援・ご指導をたまり御礼申し上げます。

昨年末、標記の件につきましてご依頼を受けましたが、本学園といたしましては、基本的には学園の総力を挙げてご協力する所存でございます。ただし、内容の重要性に鑑み、関係者一同協議いたしました結果、別紙の通り要望書を作成いたしました。ご高覧の上、ご検討をたまりたいと存じます。

なお、ご依頼の件の受諾につきましては、この要望書に申し述べました事項に対して貴市からのご回答を得た上で、委託契約をさせていただきたいと存じますので、ご了承をたまりますようお願い申し上げます。

要望書

このたび、貴市において計画され、実施が予定されております国鉄伊丹駅前再開発事業の実施区域は、今さら申すまでもなく、貴市教育委員会が、昭和50年度以降、継続的に発掘調査を進められ、数々の重要な遺構を救出されたことにより、国の史跡に指定されている区域に隣接し、有岡城跡の中心部に当たっています。また、江戸時代の絵図を見ましても、本丸と堀を距てた西側は二の丸の部分であり、武家屋敷の立ち並んでいた場所であったこと、廃城後も伊丹郷町の中核となっていたところであったと想定されます。

こうした状況から、今回の事業実施区域は、全体が埋蔵文化財包蔵地であり面積16,500㎡の敷地全体にわたる発掘調査を行なった上で完全な記録を作成する必要があると考えます。これを仮に本学園が発掘調査を実施する場合、学界の影響の大きいことも予想され、その責任の重大さを痛感いたしますが、以上申し述べた見地から、下記のことを要望するとともに受諾の条件といたします。

記

1. 事業計画書によりますと、埋蔵文化財発掘調査の実施期間は1月から6月までの6ヶ月間が充当されていますが、いずれの機関が調査を行なう場合、学術的見地を立てて責任ある調査を遂行するためには、それでは困難であると考えられます。従って、貴教育委員会におかれましては「文化財保存のための調査が開発事業に先行する」という方針のもとに開発関係局および財政当局と十分な協議をたまり、必要な調査期間とこれを実施するために要する経費を確保していただきたい。
2. 発掘調査は、本学園内に設置する「有岡城跡調査委員会(仮称)」が貴市教育委員会および関係局と協議の上実施するものとする。
3. 発掘調査の実施に当たり、貴市教育委員会は兵庫県教育委員会の指導助言をふくめて、適切な行政指導と開発関係局との調整、協議により円滑に調査が遂行できるよう配慮していただきたい。
4. 差し当たって、昭和60年度に計上されている当該事業に伴う発掘調査委託料は、予算の範囲内で可能な面積について、昭和60年度中に実施することに充て、その区域と調査方法については、貴市教育委員会文化財担当者との協議の上決定するものとする。

以上

まず調査員としては、先の第17次調査に従事し、名古屋大学文学部大学院に在学中の前川 要君と、仏教大学大学院文学研究科博士課程の出身で、堺市教育委員会嘱託として、堺環濠都市遺跡の発掘調査に従事した経歴をもつ川口宏海君の二人を充てることができた。日比野学長のお計らいで前川君は大学の研究嘱託として、また川口君は大手前染業文化学院講師に採用してもらった上、その側ら本調査に当たる方策を講じていただくことができた。

こうして調査の陣容を整え、昭和60年度には、第Ⅰ区882㎡を対象とする発掘調査(第23次)を皮切りに、以後昭和61年12月に至るまで、さまざまな問題をかかえる苦難に満ちた発掘調査を開始したのである。市教育委員会のご配慮により、国鉄伊丹駅東側の市有地を一部拝借し、プレハブ2階建の調査事務所を設置し、ここが調査の根拠地となった。

昭和61年度は、第1表にまとめたように、4回に分けて事業の委託を受けたが、そのうち第24次と第40次は、国の史跡に指定されている有岡城跡主郭部分西側に存在すると見られる堀跡の確認調査で、昭和54年度の史跡指定に当たって保留されていた事項である。史跡指定区域と再開発区域との境界を定める上で重要な事項であり、この調査も合わせて委託を受けた。この調査の成果によって、堀跡の遺存状態がわかり、主郭の西側のラインが決定し、昭和63年5月19日付をもって追加指定が行なわれた。

調査全体がこのように分断することになったのは、先にも述べたことであるが、全体として発掘調査を実施する計画が立てられておらず、状況に応じて必要とみとめた部分だけを発掘調査するという場当たり的な対応の仕方であったことの結果である。従って、比較的広い面積にわたって発掘調査を実施することができたのは、

第23次 882㎡

第27次 716㎡

第35次 525㎡

の計2,123㎡が、相互に隣接したまとまった範囲で、面としてとらえることのできた区域である。

この区域の中では、有岡城時代と考えられる堀・溝を検出し、有岡城が主郭部分だけではなく、それより外に出た区域においても縦横に堀をめぐらしていたことが明らかになった。さらに第23次調査では、これらとは方向のちがった堀があり、これが一時期をさかのぼる伊丹城時代の構築であることも推定できることになった。

これらの遺構は、伊丹台地を基盤として営まれた伊丹城と有岡城が平面的に見た場合には重なり合っており、さらに廃城後に営まれた伊丹郷町の遺構がその上に全区域にわたって遺存していることが明らかになった。また道路の付替に伴って実施した第36次・第38次調査では、天正2年(1574)の荒木村重の築城当時から現在地に存在している日蓮宗本泉寺の外郭にも堀の囲繞していたことを推測できる遺構の一部を検出した。

今回の調査全体を通じて、大手前女子学園有岡城跡調査委員会が担当した発掘調査区域の総面積は3,438㎡であるが、このほかに主郭南方、および第27次調査区の西側に隣接する区域については、市教育委員会によって実施されている。これの担当者は、昭和54年以来、市教育委員会嘱託として埋蔵文化財調査を主導されて来た浅岡俊夫氏と、その退任後は小長谷正治氏にかわったが、これらの調査区域および調査面積は第1表に示した。

第1表 事業実施経過一覧表

- 事業名称 国鉄伊丹駅前市街地再開発に伴う埋蔵文化財調査
- 対象 有岡城跡および伊丹郷町
- 実施地域 兵庫県伊丹市伊丹1丁目

年度	順番	回数	区域	経費	面積	期間	内容
昭和60年度	1	第23次調査	第Ⅰ区	15,000,000円	882㎡	昭和61.2.17～6.15	建造物敷地の全面発掘
昭和61年度	2	第24次調査	第Ⅱ区	35,000,000円	326㎡	昭和61.5.2～6.15	内郭掘跡の確認調査
	3	第27次調査			716㎡	昭和61.7.1～8.10	建造物敷地の全面発掘
	4	第30次調査			280㎡	昭和61.7.24～8.28	#
	5	第33次調査			200㎡	昭和61.8.18～8.30	トレンチによる一部調査
	6	第35次調査	第Ⅴ区	6,000,000円	525㎡	昭和61.9.7～10.31	建造物敷地の全面発掘
	7	第36・38次調査		4,300,000円	205㎡	昭和61.10.18～11.15 10.28	道路付替部分の全面発掘
	8	第40次調査		2,484,000円	304㎡	昭和61.11.18～12.2	内郭掘跡の確認調査(追加)
	総計				62,784,000円	3,438㎡	

大手前女子学園有岡城跡調査委員会

これらのすべての面積を合わせても、開発区域全体の16,500㎡のうち、何分の1に過ぎない。これらの調査成果を総合すると、有岡城主郭から堀を距てた西側に、多くの堀や溝に囲まれた曲輪的性格をもつ区域が存在することが明らかになった。この区域には、現在においても大手町・殿町等の地名を残していることから、有岡城時代においては、武家屋敷等の立ち並ぶ侍町であった可能性が大きい。そして、いわゆる大溝筋を距てたさらに西側の町屋の区域とは截然と区画されていたと言うことが考えられることになった。天正7年(1579)の廃城後は空地としてのこされ、17世紀以後に伊丹郷町に組み入れられて行ったのであろう。

調査参加者名簿

■外乗の部

大手前女子大学	熊田真子	小林賢子	辻初美		(18期生)
	泉本美奈	大野友世	島田聖	高橋里美	谷のり之
	谷口美恵子	松田公見子			(19期生)
	高比良恵	竹安智美	橋本和実	榎本亜佐	山口薫
					(20期生)
大阪教育大学	阿部みゆき	石倉伸一郎	大戸満成	大西久	橋田正徳
	小林久倫				
大阪商業大学	平本雄士	堀本英嗣	松田研	安原祐	山田博
	吉川博之				
大阪産業大学	山口裕				
大阪学院大学	伊藤秀樹				
桃山学院大学	大野政治				

■内乗の部

大手前女子大学	赤松和佳	磯部敦子	川嶋由紀子	庄司啓子	東口智子
					(21期生)
	石田幸子				(22期生)
	石田有紀	石永光	浦部綾子	江川奈緒美	梶井俊子
	片桐千夏	古賀慎子	酒井亮子	鮎島直美	竹林真智子
	竹村三葉	田中稔子			(23期生)
	梶陽子	木南アツ子	近藤綾	田中由華	谷本良子
	南都小百合	望月祥代	山崎晴世	山下みゆき	渡辺浩子
					(24期生)
大手前女子短期大学	浅岡まゆみ	伊瀬さとみ	今井紀美子	江頭明子	小川由美子
	奥村裕美子	角谷明子	木村仁美	坂田留美	中田五子
	平野美紀	福田富美子	堀内康子	三浦亜紀	山野留美
大手前文化学院	秋山典子	沢井由加利	杉本加奈子	高吉育子	業山かおる
	堀池朱美	森岡美千子			
大阪教育大学	片木靖典	佐々木六	中川久志	藤田宏樹	山下照雄
大阪電気通信大学	高塚正也				

第3章 調査の方法

第1節 調査区割と図面割

1. 調査区割

有岡城跡・伊丹郷町は、南北約1.7km、東西約0.8kmを測る広大な都市遺跡である。本書の調査までに、東側の現JR伊丹駅付近の主郭部を中心として、すでに22次の調査が行われている。また、以後も大規模再開発を行うことが確実であったため、遺跡の範囲全体にわたる総合的な調査区割の設定が必要であった。そこで、以下の方法で調査区割を設定することにした。

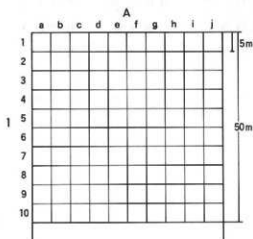
まず区割の基軸線は、後述する図面割とスムーズに一致させ、なおかつ活用しやすいものとするため、国土座標を用いることにした。また、その基点は、伊丹市で作成されている1/500の道路台帳のうち、遺跡範囲の北西部にかかる図面の北西端 ($X = -134,400\text{m}$, $Y = +99,800\text{m}$) に設定した。

現地調査では、5m方眼グリッドを基本とし、これを最小単位とした。また、これと図面割との整合性の良い50m方眼の大区画を上位の区割とし、北西の基点から東西横列をA・B・C～X、南北縦列を1・2・3～36とし、A1、B2などと呼称することにした(第3図)。さらに、そのなかの最小単位の5mグリッドをそれぞれの50m大区画の北西隅から東西横列をa・b・c～j、南北縦列を1・2・3～10とし、a1、b2などと呼称することにした(第1図)。したがって、最終的に各5mグリッドは、A1-a1、B2-b2と呼称することにした。

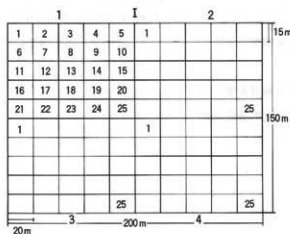
2. 図面割

調査は緊急性を伴っており、後述する航空測量による平面図作成を必要としたため、調査区割とは別に図面割を設定することにした。

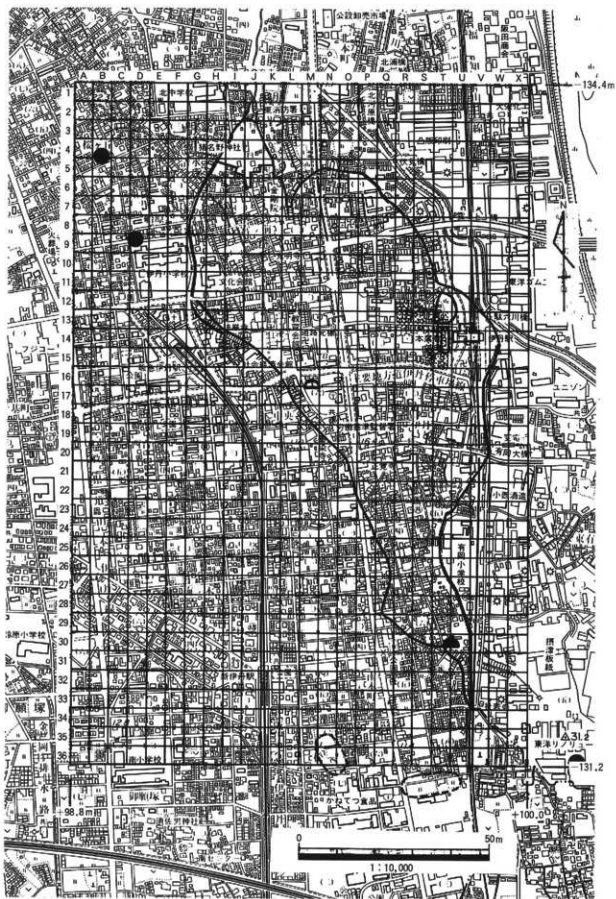
これも、調査区割と基点を同じくし、1/500の道路台帳を大区画としてそのまま用いた(第4図)。ただ、調査区割とは異なり、地図一般の呼称方法にしたがって一枚毎に番号を与え、北西隅よりA・I・W…と呼称することとした。



第1図 5m方眼区割図



第2図 1/20測量図面区割図



第3图 有岡城跡・伊丹町調査区割図(網：調査対象区域)



第4図 有岡城跡・伊丹町町面割図(網：調査対象区域)

さらに、広域の遺構のつながりを見るため、下位に1/250、1/100の図面を作成することを前提としてそれぞれを4分割し、1/250はI~IV、1/100は1~4と呼称することにした。また、最小単位は1/20図面とし、1/100図面を25等分して、北西隅より1~25と呼称することにした(第2図)。したがって、最終的に各1/20図面はA・I-1・1、I・II-1・25などの番号で呼称することにした。

第2節 基準点と水準点の設置

基準点設置は航空測量会社に委託し、以下の方法で取り付けを行った。まず、小西酒造屋上のポイントから北中学校屋上のポイントを望み、JR駅前の西側の公園に基1を設置する。次に、調査区域中央を南北に縦断する道路にT-2、仮BM、T-4のポイントを設置し、これから各調査区に5m方眼の木杭を設けた。

水準点は、旧市庁舎前のNo.14の最新的水準値、昭和53年のT.P=16.640mをもととし、仮BMまで移した。さらに、これを大阪湾岸であることを考慮してO.P換算し(T.P+1.3m)、仮BM水準値17.914mとして各調査区への直接のBMとした。

それぞれの成果は、第5図の通りである。

第3節 調査の方法

1. 現地調査の方法

調査にあたっては、時間的制約からやむおえず上層の近世遺物包含層を機械によって掘削し、おもに最終面を調査対象として人力による遺構掘削を行った。

平面図作成にあたっては、狭い調査区は1/20手書き図面と1/40平板測量を行い、広い調査区はアドバラー



第5図 国土座標基準点・水準点網図

ンによる航空測量を用いた。断面図は1/20の手書き図面を作成した。また、これとともに35mm小型、6×7中型、5×7大型カメラにより、随時写真撮影を行った。全体写真撮影には、固定ローリングタワー5～6段を1～2基設置して行った。

2. 整理事業の方法

出土遺物はコンテナ箱にして約2,000箱という膨大な量に上った。したがって、整理事業は3箇年計画とし、平成元年4月より土器洗浄から始め、ネーミング、接合、復元、遺物実測、写真撮影の順に進めた。遺物実測は1/1スケールの図を基本とした。また、写真撮影は6×7中型、5×7大型カメラを用いた。報告対象は、遺構の重要性と遺物の器種構成がよくわかるものを中心として選定した。



第23次調査風景

第4章 調査の成果

第1節 はじめに

有岡城跡・伊丹郷町は、伊丹市から川西市にかけて南北に延びる洪積段丘、伊丹台地の上に立地する。東側は猪名川によって開析され、比高差3～4mの段丘崖をなす。頂部の海拔高は、O.P=20m前後を測る。遺跡の規模は、南北約1.7km、東西約0.8kmを測り、堀と土塁で囲まれた「惣構え」をなす城として著名である。

昭和54年には、主郭部およびその輪郭ラインなどが史跡指定を受けている。発掘調査はそれに先立つ昭和50年から続けられ、本件の調査までに22次の調査が行われている。過去の調査では、おもに在城期すなわち南北朝期の在地土豪伊丹氏の時代から、天正二年(1574)代わって城主となった荒木村重の時代、および、天正七年(1579)に落城後城主となり、同十一年(1583)まで当地を領有した池田之助(元助)の時代から近世の伊丹郷町時代の遺構・遺物が出土している。

本件の調査は、前述のごとくJ R伊丹駅前再開発事業(対象面積約16,000㎡)に伴う緊急調査として、大手前女子学園が伊丹市より委託を受け、学園内に調査委員会(日比野丈夫委員長)を組織して行ったものである。このうち、後述する第24・30・36・38次と次回報告予定の第27・35・40次のあわせて9件の調査を本学園が行っており、調査総面積は3,438㎡に上る。

この地域の遺構・遺物は、前述したごとく、基本的に中世の在城期と近世の伊丹郷町期の2時期に大別できる。さらに、在城期は、

I期 伊丹氏の伊丹城期

II期 荒木村重の有岡城期および池田之助(元助)の伊丹城期に細分できる。

伊丹郷町期は、おもに江戸時代後期のものを中心とし、調査区によって数時期の変遷がたどれる。これをIII期とし、このうちの小さな変遷をIII-A、B、C…と表すこととする。また、近代はIV期とし、以下の時期区分に沿って記述する。

第2節 第23次調査

第23次調査は、再開発対象地のうち、主郭部の西側に位置する882mを対象として行ったものである。調査区一帯は近世にかなり削平されたこととみえ、在城期の遺構は堀や井戸など深いものだけが残っており、建物は残念ながら検出されなかった。

1. 基本層序

この付近の堆積土は、基本的に伊丹台地を形成する洪積層の伊丹礫層の上に0.3~0.5mの明黄褐色粘質土層（第1図—北壁第48層）が堆積し、この層までが無遺物層すなわち地山である。地山は南西側ほど高く、主郭部北側の谷地形の北東側に向かって傾斜しており、調査区南西端でO.P=17.850m前後、北東端でO.P=17.450m前後を測る。地山上面では、16世紀後半以前の遺構が検出される。これより上層は、江戸時代を中心とする伊丹町期（盛土および整地土）である。これは、2~3層に大別できる。下層より、

①褐色ないし明黄褐色系砂質土層（第1図—第60・94・115層、第2図—第25層など）

②にぶい黄褐色砂質土ないし褐色粘質土（第1図—第51・109層など）

となる。①はあまり遺物を含まず、畑の耕作土と考えられる土質をしている。②も遺物は少ない。江戸時代後期の遺構は①の上面および②の上面から切り込まれている。

2. I期の遺構と遺物

この伊丹城期の遺構はどの調査区でも少なく、当時の姿を詳細に復元するに至らない。ここでは、調査区東端に位置する井戸SE06と中央で検出した斜めに伸びる堀SF03がある。

SE06

SE06（第4図）は直径1m、深さ3.02mを測る。中程からえぐれ、最大径は1.24mを測る。

出土遺物は、少ない（第5図）。1は、和泉型瓦器碗である。口径（推）13.2cm、器高3.2cm。2は、瓦器三足釜である。口径26.6cm、器高（残）10.2cm。いずれも、13世紀末から14世紀前半頃のもので、井戸もこの時期のものと考えられる。

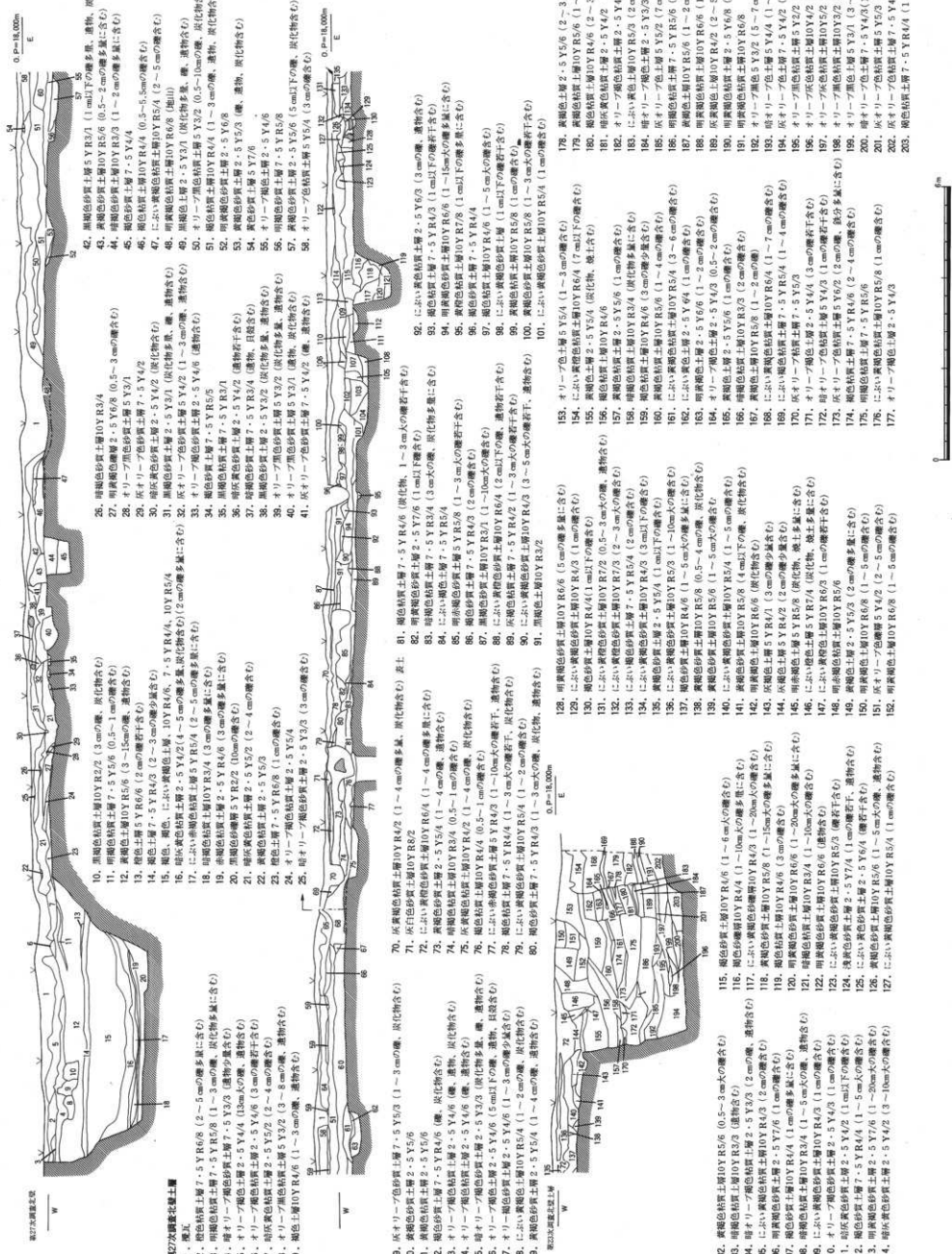
SF03

SF03（第6図）は全長20.15m、幅4.4m、深さ2.01mを測る。

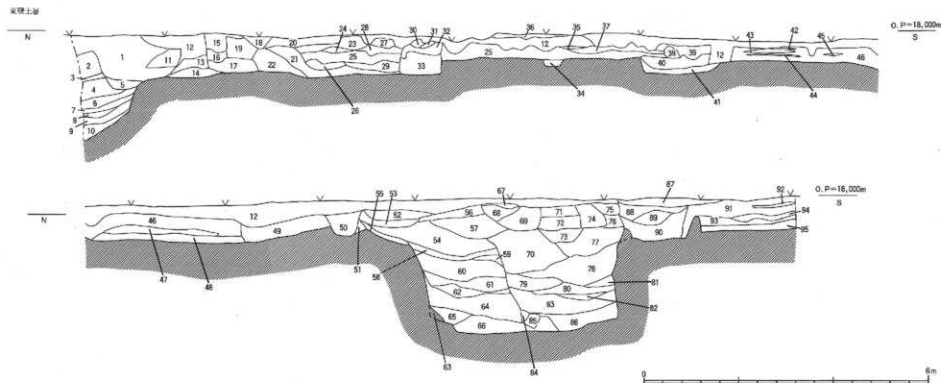
断面は逆台形のいわゆる箱堀であるが、北側より南側が角度が緩やかになっている。埋土は華大の礫と粘質土が互層をなしており、南側から埋め戻された状況を示す。これはまた、土塁に用いられていた土の可能性があり、その場合、南側に土塁があったことになる。帯水していた痕跡はうかがえず、空堀であったと考えられる。

出土遺物（第7図）は、極めて少ない。1は、巴文軒丸瓦である。瓦当部径18.4cm、残存長17.2cmを測る大型の軒丸瓦である。2は、備前焼甕。3は、瓦質土器甕である。口径（推）29.4cmを測る。口縁部は折り返され逆台形である。このほか13世紀代の中国製の口剥げ白磁皿の小片が出土している。

この堀は、後述するII期の堀とは方向が全くことになっており、II期のSF02とSD10に切られている。また、遺物に新相のものを含まないところから、正確な時期は比定できないが、16世紀中頃からII期の始まり、すなわち天正二年（1574）までの期間に営まれたものと考えられる。



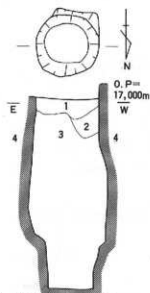
第23 図 野次間流土質図



東壁土層

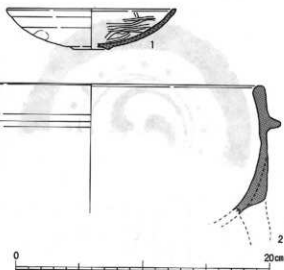
1. におい黄褐色砂質土層10Y R6/4 (0.5~7cmの總含む)
2. 黄褐色粘質土層10Y R4/3 (0.5~2cmの總多量、炭化物含む)
3. におい褐色粘質土層7.5 Y R5/4 (0.5~2cmの總含む)
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 (0.5~10cmの總含む)
5. におい黄褐色土層10Y R6/4 (0.5~4cmの總多量を含む)
6. オリーブ褐色粘質土層2.5 Y R4/6 (1~5cmの總多量を含む)
7. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6 (1cmの總、鉄分含む)
8. 明黄褐色土層2.5 Y 6/8 (3~7cmの總多量、鉄分若干含む)
9. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8 (2cmの總若干、水分含む)
10. 灰オリーブ粘質土層7.5 Y 4/2 (3~10cmの總多量、遺物含む)
11. 黄褐色土層2.5 Y 5/6 (遺物、0.5~3cmの總含む)
12. オリーブ褐色土層2.5 Y 4/6 (0.5~4cmの總多量、遺物含む)
13. 黄褐色粘質土層10Y R7/8 (0.5~2cmの總多量、遺物含む)
14. 明黄褐色土層10Y R6/8 (0.5~2cmの總多量、遺物含む)
15. 黄褐色土層2.5 Y 6/1 (1~6cmの總若干含む)
16. におい黄褐色土層10Y R7/4 (1~2cmの總若干含む)
17. 明黄褐色砂礫層10Y R7/6 (1~3cmの總若干、遺物含む)
18. 混泥
19. 淡黄褐色土層10Y R8/4 (1~3cmの總若干含む)
20. 灰白色土層7.5 Y R8/2 (1~5cmの總若干含む)
21. 暗灰色土層2.5 Y 4/2 (遺物、1~4cmの總多量を含む)
22. 灰白色土層2.5 Y 6/2 (遺物、1~10cmの總若干含む)
23. 灰白色土層2.5 Y 7/1 (遺物、1cmの總若干含む)
24. 明黄褐色土層10Y R6/8 (1~3cmの總若干含む)
25. 灰黄褐色土層10Y R6/2 (遺物、1~4cmの總若干含む)
26. 灰黄色土層2.5 Y 7/2
27. 灰黄色粘質土層5 Y 8/1 (2cmの總若干含む)
28. 明黄褐色土層10Y R7/6 (1~5cmの總若干含む)
29. 灰白色灰層7.5 Y R8/1 (15cmの總若干含む)
30. におい黄褐色土層10Y R6/4 (1~3cmの總若干含む)
31. におい黄褐色土層10Y R6/4 (1~3cmの總若干含む)
32. におい黄褐色土層10Y R6/3 (遺物、1~4cmの總若干含む)
33. 灰白色粘質土層2.5 Y 5/1 (遺物、1~30cmの總若干含む)
34. オリーブ褐色粘質土層2.5 Y 4/3 (1~6cmの總若干含む)
35. 灰白色土層2.5 Y 8/1 (7cmの總若干含む)
36. 灰白色土層2.5 Y 8/2 (1~3cmの總多量、遺物含む)
37. 淡黄褐色土層10Y R8/3 (1~4cmの總若干含む)
38. 灰白色土層10Y R8/1 (1~4cmの總若干含む)
39. 淡黄色土層2.5 Y 7/3 (1~6cmの總若干含む)
40. におい黄褐色土層10Y R7/3 (1~5cmの總若干含む)
41. 黄褐色粘質土層2.5 Y 5/3 (1~3cmの總若干含む)
42. 灰白色土層2.5 Y 7/2 (遺物、1cmの總若干含む)
43. 褐色土層7.5 Y R7/6 (1~3cmの總若干含む)
44. 淡黄色土層2.5 Y 8/4 (1cmの總若干含む)
45. 淡黄色土層2.5 Y 8/3 (遺物若干含む)
46. 灰白色粘質土層10Y R8/1 (1~15cmの總多量を含む)
47. 明黄褐色砂層10Y R6/6 (1~15cmの總多量を含む)
48. 黄褐色土層7.5 Y R7/8 (1~3cmの總多量を含む)
49. 灰白色粘質土層10Y R7/1
50. 暗オリーブ色粘質土層5 Y 4/3 (炭化物、1~2cmの總多量を含む)
51. 褐色粘質土層7.5 Y R4/6 (1~10cmの總若干含む)
52. 淡黄色粘質土層2.5 Y 7/3 (10cmの總多量を含む)
53. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3 (1cmの總多量を含む)
54. 明褐色粘質土層7.5 Y 5/6 (1~5cmの總多量、遺物含む)
55. におい赤褐色粘質土層5 Y 5/3 (1~3cmの總多量を含む)
56. 淡黄色砂質土層10Y R5/4 (1~3cmの總若干含む)
57. 褐色粘質土層7.5 Y R6/6 (2~5cmの總若干含む)
58. 灰黄褐色粘質土層10Y R6/2 (3cmの總若干含む)
59. 明灰色粘質土層10Y R4/1 (2~3cmの總若干含む)
60. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6 (1~3cmの總多量を含む)
61. 褐色砂質土層10Y R4/4 (1~3cmの總多量を含む)
62. 褐色粘質土層10Y R4/6 (1~3cmの總若干含む)
63. 明黄褐色土層2.5 Y 5/6 (地山)
64. 褐色、オリーブ灰色粘質土層10Y R4/6、10Y 6/2 (2cmの總若干含む)
65. 褐色粘質土層10Y R4/8 (3.5cmの總若干含む)
66. 明褐色粘質土層10Y R3/1 (2cmの總多量を含む)
67. におい黄褐色粘質土層10Y R6/4 (3~20cmの總若干含む)
68. 淡黄色粘質土層2.5 Y 7/4 (1cmの總若干含む)
69. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3 (1~5cmの總若干含む)
70. 褐色砂質土層10Y R4/4 (1~10cmの總若干含む)
71. におい黄褐色粘質土層10Y R7/3 (1~3cmの總若干含む)
72. 褐色粘質土層7.5 Y 6/6 (1~6cmの總多量を含む)
73. におい赤褐色粘質土層10Y R5/4 (1~3cmの總若干含む)
74. におい黄褐色土層10Y R4/3 (1~3cmの總多量、遺物含む)
75. 明黄褐色粘質土層10Y R7/6 (遺物含む)
76. におい黄褐色粘質土層10Y R7/4 (1~5cmの總若干含む)
77. 明黄褐色粘質土層10Y R5/4 (1~5cmの總若干含む、炭土、炭化物含む)
78. 灰黄褐色粘質土層10Y R5/2 (1~3cmの總若干含む)
79. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3 (1~10cmの總多量を含む)
80. 明褐色粘質土層7.5 Y R5/8 (2cmの總若干含む)
81. 明褐色粘質土層7.5 Y 5/2 (1~2.5cmの總若干含む)
82. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6 (1~3cmの總若干含む、細砂含む)
83. 明黄褐色粘質土層10Y R4/3 (炭化物、粘土多量、1~10cmの總若干含む)
84. 灰白色粘質土層10Y R4/1 (2cmの總若干含む)
85. 褐色粘質土層7.5 Y R4/6 (2cmの總若干含む)
86. 明褐色粘質土層7.5 Y R3/1 (炭化物多量、3cmの總若干含む)
87. 黄褐色、灰白色粘土層10Y R7/8、2.5 Y 5/1
88. 明褐色土層7.5 Y R5/8 (遺物、1~10cmの總若干含む)
89. 明褐色粘質土層7.5 Y R5/8 (遺物若干、15~20cmの總多量を含む)
90. 明黄褐色土層10Y R4/2 (遺物、1~10cmの總若干含む)
91. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3 (1cmの總多量を含む) 表土
92. 褐色粘質土層10Y R8/6 (3cmの總若干含む)
93. 暗灰色粘質土層10Y R5/1 (1~3cmの總多量、炭化物、遺物含む)
94. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4 (1~2cmの總多量を含む)
95. 褐色粘質土層10Y R4/4 (2~5cmの總多量を含む)

第2図 第23次調査東壁土層

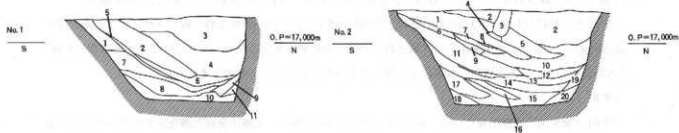


1. 褐色粘質土層10Y R4/6
2. 黄褐色粘質土層10Y R5/6
3. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/8

第4図 SE06遺構図



第5図 SE06出土遺物



No.1 土層

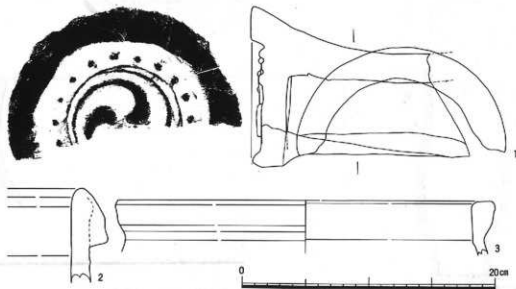
1. 黄褐色土層 2・5 Y5/6 (0.5~1cmの礫多量に含む)
2. におい褐色砂質土層10Y R5/4 (0.5~3cmの礫多量に含む)
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (2~11cmの礫含む)
4. 黄褐色礫層 2・5 Y5/6
5. 褐色粘質土層10Y R4/6 (1~4cmの礫多量に含む)
6. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 (2~4cmの礫含む)
7. 暗褐色粘土層10Y R3/4 (2~10cmの礫含む)
8. 黄褐色粘土層 2・5 Y5/6 (5cmの礫含む)
9. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y3/3 (1cmの礫含む)
10. 暗灰黄色粘土層 2・5 Y4/2 (4~13cmの礫含む)
11. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/3 (3.5cmの礫含む)

No.2 土層

1. におい赤褐色土層 2・5 Y R4/3 (1~7cmの礫多量に含む)
2. 灰褐色礫層 5 Y R5/2 (1~15cmの礫多量に含む)
3. 灰色土層 N4/0 (5cm以下の礫、遺物若干含む)

4. 褐灰色礫層 5 Y R4/1 (1~3cmの礫若干含む)
5. におい黄褐色土層10Y R6/3 (0.5~5cmの礫若干含む)
6. におい黄褐色土層10Y R5/4 (0.3cm~1cmの礫多量に含む)
7. におい黄褐色土層10Y R6/4 (1~3cmの礫若干含む)
8. 灰褐色土層 7・5 Y R5/2 (2~5cmの礫多量に含む)
9. 褐色土層 7・5 Y R4/4 (1~4cmの礫多量に含む)
10. 褐灰色礫層10Y R5/1 (1~10cmの礫多量に含む)
11. 黄褐色土層10Y R5/6 (1~3cmの礫若干含む)
12. 明赤褐色粘質土層 2・5 Y R5/6
13. 黄灰色粘質土層 2・5 Y R5/1 (1~8cmの礫多量に含む)
14. 黄褐色土層10Y R5/8 (0.5~4cmの礫若干含む)
15. 灰褐色粘質土層 2・5 Y4/1 (2~5cmの礫多量に含む)
16. 明黄褐色土層10Y R6/6
17. におい黄褐色土層10Y R6/4 (3cmの礫若干含む)
18. 灰黄褐色土層10Y R6/2 (2cmの礫若干含む)
19. におい黄色土層 7・5 Y R6/3 (1~3cmの礫若干含む)
20. 灰褐色土層 2・5 Y6/2 (3~5cmの礫若干含む)

第6図 SF03 土層図



第7図 SF03出土遺物

3. II期の遺構と遺物

この時期の遺構としては、現行道路に沿って延びる堀SF02、これと斜めに結合するSF01、SF02と方向を同じくする溝SD10がある。SD10とSF02の間は6m、SD10とSF01の間は2.1mを測る。

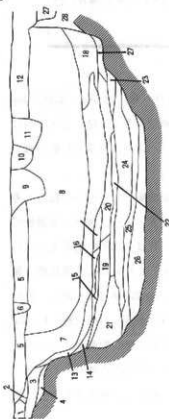
SF01とSF02の南側、SD10の南側には埋没時の埋土に10~20cmの焼土層が観察され、天正七年(1579)の落城の際、【信長記】(池田家本)に「城と町との間に侍町御座候、これをハ火をかけたか城になされ候」(八木哲造1978年)とある織田信長軍による焼き打ちの結果形成されたものと考えられる。

SF01

SF01(第8図)は検出長12.6m、幅5.6m、深さ2.4mを測る。東側は第40次調査SF03とつながり、南側は第38次SF03、第36次SF01につながる、斜めに折れながら続く箱堀である。埋土は最下層・灰色系泥質土層(第8図Na1-第21・24・25層)、中層・焼土層(同図Na1-第13~18層)、上層・黄色粘質土と準大の礫の互層(同図Na1-第7・8層)の3層に大別できる。最下層の泥質土は、浅いながら帯水していたことを示す。上層はSF03の場合と同様に、土壌土を用いた可能性がある。遺物は、中・下層からまとまって出土している。下層の泥質土層の上面には、竹根や薄い板状の削りくずなどが堆積し、下方からは漆器や木製品などが出土した。また、中層のSF02との交点では、北西側から投棄された状態で多量の屋瓦を検出した。したがって、建物の正確な位置は不明ながら、この調査区の中央部から第27次調査区にかけての区域にあったものと考えられる。

出土遺物(第11~19図)には、多くの屋瓦や土師質土器皿などと共に、中国製陶磁器が多く見られる。また、国産陶磁器には、茶陶として用いられたと考えられるものも多く見られる。また、屋瓦は量的に見て、門などに用いられたか、軒先を中心に葺いてあったか、いずれにしても大型の総瓦葺建物に用いられるほどの数ではない。その型式は、主郭部出土品と共通するものがある。後述するSF02出土品も同じ区域のものであり、これらの出土品は主郭部に匹敵する質を備えている。

第11図-1~5・21は、中国製輸入陶磁器。白磁は碗・皿共に出土しているが、圧倒的に皿が多い。1・2は、白磁皿である。1は口径(推)11cm、器高2.3cmを測る。底部は、碁笥底である。2は、口径(推)12.1



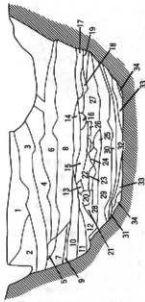
SF01 No. 1

1. におい黄褐色粘質土層10YR5/2 (1cm程度の礫多量, 炭化物若干含む)
2. におい褐色土層7・5 YR6/4 (1~3cm程度の礫, 炭化物若干含む)
3. 褐色土層7・5 YR6/6 (1cm程度の礫, 炭化物若干含む)
4. 褐色土層7・5 YR7/6 (1cm程度の礫, 炭化物若干含む)
5. 灰色粘質土層10Y7/1 (礫, 炭, 炭化物若干含む)
6. におい褐色土層7・5 Y5/3 (1~3cm程度の礫, 炭化物若干含む)
7. 黄褐色粘質土層10YR6/6 (礫多量に含む)
8. 明褐色粘質土層10YR5/6 (礫多量に含む)
9. 明オレンジ灰粘質土層5 G Y7/1 (0.5~20cm大の礫含む)
10. 緑灰色粘質土層10G Y5/1 (礫若干, 炭化物多量に含む)
11. オリーブ灰色粘質土層2・5 G Y5/1 (0.5~20cm大の礫含む)
12. 明黄褐色粘質土層10YR6/6 (2cm程度の礫多量含む)
13. におい褐色土層2・5 YR6/3 (1~2cm程度の礫, 炭化物若干含む)
14. におい褐色土層7・5 YR5/3 (1~3cm程度の礫, 炭化物若干含む)
15. 明褐色土層7・5 YR5/6 (1~3cm程度の礫, 炭化物若干含む)
16. におい褐色土層5 YR6/4 (1cm程度の礫, 炭化物若干含む)
17. におい黄褐色粘質土層10YR7/3 (1~20cm程度の礫, 炭化物, 焼土若干含む)
18. 褐色粘質土層7・5 YR4/3 (1~5cm程度の礫, 炭化物, 焼土若干含む)
19. におい赤褐色, におい黄褐色, 5 YR5/3, 10YR6/3粘質土層 (1~3cm程度の礫若干含む)
20. におい黄褐色粘質土層10YR7/2 (2~10cmの礫, 炭化物若干含む)
21. 灰黄色粘質土層10YR6/2 (1~6cm程度の礫多量, 炭化物)
22. オリーブ黄褐色粘質土層5 Y6/3 (2~5cm程度の礫, 炭化物, 焼土若干含む)
23. におい黄褐色粘質土層10YR7/4 (1~15cm程度の礫多量に含む)
24. 灰色粘質土層5 Y4/1 (炭化物多量に含む)
25. 灰色粘質土層5 Y5/1 (1~4cm程度の礫含む)
26. 黄褐色粘質土層10B G6/1 (1~10cm程度の礫含む)
27. におい黄褐色粘質土層10YR7/4 (1~15cmの礫多量に含む)
28. 浅灰色粘質土層2・5 Y7/4 (0.5~2cmの礫多量に含む)
29. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/2 (2cm程度の礫, 炭化物, 炭を含む)

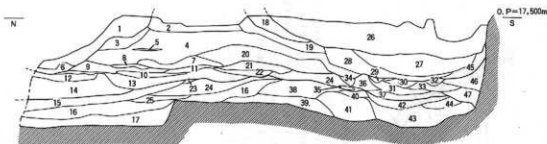
SF01 No. 2

1. 浅灰色粘質土層7・5 Y7/A (2~10cmの礫多量に含む)
2. 灰黄色粘質土層7・5 YR4/2 (1~10cmの礫若干含む)
3. 褐色粘質土層7・5 YR4/3 (3cm大の礫多量に含む)
4. 褐色粘質土層7・5 YR6/6 (1~10cmの礫多量に含む)
5. 明褐色粘質土層7・5 YR6/8 (2~6cmの礫含む)
6. におい黄褐色粘質土層10YR6/4 (10cm大の礫多量に含む)
7. 黄褐色粘質土層10YR5/8 (1~7cmの礫多量に含む)
8. 黄褐色粘質土層10YR5/6 (3~10cmの礫多量に含む)
9. 灰黄色粘質土層10YR6/2 (1~5cmの礫若干含む)
10. 明褐色粘質土層7・5 YR5/6 (10cm大の礫, 細砂多量に含む)
11. におい褐色粘質土層7・5 YR5/4 (1~5cmの礫多量, 細砂含む)
12. 褐色粘質土層7・5 YR4/4 (2~5cm大の礫多量, 細砂含む)
13. 暗黄褐色粘質土層2・5 Y5/2 (1~3cmの礫, 炭化物若干含む)
14. 赤褐色粘質土層5 YR4/8 (2~5cm大の礫多量, 細砂含む)
15. 暗赤褐色粘質土層5 YR3/6 (2~10cmの礫含む)
16. 灰色粘質土層7・5 Y4/1 (1cm程度の礫若干含む)
17. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/1 (1cm大の礫含む)
18. 褐色粘質土層10YR4/6 (1~5cm大の礫, 炭化物多量に含む)
19. 灰黄色粘質土層5 YR4/2 (1~3cmの礫若干含む)
20. 灰黄色粘質土層10YR5/2 (1cmの礫, 炭化物若干含む)
21. 灰黄色粘質土層10YR8/2 (1cm大の礫, 炭化物含む)
22. におい黄褐色粘質土層10YR3/3 (1cmの礫若干, 炭化物含む)
23. 暗灰黄色粘質土層2・5 Y4/3 (1cm大の礫含む)
24. 灰色粘質土層10Y4/1 (1cmの礫若干含む)
25. 褐色粘質土層5 YR4/1 (1cmの礫若干含む)

第 8 図 SF01 土層図



26. 暗灰色粘質土層10YR4/1 (1cmの礫若干含む)
27. 灰色粘質土層5 Y4/1 (2~6cmの礫若干含む)
28. 褐色粘質土層7・5 YR4/1 (1cm大の礫)
29. におい黄褐色粘質土層10YR3/3 (3~10cmの礫多量, 細砂含む)
30. 褐色土層7・5 G Y5/1 (1~5cmの礫含む)
31. 明褐色粘質土層10YR3/1 (1cm大の礫含む)
32. 暗灰色粘質土層2・5 Y4/1 (2~7cmの礫若干含む)
33. 褐色粘質土層10YR5/1 (2~5cmの礫多量に含む)
34. 褐色粘質土層7・5 Y4/6 (3cm大の礫, 細砂含む)



1. 明赤褐色砂質土層 2・5 YR5/6 (炭化物, 1~10cm大の礫多量, 遺物含む)
2. におい黄褐色砂質土層 10YR6/3 (1~10cm大の礫多量含む)
3. 灰黄色砂質土層 2・5 Y7/2 (10cm大の礫含む)
4. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (3~10cmの礫多量, 遺物含む)
5. 灰色砂質土層 5 Y6/1 (1cm大の礫若干含む)
6. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6 (1~5cmの礫若干, 遺物含む)
7. におい黄褐色砂質土層 10YR5/4 (3~5cmの礫若干含む)
8. におい黄褐色粘質土層 10YR4/3 (炭化物, 渣土多量, 1cm大の礫若干含む)
9. 灰黄褐色粘質土層 10YR5/2 (1~3cmの礫若干含む)
10. 灰黄褐色粘質土層 10YR6/2 (3~10cmの礫若干含む)
11. 黄褐色粘質土層 10YR5/6 (1cm大の礫若干, 炭化物, 焼土含む)
12. 灰黄褐色粘質土層 10YR5/2 (1~10cmの礫多量を含む)
13. 明黄褐色砂礫層 2・5 Y6/6 (1~10cmの礫多量を含む)
14. 褐色粘質土層 10YR4/1 (5cm大の礫含む)
15. 明赤褐色粘質土層 5 YR5/8 (5~10cmの礫多量を含む)
16. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y5/2 (5~10cmの礫多量を含む)
17. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (1~10cmの礫多量を含む)
18. 赤褐色砂質土層 2・5 YR4/8 (1~20cm大の礫多量, 炭化物, 焼土含む)
19. 橙黄色砂質土層 7・5 YR6/6 (渣物, 10cm大の礫多量を含む)
20. 灰黄色砂質土層 2・5 Y6/2 (1~10cm大の礫若干含む)
21. 黄褐色粘質土層 10YR5/8 (3~5cmの礫含む)
22. 暗灰色砂質土層 10YR5/1 (遺物, 1~3cmの礫若干含む)
23. 明褐色粘質土層 7・5 YR5/6 (3cm大の礫若干含む)
24. 明褐色粘質土層 7・5 YR5/8 (10cm大の礫多量, 遺物含む)
25. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/3 (5cm大の礫含む)
26. 明黄褐色砂質土層 10YR7/6 (1~5cmの礫多量を含む)
27. 灰黄色粘質土層 2・5 Y6/2 (5~10cmの礫多量を含む)
28. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6 (5cm大の礫多量を含む)
29. 明黄褐色粘質土層 10YR6/6 (3cm大の礫若干含む)
30. 黄褐色粘質土層 10YR5/6 (1~3cmの礫若干含む)
31. におい黄色砂質土層 2・5 Y6/4 (5~10cmの礫多量を含む)
32. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/8 (3~5cmの礫含む)
33. 褐色粘質土層 10YR6/1 (1cm大の礫若干, 焼土含む)
34. 橙黄色粘質土層 7・5 Y6/6 (3cm大の礫多量を含む)
35. 明褐色粘質土層 7・5 YR5/6 (1cm大の礫若干含む)
36. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/1 (1~3cmの礫若干含む)
37. 明灰黄色砂質土層 2・5 Y5/2 (2~5cmの礫若干含む)
38. におい褐色粘質土層 7・5 YR5/4 (1~5cm大の礫若干含む)
39. 褐色粘質土層 7・5 YR4/6 (1~5cm大の礫含む)
40. 灰オリーブ色砂質土層 7・5 Y6/2 (5cm大の礫多量を含む)
41. 黒褐色粘質土層 10YR3/1 (1~10cmの礫多量を含む)
42. 灰白色砂質土層 7・5 Y7/2 (1~10cm大の礫多量を含む)
43. 褐色粘質土層 10YR4/1 (1~10cmの礫多量を含む)
44. 黒褐色粘質土層 10YR2/2 (3cm大の礫若干含む)
45. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y4/2 (3cm大の礫若干含む)
46. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (3cm大の礫若干含む)
47. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (5cm大の礫若干含む)

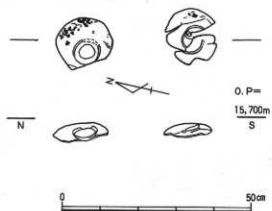
第9図 SF01・02 土層図

cm、器高2.3cm。青磁も、碗・皿がみられるが、少ない。3は、青磁菊花皿。口径(推)11.7cm、器高3.3cm。青花も碗・皿がみられる。なかでもE群皿(小野正敏1982年)が多い。しかし、破片が多く、図示できるのは2点にとどまる。4はアラベスク文のB1群皿、5は内面に蓮花文、外面にアラベスク文を描くC群の碗である。21は、黒褐釉四耳壺。口径(推)17.4cm。

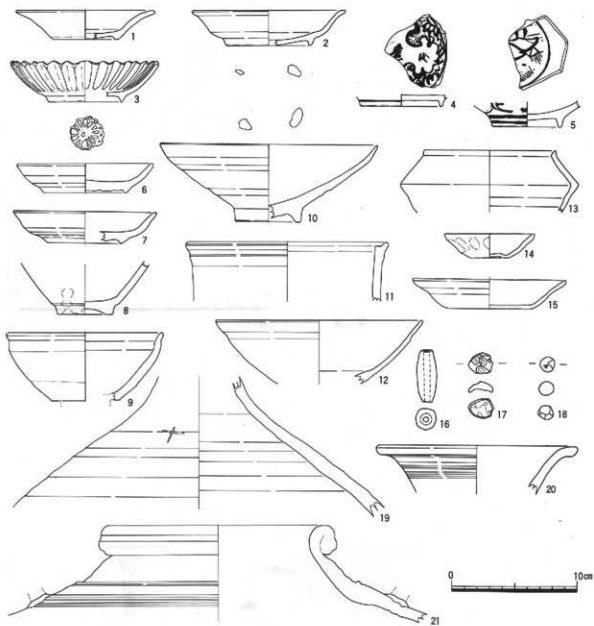
国産陶磁器には、瀬戸・美濃焼天目茶碗・皿、備前焼鉢・壺・甕などのほか茶陶として用いられたと考えられるもの、丹波焼鉢・壺、信楽焼の器種不用品など、多彩なものがある。6・7は、瀬戸・美濃焼灰釉皿。6は口径(推)10.5cm、器高2.3cm、7は口径(推)11.2cm、器高2.5cm。6は、内面に菊花文がみられる。8・9は、瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗。いずれも底部外面に化粧掛けを施す。これらは、大窯II期(藤沢1986年)に位置づけられる。10は、朝鮮王朝(李朝)製白磁碗。口径(推)17cm、器高6.1cmを測る。疊付を除いて総輪掛けで、見込みに4箇所を目跡がある。11~13・19は、備前焼。11は水差。口径(推)15.6cm。12は、類例の少ない碗である。口径(推)16.2cm。13は、建水として用いられたものか、胴部が「く」の字状に張る無須壺である。口径(推)10.3cm。19は、船徳利。頸部に「+」のヘラ記号がみられる。

土師質土器には、皿・釜・鍋・火舎などがある。14・15は、土師質土器皿。これには、後述するように3タイプあり、これはB型式である。外面は指圧調整、内面は杖ナデ調整を行う。

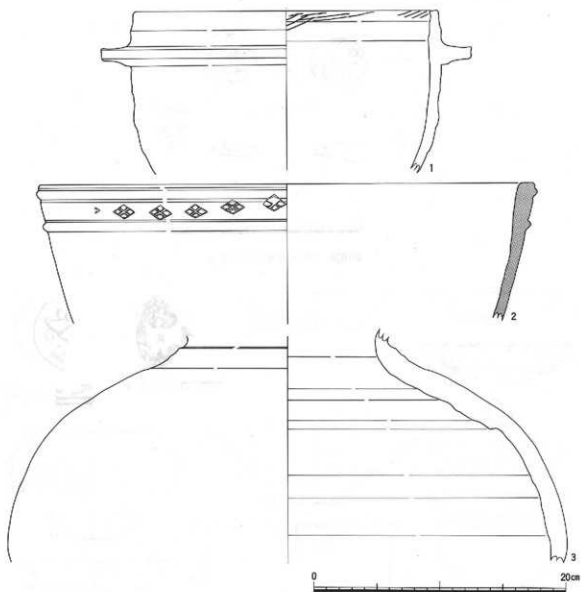
16は土鉢。重さ13.5gである。17・18は、上層出土の鉛製鉄砲玉。18の直径は1.2cmを測り、17も本来おな



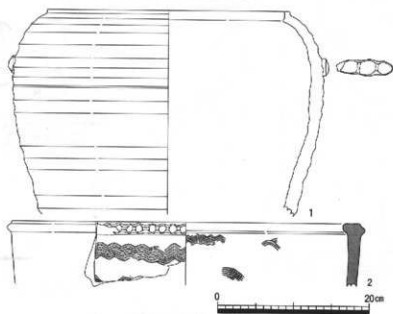
第10图 SF01漆枕出土状态图



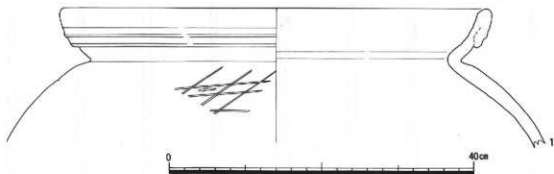
第11图 SF01出土遗物(1)



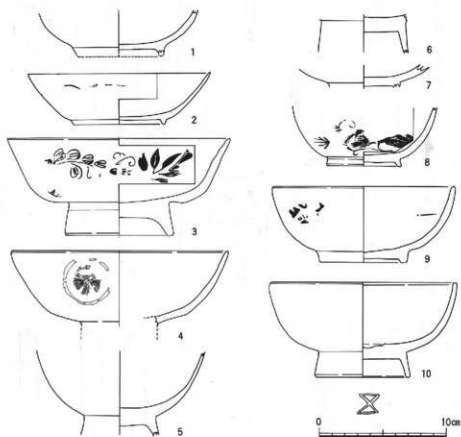
第12圖 SF01出土遺物(2)



第13圖 SF01出土遺物(3)



第14図 SF01出土遺物(4)

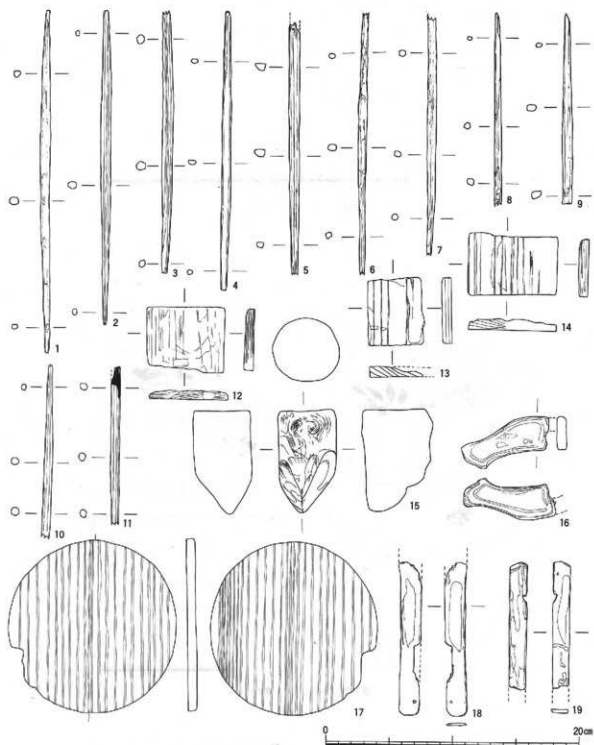


第15図 SF01出土遺物(5)

じサイズであったものと考えられる。重さは17が8.2g、18が7.2gである。

20は、須恵器壺である。この付近では、以前から古墳時代の遺構・遺物が散見され、古墳あるいは集落が存在した可能性が高い。これは、陶邑編年Ⅱ-3期〔中村浩1981年〕頃のもの。

第12図-1は、土師質土器釜。外面体部は横方向右から左へのヘラケズリ調整、内面は横方向のハケ調整の後、横方向のナデ調整を行う。外面体部には、厚く煤が付着している。これ以外に大和型釜が2点出土している。これは、天正年間頃に各地に進出するもので、織豊期の土器流通の好資料である（川口宏海1990年）。2は、瓦質土器火鉢。口径（推）30cm。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。3は、丹波焼壺。外面には、自然釉が掛かる。



第16図 SF01出土遺物(6)

第13図一1は、備前焼水屋甕。外面肩部には、横一文字の耳をハリツケル。2は、口径(推)46cmの大型の瓦質土器火鉢である。内・外面に波状文をクシ描きし、外面口縁部には緑帯を巡らす。

第14図一1は、備前焼甕である。口径(推)55.5cmの大型品で、外面肩部に斜格子状のへら記号を持つ。

第15図は、漆器である。いずれも下層から出土した。1・2は、皿である。器高・高台ともに低く、器壁は薄い。1は、内外面とも朱漆。2は、外面黒漆で朱漆により草花文を描く。口径(推)14.3cm、器高4cmである。

3-10は、碗である。碗は形態的に、4型式に分類できる。

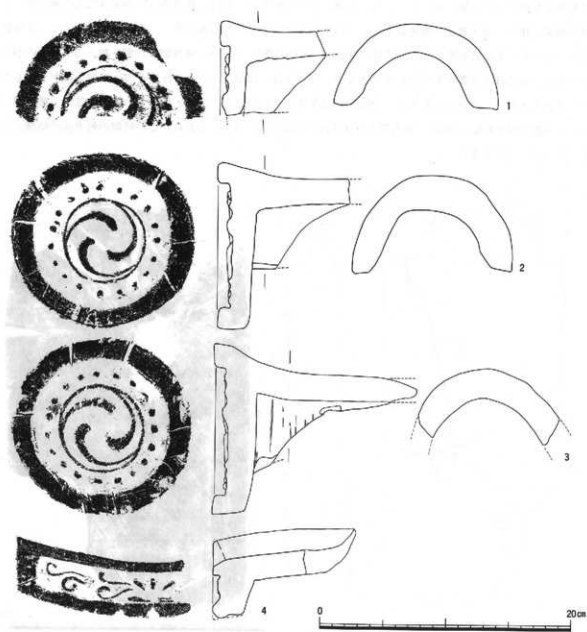
1型式—高台は高く、高台内の削りが浅いもの。口径は大きく、底部、高台は厚い。(3-5)

2型式—高台は高く、高台内の削りが深いもの。口径はやや小さく、底部、高台もやや薄い。(6-10)

3型式—高台は低く、高台内の削りが深いもの。口径はやや小さく、底部は薄い。(9)

4型式—高台は低く、口径の小さいもの。底部は薄く、高台の器壁も薄い。(7-8)

1型式—3-5のうち、3・4は口径(推)17.5cm前後、器高7.7cm前後で、いずれも外面黒漆、内面朱漆で、外面に3は草花文、4は円のなかに花文を掻く。5は特徴を同じくするが、高台内黒漆、他は朱漆である。2型式—6-10のうち6は、上部が欠失しており、断定はできないが、10と高台の特徴を同じくする。外面黒漆、内面朱漆である。10は、口径(推)14.5cm、器高7.5cm前後である。外面黒漆、内面朱漆で、高台内に刃物による記号が掘られている。3型式—9は内外面とも黒漆で、内面見込みにも不明な文様を朱漆で描く。4型式—7-8は、器壁が厚手である。7は内外面共朱漆で、木地、塗り共に良く、優品である。8は



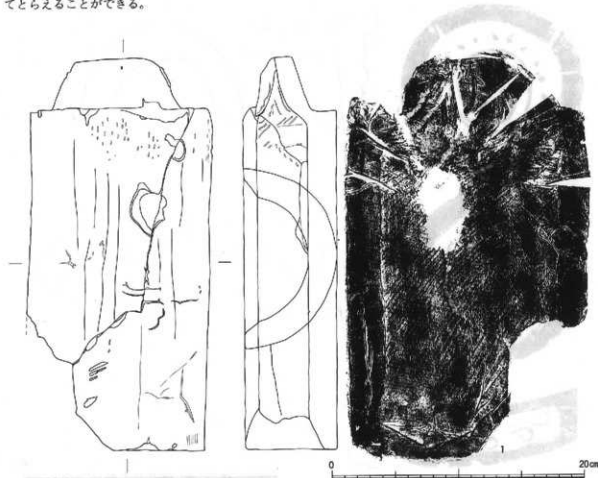
第17図 SF01出土遺物(7)

外黒・内朱で、草花文を描く。

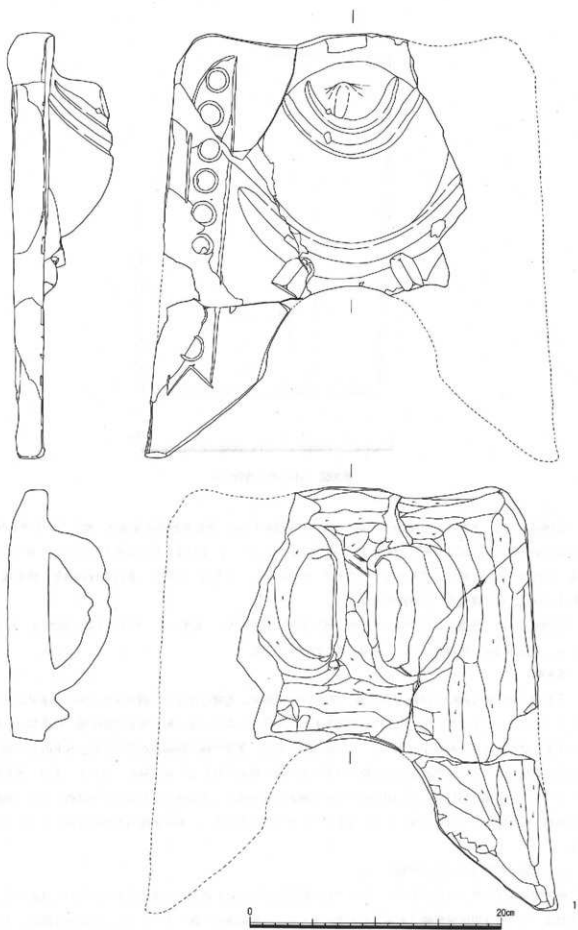
第16図は、木製品である。1～11は、箸である。完形品は少なく、分類するに至らない。1は最も長く、全長27cm、最大径0.7cmを測る。2は全長24.8cm、最大径0.7cmを測る。4は全長22cm、最大径0.6cmである。これのみ、扁平な断面をしている。9は全長15cm、最大径0.7cm。図上方の先端は斜めにカットされ、下方は真横にカットされる。箸以外の用途も考えられる。他は、いずれも全長が不明である。11は、図上方の部分が焼けている。

12～14は、板状木製品である。用途は不明。15も、用途は不明である。円筒形の一方を鋸により切断し、片方は削り出している。16は、灯明台の一部である。図右端には、深さ1.3cmのくり込みが残る。17は、曲物の底板である。直径13.7cm、厚さ0.7cm。18は、扇子もしくは扇の骨と考えられる。下方右側に0.2cmの穿孔がある。19も、用途不明品である。上方に切り込みをいれており、18に似るが厚手である。

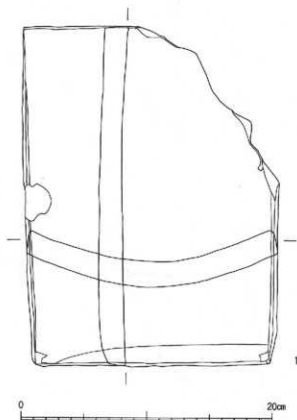
第17～19図は、屋瓦である。軒丸瓦は、後述するように9型式のものがみられる。ここでは、個数の多い代表的なものについて触れる。1～3は、左巻三ツ巴文軒丸瓦。1は、瓦当部径14.9cm。巴文の頭は細く、尾は圓線に接し、連珠数は20個を数える。2以下のものに次いで出土数が多く、7点を数える。2・3は同範瓦。このタイプが最も数が多く、11点を数える。瓦当部径14.2～5cm、連珠数は19個を数える。巴文の頭はやや太く、中心部は空間があく点も1と異なる。軒平瓦は、10型式ある。4は、そのうち最も数が多いもので、7点出土している唐草文軒平瓦。中心飾りは3葉で、唐草は上下2列となっている。上弦幅(推)21.3cm、瓦当部の厚さ4.5cmを測る。瓦当部上外区上縁の面取りは、深い。これは、この時期の軒平瓦の特徴としてとらえることができる。



第18図 SF01出土遺物(8)



第19圖 SF01出土遺物(9)



第20図 SF01出土遺物(10)

第18図-1は、丸瓦。全長31cm、幅14.4cm、玉縁部長4.4cm。全長がわかる丸瓦は、他にもう1点あり、それは全長29.7cm、幅14.1cm、玉縁部長3.9cmである。したがって、全長は一尺を基準としていると考えられる。これは、凸面は縄目タタキの後、ヘラナデ。凹面には、コビキA=糸切り(森田克行1984年)痕を残す。もう1点は、丸瓦部後方に紐縄跡が残る。

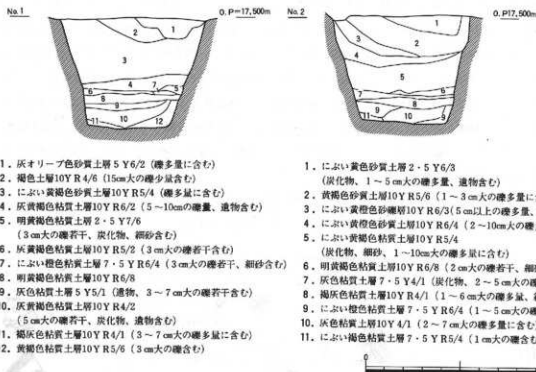
第19図-1は、椽端瓦。高さ33.8cm、幅(推)33cm、長さ8.2cm。宝珠をモチーフとする。第20図-1は、平瓦。全長26.6cm、狭端幅18cm、広端幅(推)20.8cmである。

S F 02

S F 02 (第21図)は検出長24m、幅3m、深さ2.3mを測る。北側にはさらに調査区外に伸び、東側にも派生して伸びていくようである。埋土の状況はS F 01と同様であるが、焼土層(第9図第1層)は南側の上層の途中に認められる点が異なっている。この焼土層からは、多量の輸入陶磁器が出土した。S F 01との関係は同時存在と考えられ、埋め戻される際にS F 01より後で埋められたことが土層からわかる。また、S F 01との交点で、底部に幅1.7m、高さ0.4mの規模で地山を掘り残し、十橋状にした高まりが認められる。機能は判然としないが、この堀が浅いながら帯水していたことを考えると、水位調節のためのものとも考えられる。

出土遺物もS F 01と同様の様相を示す。

輸入陶磁器は青花・白磁が中心で、なかでも白磁端反皿と青花E群皿が主流を占めているのが特徴である。第22図-1-6は中国製青磁である。1・2・4・5は、線描蓮弁文碗。1・2とも、高台内は露胎。2は口径(推)10.5cm、高さ6.3cmを測る。色調は浅黄色2.5Y7/4で、他の青磁製品とは異なっている。4は、見



第21図 SF02土層図

1. 灰オリーブ色砂質土層 5 Y6/2 (礫多量に含む)
2. 褐色土層 10 Y R 4/6 (15cm大の礫少量含む)
3. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 5/4 (礫多量に含む)
4. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 6/2 (5~10cmの礫量、遺物含む)
5. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y 7/6
(3cm大の礫若干、炭化物、細砂含む)
6. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 5/2 (3cm大の礫若干含む)
7. におい橙色粘質土層 7・5 Y R 6/4 (3cm大の礫若干、細砂含む)
8. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8
9. 灰色粘質土層 5 Y 5/1 (遺物、3~7cm大の礫若干含む)
10. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2
(5cm大の礫若干、炭化物、遺物含む)
11. 褐色粘質土層 10 Y R 4/1 (3~7cm大の礫多量に含む)
12. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6 (3cm大の礫含む)

1. におい黄色砂質土層 2・5 Y 6/3
(炭化物、1~5cm大の礫多量、遺物含む)
2. 黄褐色砂質土層 10 Y R 5/6 (1~3cm大の礫多量に含む)
3. におい黄褐色砂礫層 10 Y R 6/3 (5cm以上の礫多量、遺物含む)
4. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 6/4 (2~10cm大の礫多量に含む)
5. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4
(炭化物、細砂、1~10cm大の礫多量に含む)
6. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8 (2cm大の礫若干、細砂含む)
7. 灰色粘質土層 7・5 Y 4/1 (炭化物、2~5cm大の礫含む)
8. 褐色粘質土層 10 Y R 4/1 (1~6cm大の礫多量、細砂含む)
9. におい橙色粘質土層 7・5 Y R 6/4 (1~5cm大の礫含む)
10. 灰色粘質土層 10 Y 4/1 (2~7cm大の礫多量に含む)
11. におい褐色粘質土層 7・5 Y R 5/4 (1cm大の礫含む)

込みに花卉のスタンプ模様を施す。5は、見込みに文字文、内面体部に流線文を彫刻する。両者とも、高台内は蛇の目輪ハギ。3は、菊花皿。6は、三足香炉。口径(推)8cm、器高6cmである。内面下半および外面底部中央は、露胎。7は、朝鮮干朝製瓶、オリーブ黒色 5 Y 3/2を呈する。8は、緑色 10 G Y 7.5/4の釉を掛けた、中国製型押皿。9は、五彩碗。丸窓に黄色で鹿を描く。鹿の尾は茶色、尾の先に緑色で草を描く。窓は赤色である。

10~31は青花。10・11は、B群皿。いずれも小型品で、外面に牡丹唐草文を描く。12~14は、C群皿。外面には、波濤文と芭蕉葉文を描く。14は口径(推)11cm、器高3.2cm。見込みに、捺花文を描く。15・16・18~25は、E群皿。15・16・25は見込みに花枝文、高台内には「…佳器?」の字款をもつ。19・20は、圏線のみ。20は口径(推)11.9cm、器高3.1cmである。24は、見込みに蟹文を描く。27は、見込みに花卉文を描く粗製のB群(上田秀大1991年)の皿。呉須の発色も悪く、景德鎮以外の産地のものであろう。17は、B群碗。22は、鉢。口縁部内面に四方碑文を巡らす。23・26・28・30は、大皿。26は、外面下半に縦にケズリをいれて、溝状になっている。外面に龍、内面に蝶を描く。呉須の発色も良い。31は、E群の椀頭心型碗。29は、台付き杯。外面には、唐草文を描く。

白磁には端反皿と杯がある。第23図-13は、白磁杯。口径(推)6.7cmを測る。端反皿は型式的には同じであるが、法量の差で3種類に分類できる。

A類-口径12cm、器高3cm前後のもの。(1~4)

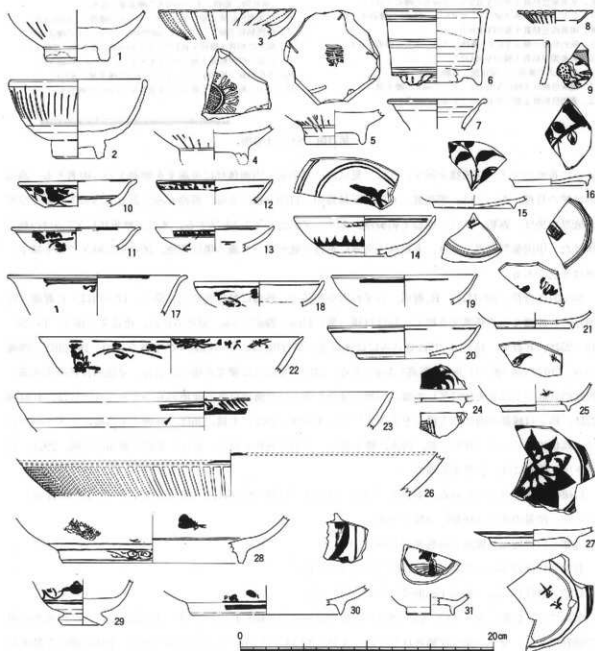
B類-口径13.5cm、器高3.5cm前後のもの。(5~10)

C類-口径15.5cm、器高4cm前後のもの。(11~28)

量的には、C類が最も多い。25の高台内には字款が呉須で描かれ、12・24・28の高台内には、白色不透明の物質で「+」などの記号が施されている。また、9・11・12・16・17・21・25・28は、全体に細かな黒斑が多数みられる。

国産陶磁器も、SF01と同様の様相を示す。第24図-1～3は、瀬戸・美濃焼製品。1は、灰釉皿。2は鉄種天目茶碗、3は鉄釉大海茶入れである。口径(推)6.4cm、器高6.8cmを測る。外面底部には、化粧掛けを施す。この大海茶入れは大窯I期、他は同II期のものである。4は、漆器碗。前述の分類で、B型式に属する。外面黒漆、内面朱漆で、高台内に朱漆によって「一」の記号が書かれている。5は、丹波焼甕。6～9は、備前焼である。6は、皿。口径(推)10cm、器高2.9cmで、外面底部にへら記号がある。7・9は壺、8は甕である。9は間壁編年IVB期(間壁忠彦・葎子1968年他)、8はV期の製品である。10は、瓦質土器甕。外面のタタキ目は荒い。口縁部はヨコナデ。内面は荒いハケ調整で、炭素の吸着がみられない。第25図-1は、備前焼大甕。口径59.8cmを測る。

土師質土器には皿・釜・火舎がある。釜・火舎は全体を復元するに至らなかった。皿は、胎土・色調・形態などの点で3型式に分類できる。また、法量によってさらに細分できる。



第22図 SF02出土遺物(1)

1 型式—浅黄橙色10Y R 8/3を呈し、橙色気味である。器高は高く、口縁部は直線的に延び、底部との境で明瞭に屈曲するもの。外面は指圧調整、内面はヌキナデ調整を行う。

A類—口径8cm前後、器高1.7cm前後のもの(6)

B類—口径10cm前後、器高2.3cm前後のもの(第33図—8・9)

C類—口径12.6cm前後、器高2.5cm前後のもの(7・10)

2 型式—灰白色2.5Y 8/2を呈し、褐色気味である。器高は低く、口縁部は内弯する。調整は、1 型式と同様である。

A類—口径7.5cm前後、器高1.5cm前後のもの(1~4)

B類—口径11cm前後、器高2cm前後のもの(第33図—15)

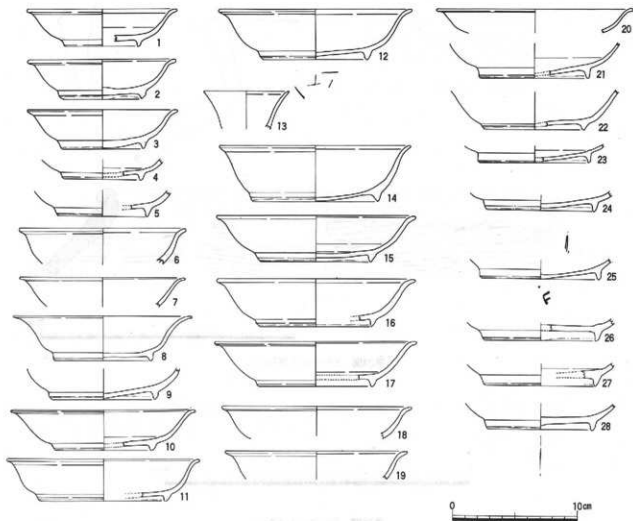
C類—口径34.2cm前後、器高3.3cm前後のもの(11)

3 型式—灰白色5 Y 8/2を呈し、白さが強い。器高は低く、口縁部は直線的に延びる。調整は1 型式と同様であるが、外面の指圧痕は目立たず、丁寧な作りである。

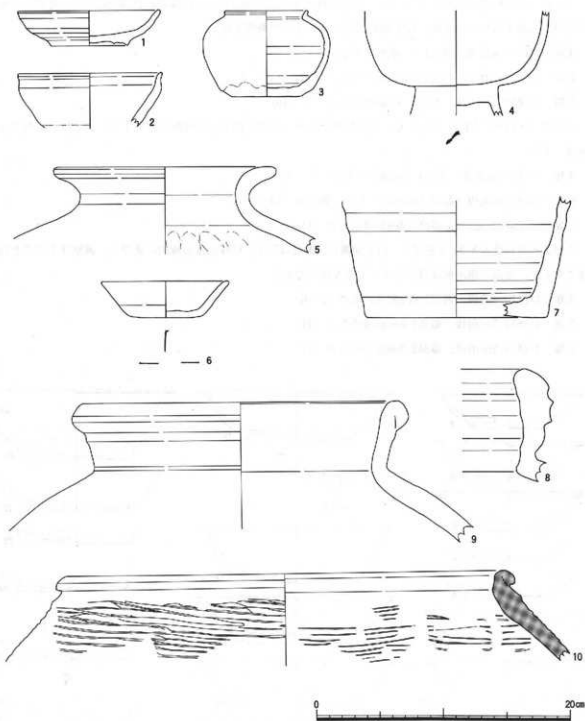
A類—口径10cm前後、器高1.6cm前後のもの(5・6)

B類—口径11.7cm前後、器高1.6cm前後のもの(17)

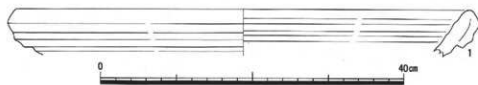
C類—口径15.2cm前後、器高2.2cm前後のもの(17)



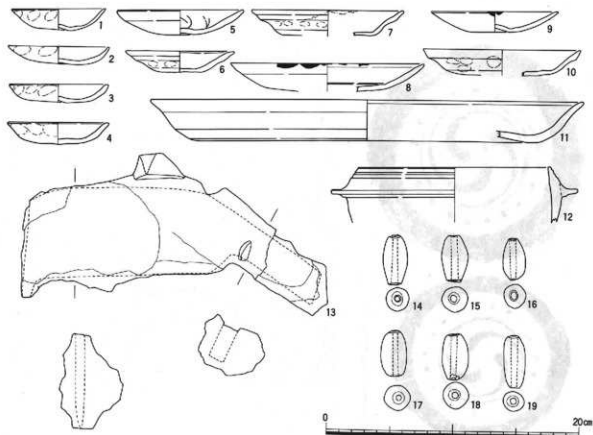
第23図 SF02出土遺物(2)



第24図 SF02出土遺物(3)



第25図 SF02出土遺物(4)



第26図 SF02出土遺物(5)

ここでは量的には2型式がもっとも多く、3型式はそれほど多くない。2型式C類は、特大サイズでこれ1点だけしかないことから例外扱いすべきものかもしれないが、胎土・焼成などの点で2型式に属するため、とりあえずここに含めた。今後類例の増加を待って、改めて判断したい。また、3型式A類も底部かへそ皿状となる点でB・C類と異なるが、胎土・焼成はこれに属し、小型品ゆえの変化にとらえてここに含めた。1型式は、周辺の遺跡でもよく見られる型式であるが、2型式は見かけない。3型式は、京都産のものに似る。このうち、8・9には、灯芯痕が残る。

瓦質土器には釜・播鉢・火舎などがあるが、図示できたのは12の釜だけである。口径16cmと小型である。外面鈿部以下はへらヶズリで、表面には煤が付着する。

13は、鉄製鈍。鉄製品は少ないが、割合残りが良い。ほかに第30図一9の鋏先が出土している。鈍は、全長23.6cm、刃部幅7cmを測る。柄は、断面が長方形である。

14～16は、土鏝。完形に近いものは7点あり、先のSE01出土品と合わせると、法量の点で3種類に分類できる。

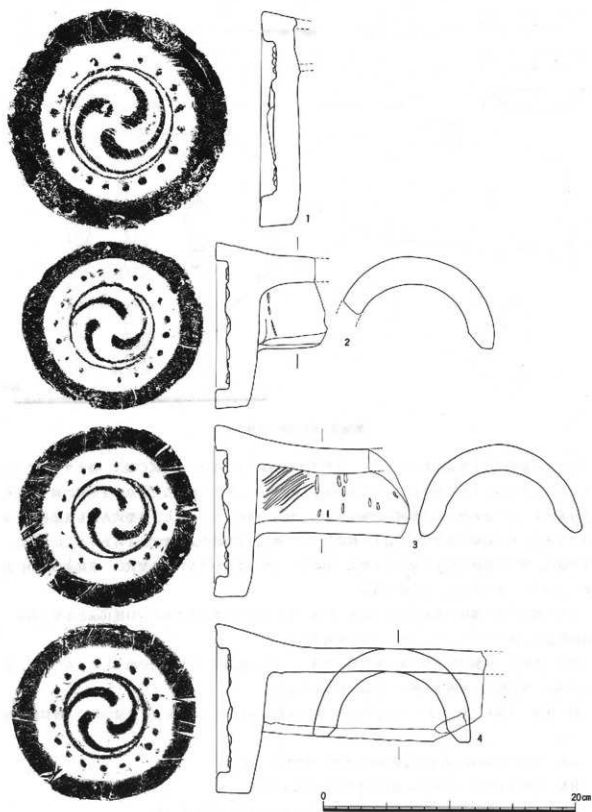
A類—全長2.5cm前後、直径2cm前後のもので、平均13g (14～18)

B類—全長3cm前後、直径1.6cm前後のもので、12.3g (19)

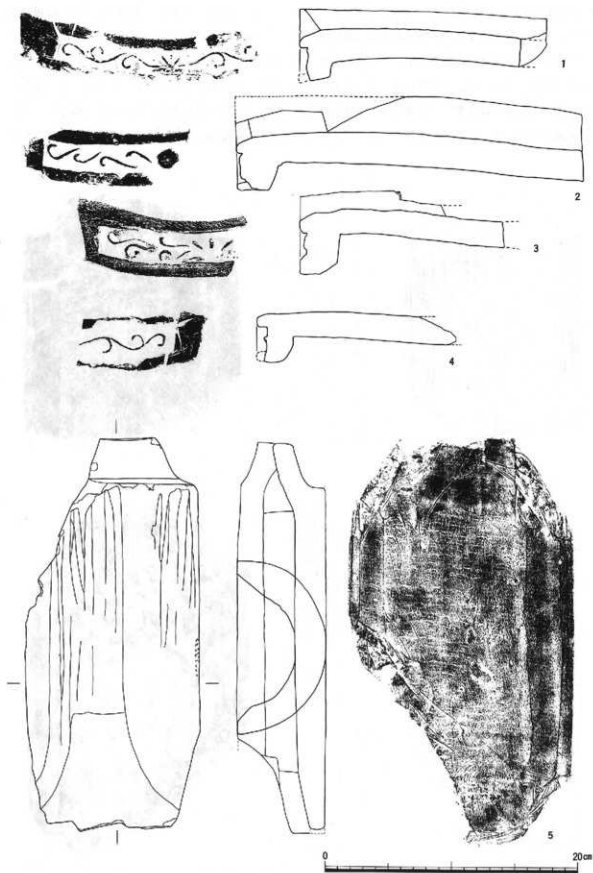
C類—全長4cm前後、直径1.6cm前後のもので、13.5g (SF01、第11図一16)

これらが漁撈に用いられたとすれば、海には遠いため、より近い猪名川での川漁であろうか。

屋瓦は、SF01と同ヒタタイプのものが多い。軒丸瓦は、6種類のものか認められる。このうち、3種類はSF01と同種のもので、ここでは代表的なものであり、これについて触れる。第27図一1は、SF01でも2

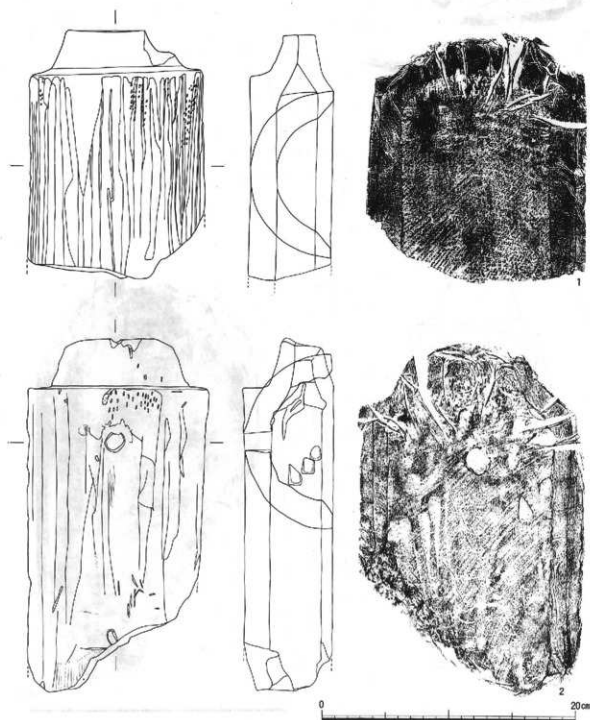


第27图 SF02出土遗物(6)

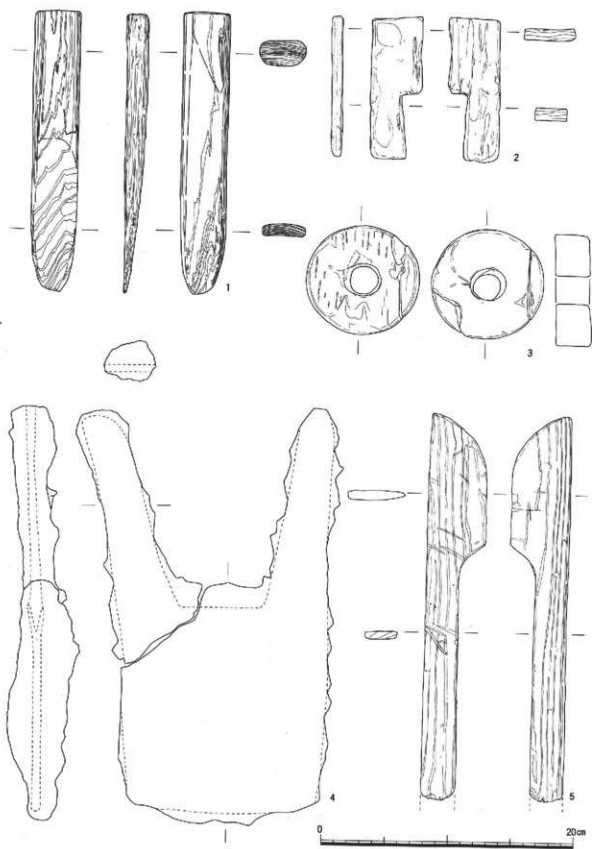


第28圖 SF02出土遺物(7)

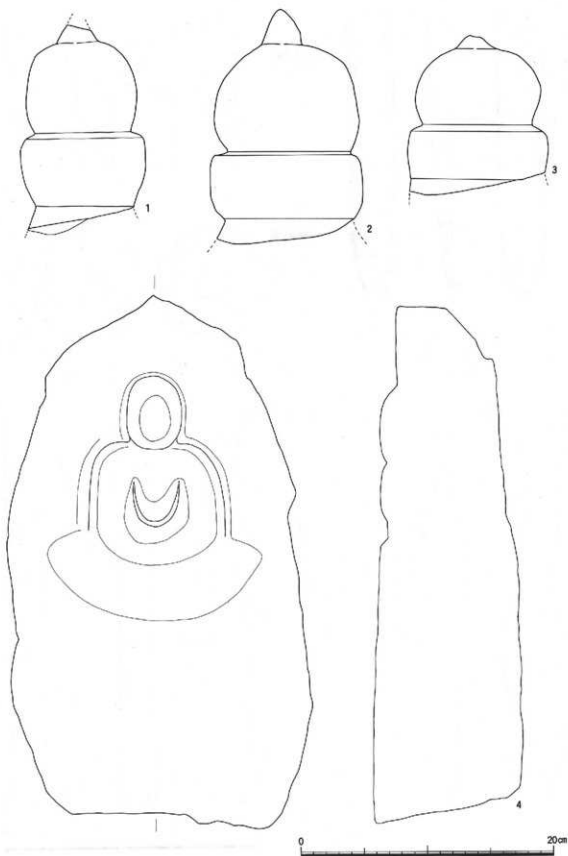
点出土している型式のもので、2点出土している。瓦当部の直径が17cmと大型である。炭素の吸着は少なく、灰色N7.5を呈する。製作時期は2以下のものよりやや古いと考えられる。それが、建物造営の際に再利用されたのであろう。2～4は、SF01出土品の第17図-2・3と同范である。炭素の吸着は良く、灰色N5/0を呈する。軒平瓦は、10種類出土しているが、やはり、SF01と共通するものが4種類ある。1・3・4がそれである。このうち、3は第17図-4と同范である。1は、SF01で3点、SF02で3点、計6点出土している。中心飾りは3葉で、唐草は細く3反転する。2は、宝珠文を抽象化したものを中心飾りとし、唐草は連続しない。唯一平瓦部まで残っており、全長27.5cm、上弦幅22cm、狭端幅20.7cmを測る。同范のもの



第29図 SF02出土遺物(8)



第30图 SF02出土遗物(9)



第31圖 SF02出土遺物(10)

が、3点出土している。4は中心飾が残るものはないが、ここで5点、SF01で4点と多く出土している形式のものである。唐草は1に似るが反転のしかたが僅かに異なる。

九瓦は第27図-6のみ全形がわかる。全長30.7cm、幅13.7cmで、SF01のものとはほぼ同じサイズである。凹面の布目には、刺し子かと思われる半月状の痕跡が一定間隔で横一列に残る。これは、前述した軒九瓦3・4にもみられ、この型式の特徴である。第28図-1もこれと同一型式。同図-2は、軒九瓦の九瓦部。幅13.8cm、直径1.3cmの釘穴が穿たれている。凹面九瓦部にはコビキA(糸切り)痕、刺し子のある布目痕、紐縄痕のほか棒状タキ痕が残り、玉縁部には荒い紐痕がみられる。

木製品は主に下層の泥質土から出土した。第30図-1は、へら状木製品。先端を12.1cmにわたってカットしている。2も用途不明の板状木製品。3は直径8.7cm、中央には2.2cmの円孔がある。5も片刃の、へら状木製品。柄は途中で欠失している。

4は、鉄製角鋸先。全長31.8cm、刃先幅15cmを測る。これについては、河野通明氏によって縄文期に確立する近世型鋸の好例として考察が加えられている(河野1991年)。すなわち、中世の丸鋸先に対して、より機能的なこの角鋸先は、織豊政権下の鋤物師集団によって、政権と密接に関係する大土木工事、たとえば築城などを背景として生み出されたものであろう、との理解を示されている。

このほか、石造品として一石五輪塔と石仏が出土している。第31図-1～3は、一石五輪塔。いずれも風・空輪のみ残存する。4は、石仏。地藏菩薩座像を浮き彫りにする。材質は、いずれも花崗岩である。過去の主郭部の調査では、このような石造品を石組溝や礎石に転用している例が少なからずあり、近年の城下町部分の調査では、17世紀前半頃までの規模の大きい町屋でも礎石として利用していることが判明している。この一石五輪塔がいずれも安定の良い地・水・火輪を欠いていることは、そのような利用法を想定させる。

この他、動物の骨が3点、下層から出土している(図版-16)。大阪府立大学農学部佐々木文彦助教授に鑑定していただいた結果、2点は組み合う左上腕骨と挽骨で、もう1点は右大腿骨中央部分であり、現生種の動物の骨と比較して、もっとも近いものは反芻類の鹿の骨である。特に、上腕骨の滑車および挽骨頭窩部分の特徴は、よく似ている。断定はできないが可能性は高い、とのコメントをいただいた。挽骨は、理由は不明ながら、本来これに付着している尺骨部分が欠落している。左上腕骨は残存長16.3cm、滑車部の幅3.6cm、挽骨は残存長19.2cm、挽骨窩部の幅3.2cmを測る。右大腿骨は残存長15.2cm、中央部の長さ2cmである。いずれも、現存種の骨標本より一回り大きく、良い体軀であることが考えられる。鹿は武士のたしなみである狩りの主な対象のひとつであり、食材料としても上位に位置付けられるものである。したがって、そのような意味からも興味深い遺物である。

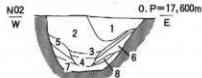
SD10

SD10は、SF02と平行して南北に延びる溝である。検出長27m、最大幅2m、深さ0.88mを測り、しっかりした溝である。断面は逆台形を呈する。前述したように、南半分の埋土中に坩土層があり(第32図Na4、第6層)、使用時にある程度の堆積があった(同図Na4、第7層)あと火災があり、程なく一気に埋めるといふ、SF01・02に共通する堆積状況を示す。遺物は、上層より下層の方が多い。図示したものは、主に下層から出土したものである。

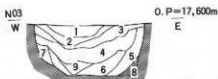
土師質土器には皿・釜・鍋・火舎などがある。このうち、図示できたのは、第33図に挙げたものである。1～17は、皿。これは、前述のごとく3型式に分類できる。これにしたがって分類すると、以下のようになる。



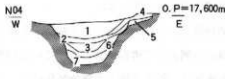
1. 褐色土層10Y R4/4 (1~4 cm程度の礫多量に含む)
2. オリーブ褐色土層2・5 Y4/3 (1~4 cm程度の礫多量に含む)
3. 黄褐色土層2・5 Y5/4 (1~5 cm程度の礫多量に含む)
4. オリーブ褐色土層2・5 Y4/6 (1~6 cm程度の礫多量に含む)
5. オリーブ褐色土層2・5 Y4/4
6. 暗オリーブ褐色土層2・5 Y3/3 (5 cm程度の礫多量に含む)
7. におい黄褐色土層10Y R5/4



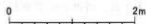
1. オリーブ褐色礫層2・5 Y4/6
2. 黄褐色土層2・5 Y5/6 (1~5 cm程度の礫含む)
3. 灰オリーブ色土層5 Y5/3 (遺物含む)
4. 灰オリーブ色土層5 Y4/2 (4 cm程度の礫含む)
5. 黄褐色土層10Y R5/8 (5~10 cm程度の礫含む)
6. 明黄褐色土層10Y R6/8 (1 cm大の礫多量に含む)
7. 浅黄色砂質土層5 Y7/4
8. オリーブ色土層5 Y6/6 (遺物含む)



1. オリーブ褐色砂礫層2・5 Y4/6 (1~5 cm程度の礫含む)
2. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/3
3. におい黄褐色礫層10Y R5/4 (1~5 cmの礫含む)
4. 黄褐色砂質土層10Y R5/8
5. 黄褐色土層2・5 Y5/6
6. 褐色土層10Y R4/6 (1 cm大の礫多量に含む)
7. 黄褐色土層10Y R5/6 (炭化物若干含む)
8. 褐色土層10Y R4/4 (地山)
9. 明黄褐色土層10Y R6/6 (1~3 cm程度の礫多量に含む)



1. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8 (2~7 cmの礫含む)
2. におい褐色土層7・5 Y R5/4
3. 灰褐色粘質土層7・5 Y R4/2 (遺物含む)
4. 褐灰色砂質土層7・5 Y R4/1
5. 明黄褐色砂質土層10Y R6/6 (1~5 cm大の礫多量に含む)
6. 黒褐色土層2・5 Y3/1 (焼土含む)
7. オリーブ褐色砂礫層2・5 Y4/6



第32図 SD10土層図

1 型式-A類 (1~7)、B類 (8・9)、C類 (16)

2 型式-A類 (10~14)、B類 (15)

3 型式-B類 (17)

このうち8の内面には、黒色付着物(タールのようなもの)が全面にみられる。

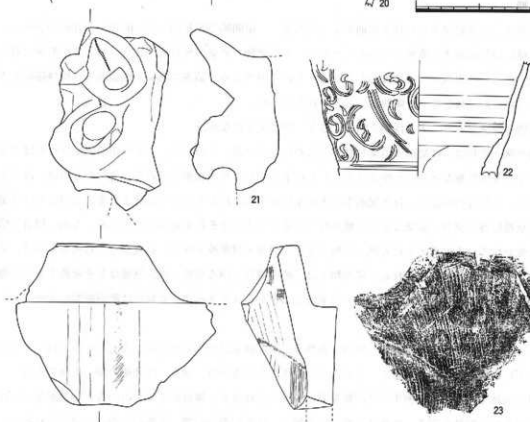
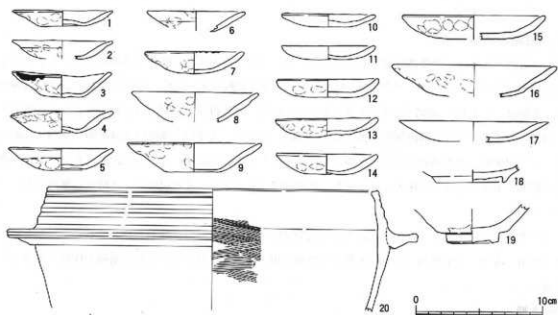
20は釜。口径(推)26.2cm。内面はハケ調整、外面体部は、ヘラケズリ調整。

国産陶磁器では瀬戸・美濃焼天目茶碗・皿、備前焼指鉢・壺・壺、丹波焼壺などがある。18は瀬戸・美濃焼灰釉皿、19は大塚I期の瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗である。外面底部は、化粧掛けする。第34図-1・2はIVB期、3はV期の備前焼釜。

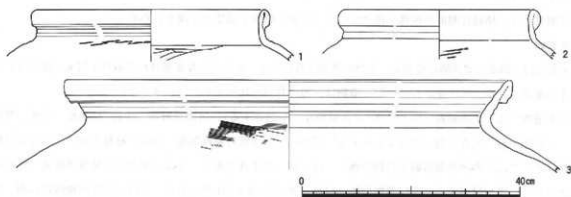
輸入陶磁器では青磁碗、青白磁梅瓶、白磁皿、青花皿などがある。このうち、第33図-22の青白磁雲堂文梅瓶のみ図示できる。上下を欠いているが、同種のものは13・14世紀の鎌倉や草戸千軒町遺跡などから出土しており、直腰型のものである。伝世したものであろう。外面は細かい貫入が全面に入る。

このようにSD10では、陶磁器に古いものがやや多くみられる。

屋瓦は、少ない。第33図-21は棟端瓦の鬼の左耳の部分。23は瓦瓦。SF02でも同種の破片があり、合わせて復元すると高さ10.3cm、幅21.4cmとなる。凹面には、細かい布目痕がみられる。



第33图 SD10出土遺物(1)



第34图 SD10出土遺物(2)

4. III期の遺構と遺物

遺構・遺物の大半は、伊丹郷町期のもので占められている。そのうち、顕著に遺構が見られるようになるのは、18世紀後半からである。調査区は、伊丹郷町の絵図「寛政八年（1796）伊丹細見図」（八木哲浩1982年）では、北側は「大手丁」、南側が「カジヤ丁」となっている。それ以前の絵図では、町屋の存在は判然としないう。同書の説明書きでは、鍛冶屋町は寛政年間（1661～72）に、大手町・湊町は元禄年間（1688～1703）に成立したと記すが、調査結果からは、そのころに成立したのはこの絵図にみえる上記のうちの一部で、寛政八年（1796）頃までに徐々に拡大していったことが判明する。また、それ以前は、土層から畑地であったと考えられる。

この時期は、後述するように19世紀に入ると大型建物（酒蔵）S B01が建設され、それを小画面としてそれまでをⅢ-A期、大型建物（酒蔵）S B01の時期をⅢ-B期、それ以後の近代の遺構をⅣ期とすることができる。

Ⅲ-A期

Ⅲ-A期は、18世紀後半から19世紀前半までである。一定間隔でS E03・07・05などの井戸が存在し、これらが一律に19世紀前半に廃絶していることから、大型建物（酒蔵）S B01が建てられるまで町屋が存在し、大型建物（酒蔵）の出現によって廃絶したと考えられるのである。調査の關係上地山面まで機械掘削せざるを得なかったため、残念ながら建物とはとらえきれなかった。

出土遺物は豊富である。主な様相を略述すると、次のようになる。

飲食器の碗・皿類は主に肥前磁器染付製品で占められている。このうち、上手の伊万里焼はそれほど多くなく、下手の波佐見焼などのいわゆる「くらわんか手」がかなりの比率を占める。色絵のものは、ほとんどみられない。これらの中には、18世紀前半に生産年代を求められるものが少量含まれる。このほかに少量の京焼系（京都以外に伊賀・信楽などでも焼かれており、ここではそれを総称して用いる。なお、伊賀・信楽で独自に焼かれていると考えられる鍋・土瓶などは、伊賀・信楽焼と呼び、京焼と考えられるものは、そのまま京焼とした）色絵碗もみられる。湯呑類では、肥前磁器（伊万里焼・波佐見焼などを総称する）の他に瀬戸・美濃焼の腰鉋茶碗・鉋茶碗、伊賀・信楽焼などがかなり含まれる。鉢類では肥前磁器が主流を占めるが、唐津関係者も多い。

煮炊きに用いる鍋・釜類や湯沸かし用の土瓶類は、主に鉄製品を用いたものと考えられるが残っており、出土したものは陶磁製のものである。そのなかで主流を占めるのは、伊賀・信楽焼の鍋・土瓶である。

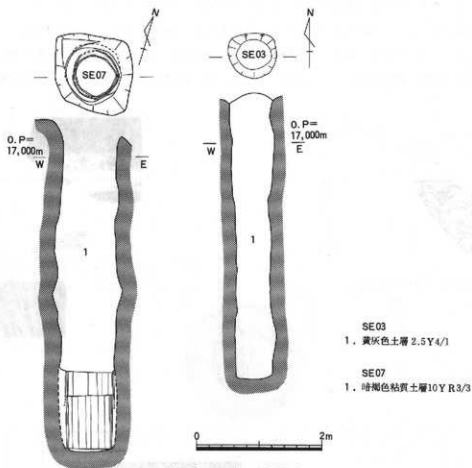
調理具の播鉢では、18世紀前半の丹波焼製品が少量みられるが、堺焼が大半を占める。19世紀前半には、明石焼と思われる播鉢も混る。焙烙は土師質土器製で、18世紀前半の堺・湊焼のものが少量みられるが、別のタイプが多い。

灯明具では、柿輪灯明皿や柿輪を掛けないクロク製土師質土器皿が主流を占める。

S E03

S E03は、調査区北西隅に位置し、半分が調査区外になる。径の小さな素堀井戸で直径0.77m、深さは4.45mまで確認したが、底に達しなかった。遺物は、他の井戸と比べてそれほど多くない。

出土遺物には、肥前磁器（伊万里焼・波佐見焼などを総称する）、唐津系陶器、伊賀・信楽焼、堺焼、丹波焼、土師質土器、瓦質土器、屋瓦などがある。第36図-1は嬉野焼緑釉皿。内面に緑釉を掛け、見込みは蛇目杓ハギ。2は、唐津系陶器刷毛目筒型碗。3は、同三島手鉢である。4は、伊賀・信楽焼鉄輪鍋。外面底部は露胎で、煤が付着する。5は堺焼播鉢。口径（推）20.6cmと小型である。6は、軟質地軸陶器の碗。高



第35図 SE03・07遺構図

台はケズリグシで、見込み中央部は透明釉、他は鋼緑釉を高台畳付き・高台内まで全面施釉する。いわゆる楽焼系のものである。7は、土師質土器皿。8は、丹波焼播鉢。内面から外面体部中程まで薄く施釉する。使用痕が著しい。9は肥前磁器青磁花瓶。釉の発色が悪く、明緑灰色5G7/1を呈する。10は、土師質の土人形。阿弥陀菩薩座像である。11は、瓦質土器火鉢。外型による成形で内面には指圧痕が残る。12・13は、均整唐草文軒平瓦。12は脇区が狭く、13より古い。

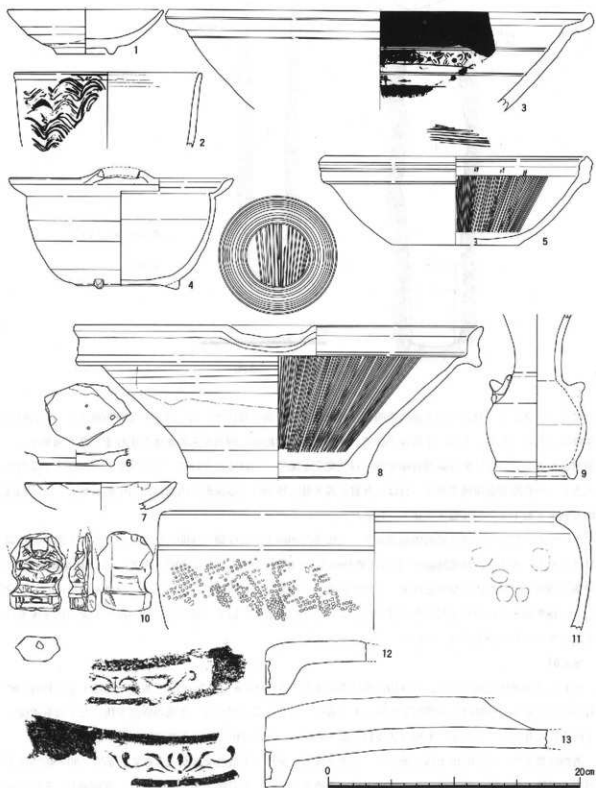
これらのうち、1～3は肥前陶磁器編年（大橋康二1988年）のIV期（1690～1780）のうちでも前半に位置付けられる。8は丹波焼播鉢編年（長谷川真1988年）のII B 2 a類（18世紀中頃～後半）、5は播鉢編年（白神典之1990年）II型式（18世紀後半～19世紀初頭）に位置付けられる。したがって、18世紀前半のものを含むが、18世紀末から19世紀初頭を下限年代とすることができる。以下、特に記さない限り上記の研究結果などによりつつ年代決定を行っていく。

SE07

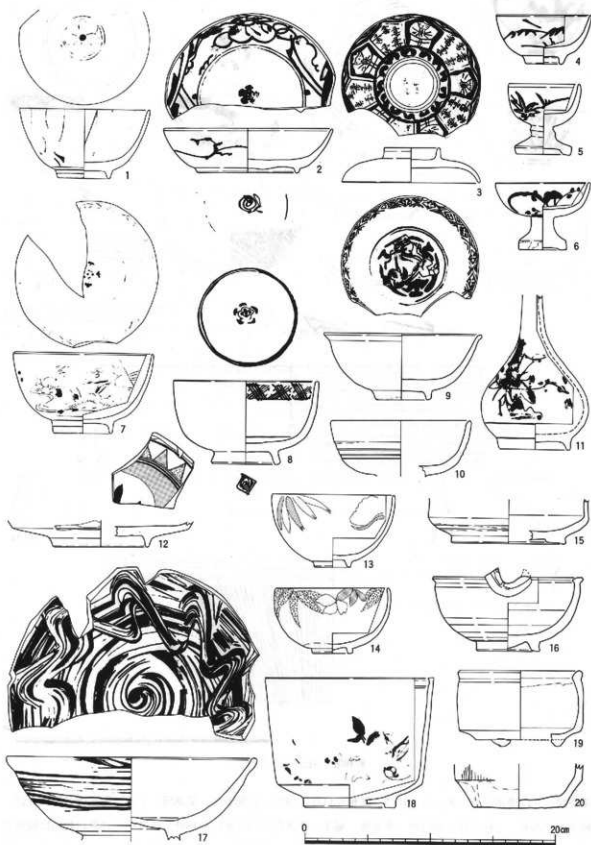
SE07は調査区北側の中程、SD10の西に隣接する。直径0.9m、深さ5.3mを測る。後述するSB01の礎石の直下にあり、SB01との関係を明確にする遺構である。最下部には、木桶の底部を抜いたものを逆側に2段入れて井筒としている。木桶は2段目が高さ0.85m、上部径0.73m、下部径0.75mを測る。

遺物は豊富で、SE03出土品に加えて、京焼系陶器、瀬戸・美濃焼などがみられる。第37・39・40図は下層出土遺物、第38図、第41図一・2は上層出土遺物である。第37図1～9・11・12、第38図1～5は肥前磁器。碗は丸型で薄手の第37図一7、丸型で厚手の同図一1、小振りの第38図一2、青磁染付の第37図一8、

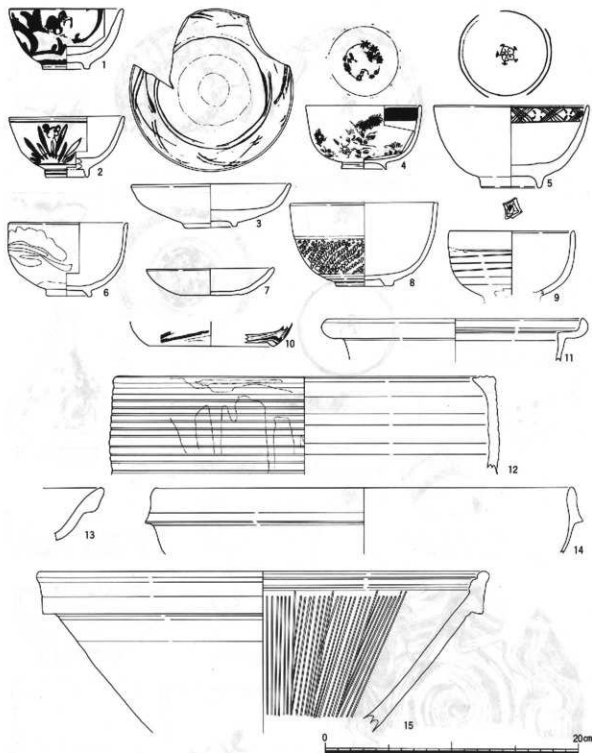
第38図-5、薄手で腰が張る第38図-4、端反りの第37図-9などがみられる。皿では、高台径の広い第37図-2、高台径の狭い第38図-3などがある。第37図-2の見込みにはコンニャク印判による五弁花文が施される。5・6は、仏飯具。12は、色絵角鉢。見込みの鋸歯文は赤色で縁取りし、緑色と赤色で交互に塗りつぶす。11は花瓶。釉は白濁する。第37図-10・16・19、第38図-1・8・9は瀬戸・美濃焼。第37図-10、



第36図 SE03出土遺物



第37图 SE07出土遺物(1)



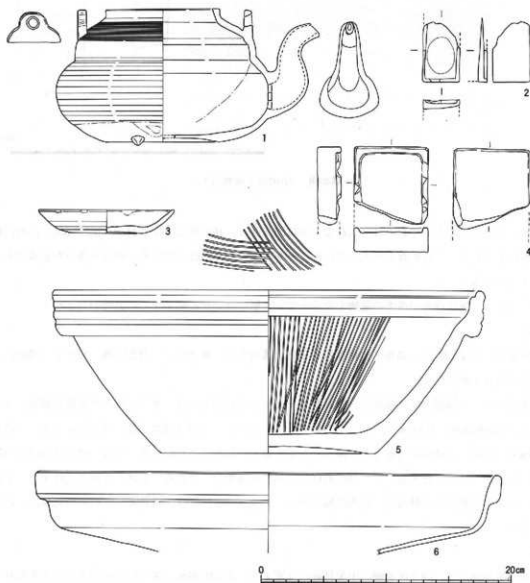
第38図 SE07出土遺物(2)

第38図-9は腰筒湯呑。第37図-16は、灰釉片口鉢。19は、鉛釉香炉。第38図-1は、陶胎染付碗。8は、鍔茶碗である。これらは、瀬戸焼（本業焼）編年（藤澤良祐1987年）で18世紀後半から19世紀初頭に位置付けられる遺物である。京焼系陶器では、第37図-13・14、第38図-6などの色絵丸碗がある。赤・青・緑色で笹文や松文を描く。第37図-18は、京焼筒型鉢。底部外面及び口縁部は無釉で、蓋と組み合わせるものと考えられる。体部外面の草花文は、花卉を具須の青色、その他を鉄釉で描いている。第37図-17は、唐津系陶器

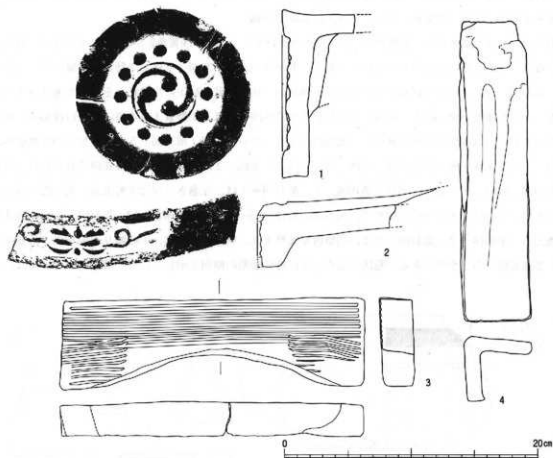
刷毛目鉢。20は、丹波焼鉢。外面体部に柿目文を入れ、灰釉を掛ける。第38図-12も丹波焼鉢。胎釉の上に鉄釉を流し掛ける。第38図-11は、伊賀・信楽焼鉄釉鍋。

第37図-15は、産地不明の陶器香炉。胎土に白色砂粒を多く含み、浅黄色2.5Y 7/3を呈する。高台は蛇ノ目高台。体部外面には白色釉の上に透明釉を二度掛ける。第38図-7は、土師質土器皿の手づくねのもの、第39図-3は、ロクロ成形のものである。第38図-10は、黄色粘土に白色粘土を混ぜた練込み手の軟質陶器。これも産地不明である。同図-13・14および第39図-6は、土師質土器地烙。14は口径33cm、6は口径37cmである。口縁部の形態が異なる。底部は型作り。第38図-15、第39図-5は、II型式の堺焼播鉢。第39図-1は、産地不明の鉄釉土瓶。同図-2・4は、石製硯。2は粘板岩製、4は花崗岩質の石材を用いる。

第40図、41図-1・2は、屋瓦。第40図-1、第41図-1は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦。共に巴の頭、連珠は大きい。第40図-1はやや小振りで、瓦当部の直径13.5cmである。連珠数は12。第41図-1は、連珠数15を数える。第40図-2、第41図-2は、均整唐草文軒平瓦。第40図-2は、中心飾りが菊花文である。第41図-2は文様はのびやかであるが脇区が広く、江戸時代後期の傾向を示している。第40図-3・4は、道具



第39図 SE.07出土遺物(3)



第40図 SE07出土遺物(4)

瓦。3は、太いクシによって刻み目を入れる。第41図-3は、井戸枠瓦。全長24cm、幅27.6cm。凸面に四列のタタキ目を入れる。これが数点出土していることから、この井戸は上部に井戸枠瓦を巻いた形式であったことが考えられる。

このように、下層は18世紀後半の遺物を中心とし、上層には19世紀前半までの遺物が含まれる。

S K 111

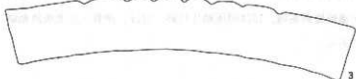
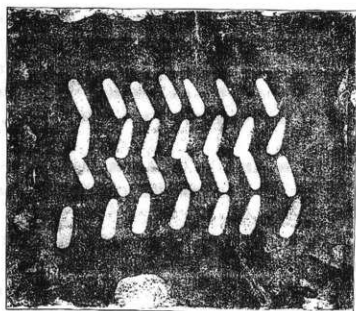
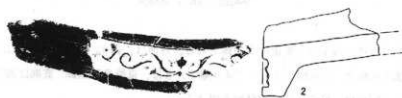
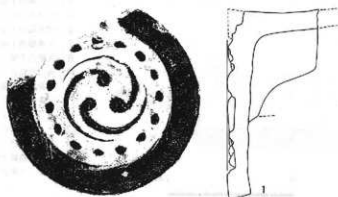
土壌S K 111(第42図)は、調査区北東端のS E 06に隣接する。東半分は、調査区外に延びる。残存長3.72m、深さ0.28mを測る。

出土遺物には、土師質土器、陶磁器、屋瓦などがある。第43図-1は、手づくねの土師質土器皿、4は焼烙。2は、肥前磁器碗。見込みには、蛇ノ目軸ハギがみられる。3は丹波焼小壺。外面は塗り土による化粧掛けを施す。内面には鉄錆が付着し、お歯黒壺として用いられたことがわかる。6は、刷毛目唐津片口鉢。

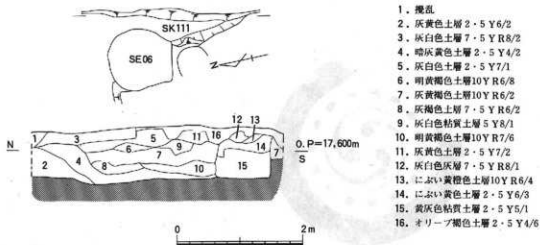
5は、左巻き三ツ巴文軒丸瓦。瓦当部の直径13.5cm、連珠数12を数える。7は、青海波文軒平瓦。上弦幅24.5cm。8は、均整唐草文軒棧瓦。瓦当部幅28.8cm、全長26.5cm。9は、道具瓦。これらの瓦類は、新しい様相を示す。

S E 05

S E 05(第44図)は、調査区北側の中央付近に位置する。直径0.96m、深さ1.93m以上を測る素掘り井戸である。第45図-1~4は、肥前磁器。2は碗の蓋。3は、外面に飛龍文を描く。5は、明石焼播鉢。6



第41圖 SE07出土遺物(5)



第42図 SK111遺構図

は、内面に灰釉を掛けた後、白土を二度掛けする鉢である。外面は、露胎。丹波焼か。7は、柿釉灯明皿。ロクロ成形で、底部は無釉で、左糸切りによって切り離す。8は、京焼系灰釉鉢。底部は露胎。9は、瀬戸・美濃焼灰釉鉢。10は、同煎掛。外面には、銅緑釉を掛ける。

SD14

SD14(第46図)は調査区北西端にあり、第27次調査区にまたがる溝である。全長5.73m、幅4.29m、0.22mを測る。これは、SK147や第27次調査区のSD08・09・10と一定間隔で平行して設けられており、すべて後に述べる第27次SK152~154、156~160、166~172という連続する円形土壇に切られているという共通する事象が認められることから、一連の遺構と考えられる。性格は断定できないが、『日本山海名産図説』(名著刊行会1979年)に伊丹の酒造りの図があり、長方形の石を並べた米の洗場がみられる。あるいは、そのような施設の可能性も考えられる。

出土遺物のうち、第47図一2は土師質土器皿。3は、唐津系陶器碗。内面に蛇ノ目軸ハギがみられる。4・6は、肥前磁器。7は、京焼系碗。11は、刷毛目唐津鉢。見込みに蛇ノ目軸ハギがみられる。

SK141

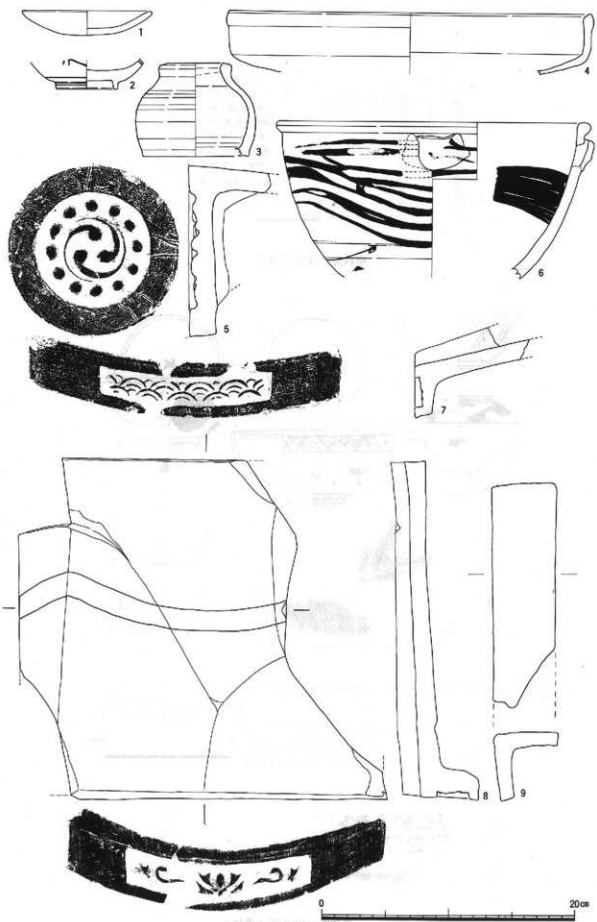
SK141(第46図)はSD14に隣接し、一辺0.84m、深さ0.25mを測る正方形の土壇である。

第47図一1は、土師質土器皿。5・12・13は、肥前磁器の染付。17は青磁香炉。8は、型作りのミニチュア漏斗。内面に透明釉を掛ける。9は、京焼系の器種不明品。10は、京焼系陶器碗。16も京焼系陶器碗。外面には、ヘラによる線刻文がみられる。これは、京焼系でも伊賀・信楽焼とは胎土を異にする。15は、丹波焼灰釉鉢。14は瀬戸・美濃焼腰鉗茶碗、15は同灰釉片口鉢。21は、伊賀・信楽焼鉄鉢鍋。19・20は甕の羽口。22は、土師質土器地輪である。

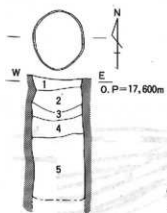
SK115

SK115(第48図)は調査区北端の中央付近に位置する。全長1.4m、幅0.72m、深さ0.46mを測る長方形の土壇である。

第49図一1・2は、肥前磁器碗。3は、ロクロ成形の土師質土器灯明皿。4は、伊賀・信楽焼鉄鉢鍋。5・6は、土師質土器地輪。7は、釈焼摺鉢。

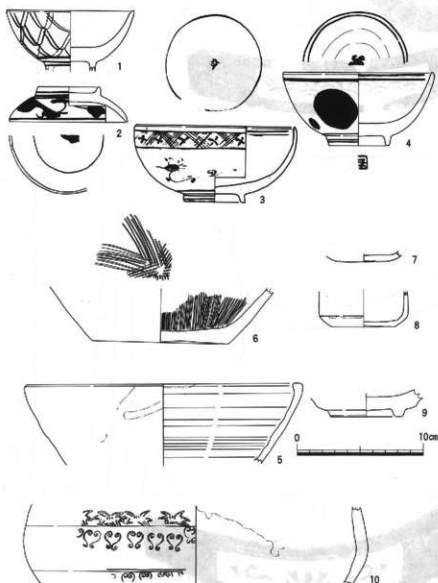


第43图 SK111出土遺物

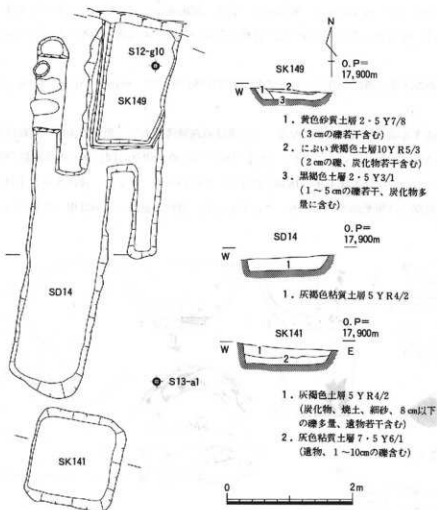


1. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4
(3cmの礫、焼土若干含む)
2. オリーブ褐色土層 2・5 Y3/4
(遺物多量に含む)
3. 黄褐色粘質土層 2・5 Y6/5
(遺物、炭化物若干含む)
4. 褐色土層 10 Y R4/4
(遺物、炭化物若干含む)
5. 暗褐色土層 10 Y R3/3

第44図 SE05遺構図



第45図 SE05出土遺物



第46図 SK149・SD14・SK141遺構図

SK129

SK129は、SK115から西南約5mの所に位置する。長径1.25m、深さ0.51mの不整形形の土壇である。出土遺物のうち第50図一1・2は、肥前磁器。3は、瀬戸・美濃焼灰釉香炉。4は、型作りの土人形の牛である。5は、土師質土器炮烙。6・7は、瓦質土器甕。同一個体とも考えられるが、接合しない。外型作りで、体部外面には小さな円形の文様が無数に付けられている。底部外面には、ハナレ砂痕がみられる。7の脚部には、外側から内側に貫通する少孔がみられる。これは、焼き上がりを良くするためであろう。

SK60

SK60は、調査区中程の西端に位置し、第27次調査区にまたがっている。検出長1.85m、幅1.5m、深さ0.3mの長方形の土壇である。西側は第27次調査の甕SX05に切られている。

第52図一1・2・5~7は肥前磁器。2は、型物の白磁鉢。5は、蓋。7は、蛇ノ目凹型高台の模花鉢。8は、産地不明の播鉢。底部には左糸切り痕が残る。9は、丹波焼播鉢。10は、土師質土器炮烙。11は、軒椽瓦である。

SK23

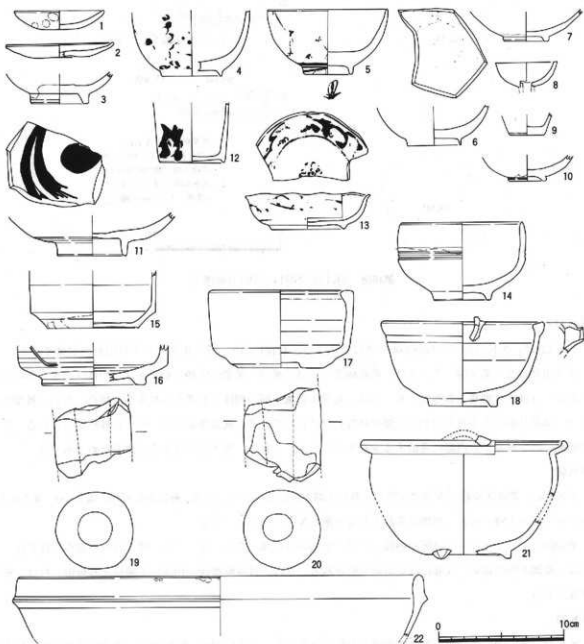
SK23 (第53図) は、第1次面の西側の中程に位置する。全長1.03m、幅0.58m、深さ0.51mを測る長方形を呈する土壇である。

出土遺物は少ないが、残りが良い。第54図1～3は、肥前磁器。1の見込みの五弁花文は、コンニャク印刷による。2は、碗の蓋。3の見込みの蛇ノ目輪ハギ部分には、重ね焼きの際のアルミナ砂が付着する。

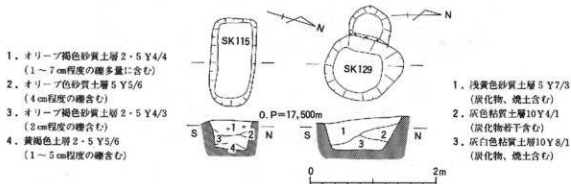
SK01

SK01は、調査区東南隅に位置し、東及び南は調査区外に延びる。検出長1.02m、幅1m、深さ0.16mを測る。

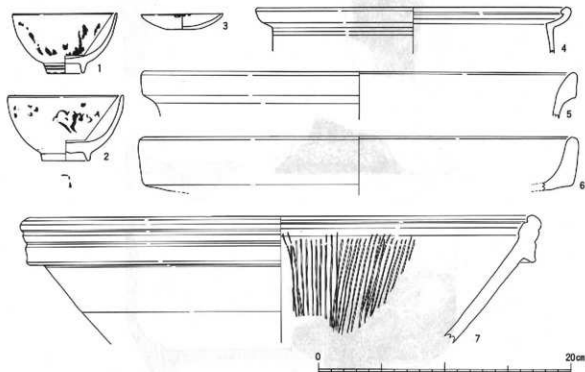
ここは、後述する溝SD01の南側になる。この溝は道路側溝であり、現在の南側の道路は江戸時代後期には屈曲して調査区にかかっていたことが、『文化(1804～18)改正伊丹之図](伊丹市博物館『伊丹古絵図集成』1982年、ただしこの絵図は天保七年(1836)の写し)からわかる。しかし、後述するSI01の存在からもこの部分がこの時期には屋敷地の一部であったと考えられ、道路が屈曲するのはIII-B期に入ってからと考え



第47図 SD14 (2・4・6・7・11)・SK141 (1・5・8～10・12～22) 出土遺物



第48図 SK115・SK129遺構図



第49図 SK115出土遺物

られる。とすれば、絵図の年代が正しければ、III-B期の始まりは、新しく文化年間という推定が成り立つ。

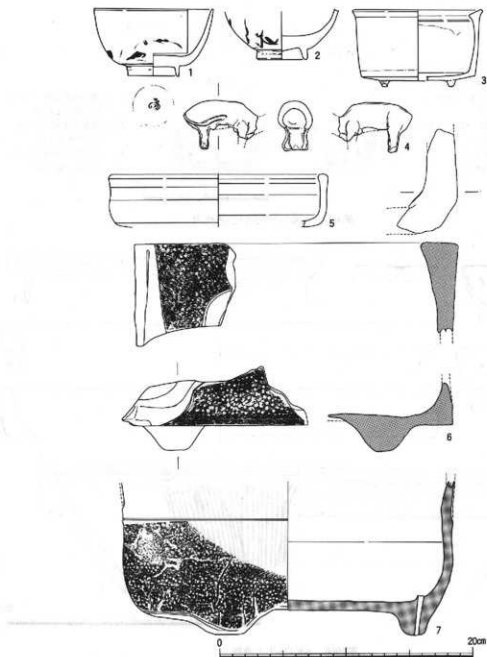
出土遺物のうち、第56図1~6は土師質土器皿。法量によって、

A類一口径7cm前後のもの(1~5)

B類一口径10.5cm(6)

の2種類のものが認められる。

7・9・11・13は肥前陶磁器。7は、肥前磁器ミニチュア碗。9は、肥前の陶胎染付筒型碗。体部外面の人物文は、コンニャク印判による。8は、京焼系陶器碗。10は外面に柿軸を掛けた器種不明品。底部外面には、左糸切り痕が残る。12は、焼塩壺の蓋である。焼塩壺は、伊丹郷町では少ない。これは天井部に「口坂」の刻印がある。天井部内面には、布目痕と指圧痕が残り、外型に粘土をつめ、布をかぶせた円柱状の型で押



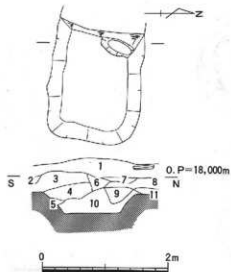
第50図 SK129出土遺物

した後指で押して整える、という成形過程が考えられる。14は、伊賀・信楽焼灰釉土瓶。15は、棧瓦。16は、均整唐草文軒平瓦である。

S K 21

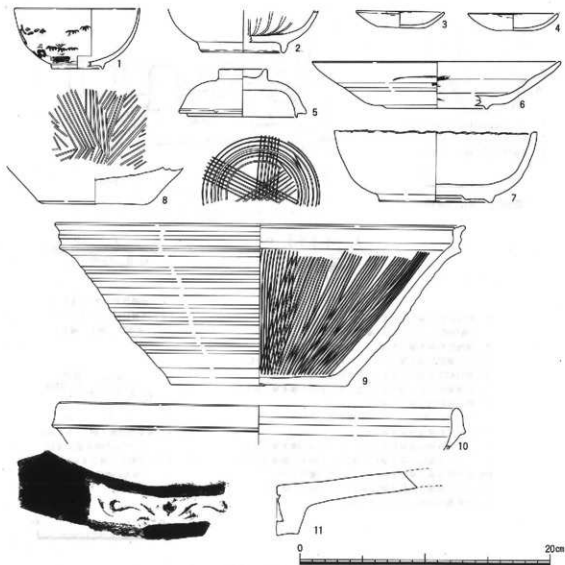
S K 21 (第57図) は、調査区南端の中程に位置し、全長2.8m、幅1.65m、深さ0.27mを測る浅い不整長方形の土壌である。

第58図1～6、10は肥前磁器。3は、広東型碗の蓋である。10は、青磁香炉。7は、柿釉灯明皿。8は、土師質土器炮烙。12は、産地不明の行平。外面は無釉で、内面に灰釉を掛ける。9は、これの把手である。同一個体であるが、残念ながら接合しない。11は、京焼系湯呑茶碗。13は、伊賀・信楽焼の灰釉鍋。14は、均整唐草文軒棧瓦である。瓦当部幅28.8cm、全長28.5cmを測る。

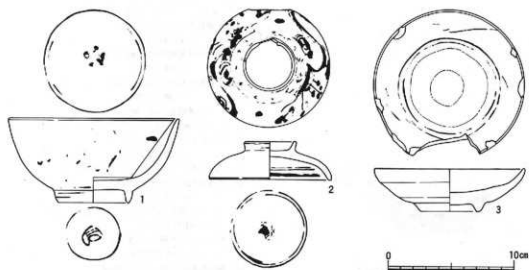


1. におい黄橙色粘質土層10Y R7/3
(遺物、1~3cmの礫を含む)
2. 灰黄褐色粘質土層10Y R5/2
(1~2cmの礫若干含む)
3. におい黄褐色粘質土層10Y R5/4
(1~2cmの礫若干含む)
4. 灰黄褐色粘質土層10Y R6/2
(1~5cmの礫若干含む)
5. におい黄橙色粘質土層10Y R7/2
(1cmの礫若干含む)
6. 橙色粘質土層7・5 Y R7/6
(1~2cmの礫若干含む)
7. 浅黄色粘質土層2・5 Y7/3 (細砂若干含む)
8. 赤褐色粘質土層5 Y R4/8
(1~3cmの礫若干含む)
9. におい黄橙色粘質土層10Y R6/4
(1cmの礫若干含む)
10. 褐灰色粘質土層7・5 Y R4/1
(1~6cmの礫若干含む)
11. 褐灰色粘質土層7・5 Y R5/1
(1cmの礫若干含む)

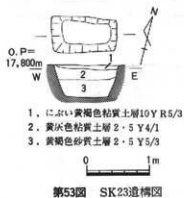
第51図 SK60遺構図



第52図 SK60出土遺物

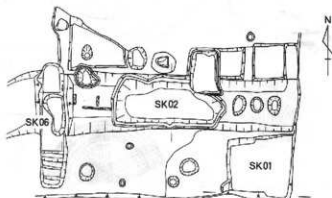


第54図 SK23出土遺物



1. におい黄褐色粘質土層10Y R5/3
2. 黄灰色粘質土層 2・5 Y4/1
3. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3

第53図 SK23遺構図



1. 褐色砂質土層10Y R4/4
(遺物若干、2～5cmの礫多量に含む)
2. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 (2cm大の礫若干含む)
3. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y4/2 (1cm大の礫多量に含む)
4. 褐色粘質土層10Y R4/6 (1～6cmの礫多量に含む)
5. 灰黄褐色砂質土層10Y R5/2 (2～4cmの礫多量に含む)
6. 褐色粘質土層10Y R5/1
(炭化物、遺物、1～3cmの礫多量に含む)
7. 黄褐色粘質土層10Y R7/8
8. におい黄褐色土層10Y R5/4 (1～2cmの礫多量に含む)
9. におい黄褐色砂質土層10Y R5/3 (1cm大の礫多量に含む)
10. 黄褐色砂質土層10Y R5/8 (2cm大の礫若干含む)
11. におい黄褐色粘質土層10Y R4/3 (1cm大の礫含む)
12. 明黄褐色土層 2・5 Y7/6 (地山)



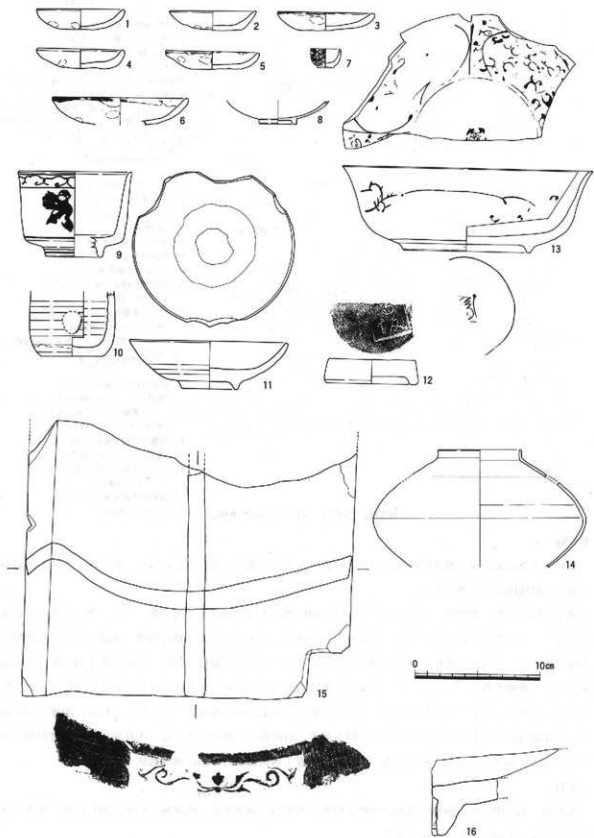
1. 黄褐色泥土 2・5 Y5/4
2. 灰黄色砂泥 2・5 Y6/2
(炭化物、焼土、礫含む)



1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/3
(5～15cmの礫多量に含む)
2. 灰色粘質土層 5 Y4/1
(5cm大の礫若干含む)



第55図 SK01・SK02・SK06遺構図



第56图 SK01出土遺物



第57図 SK21・SK08・SK24遺構図

SK08

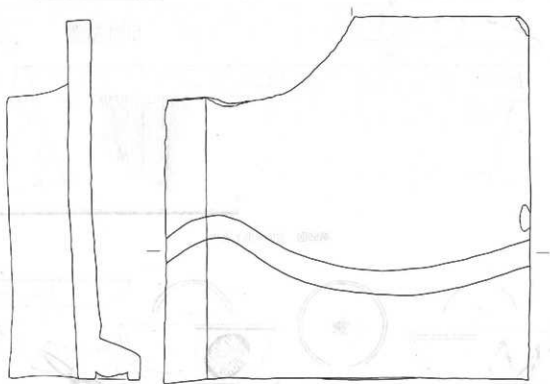
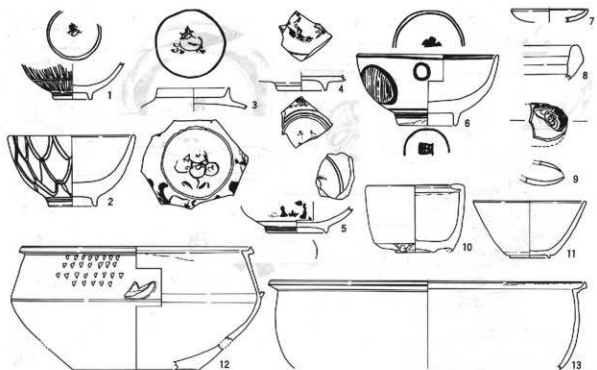
SK08(第57図)は、調査区南端の中段に位置しSK21に隣接する。全長3.24m、幅2.24m、深さ0.41mを測る不整形円形の土壌である。

出土遺物のうち、第59図-1・2・4・5は肥前磁器。4は、青磁染付碗の蓋。5は、皿。見込みの五弁花文はコンニャク印判による。3は、けしめんこの兵隊。6・7・10は柿釉灯明皿。8は、伊賀・信楽焼の鉄釉急須の蓋。下面は、露胎。9は、同灰釉灯火具。11・12は、土師質土器皿。SK01出土品に比べて白色味が強く、器壁も薄い。したがって、異なる生産集団の手によるものと考えられる。12は口径17.7cmと大型である。13は、ミニチュア土製品の釜。ロクロ成形で、底部外面に左糸切り痕を残す。14は、産地不明の鍋蓋。天井部外面は白土の上に鉄絵による文様を描き、銅線軸を二箇所に掛ける。天井部内面は、透明釉を掛ける。15は、伊賀・信楽焼の灰釉鍋蓋。16は、土師質土器地炉。17・18は堺焼播鉢である。

SK24

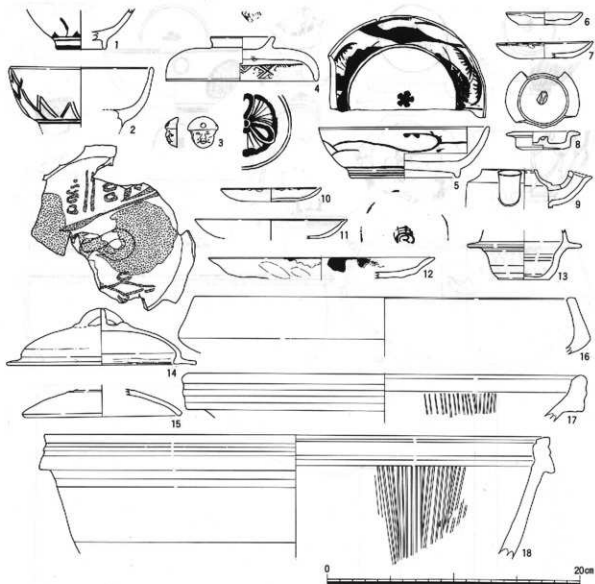
SK24(第57図)は、調査区南端の中段に位置しSK08に隣接する。検出長2.83m、幅1.11m、深さ0.16mを測る浅い不整形長方形の土壌である。

第60図-1~3は、肥前磁器。1は、広東型碗。4は、土師質土器皿。厚手で口径12.6cmを測る。5は、土師質のミニチュア片口鉢。6は、丹波焼播鉢。7は、瀬戸・美濃焼大皿。葉脈を鉄絵、葉を呉須によって描く。

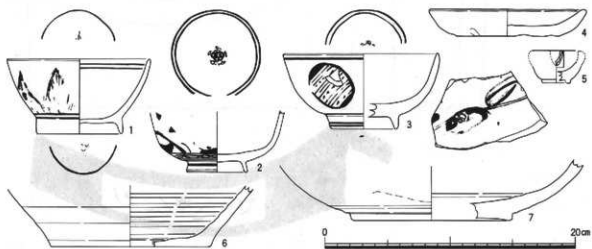


0 20cm

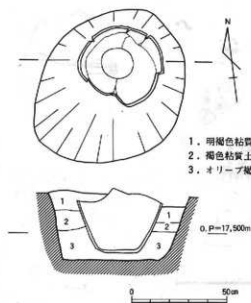
第58図 SK21出土遺物



第59圖 SK08出土遺物



第60圖 SK24出土遺物

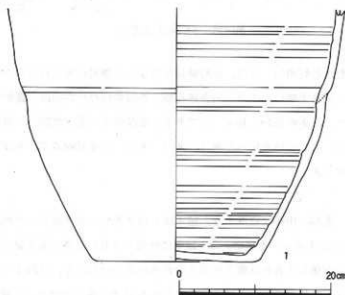


第61図 SI18 遺構図

1. 明褐色粘質土層 7・5 YR5/6 (1cm程度の焼若干含む)
2. 褐色粘質土層 7・5 YR4/6 (炭化物、2~4cm程度の焼若干含む)
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (炭化物、焼土若干含む)



第62図 SI18出土遺物(1)



第63図 SI18出土遺物(2)

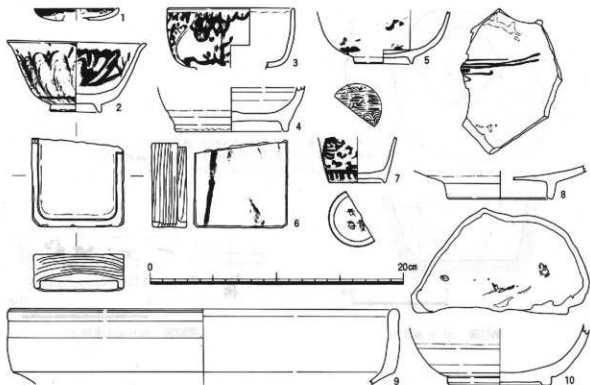
S I 18

S I 18 (第61図) は、調査区北西端に位置する。丹波焼甕を埋めた、便所と考えられる遺構である。掘形は長径1.8m、深さ0.7mを測る。

甕は上部を欠失しており、残存高33.3cmを測る。甕の内部から、第62図の肥前磁器が出土している。1は碗、2は皿である。いずれも、18世紀後半のものである。

S K 149

S K 149 (第46図) は北西隅に位置し、前述のS D 14を切る。検出長1.96m、幅0.61m、深さ0.16mを測る。



第64図 SK149出土遺物

第64図-1は、土師質土器灯明皿。2は、長崎県長与窯などに類例がみられる刷毛目唐津碗。3・5は、肥前磁器染付碗。7は、同書壺猪口。4は、同青磁花瓶。外面畳付及び内面は、露胎。6は、石製硯。花崗岩質の石材を用いており、浅黄橙色10YR 8/3である。愛媛県伊予市の虎間石の可能性があるが、断定できない(名倉鳳山1986年)。この石材を用いた硯は、多い。8は、京焼風陶器皿。9は、土師質土器地烙。10は、瀬戸・美濃焼灰釉鉢である。

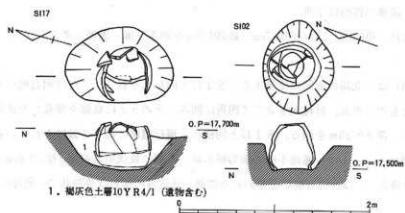
S 117

S 117 (第65図)は、北端の中段に位置する。植木鉢を倒立させ、水琴窟として利用したものである。掘形の長径1.12m、深さ0.4mを測る。水琴窟とは、地中に底部を穿孔した甕や壺を倒立させて埋め、地上から水を注いで、内部で水滴が落ちる音を反響させてその音色を楽しむもので、琴のような音がすることから名付けられたとされる。江戸時代後期頃から始まったとされる(「水琴窟アラルカト」「庭前番庭の水景」建築資料研究所1986年)。伊丹郷町の他の地点でも、数多く検出している。基本的に排水施設のひとつであり、便所の手洗い水が落ちる場所など庭の一部に設けられることが多い。ところが、ここでは道路に面しており、便所以外の、たとえば台所の排水などを利用していたことも想定される。

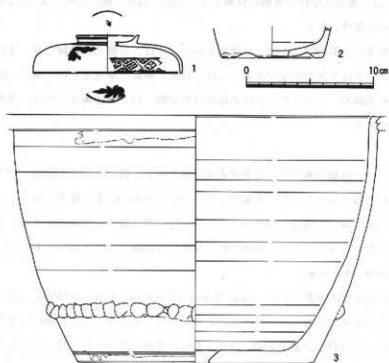
用いられた植木鉢(第66図-3)は、産地不明の陶器である。口縁端部が欠いており、残存口径29.1cm、器高19.6cmを測る。底部に直径2.5cmの円孔を設ける。これは、水琴窟として用いるときに設けられたものであろう。胎土は粗く、底部外面及び口縁部上面以外は塗り土による化粧掛けを行う。徳島県の大谷焼の可能性がある。同図1・2は埋土出土遺物。1は、肥前磁器染付碗の蓋。2は、産地不明の陶器植木鉢である。底部は型押し成形。底部に直径2.1cmの円孔をあける。

S P 322

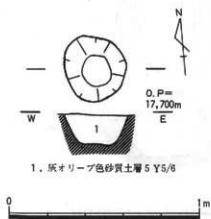
S P 322 (第67図)は、北西端に位置する、土師質土器丸火鉢を埋めた遺構である。掘形の直径0.32m、深



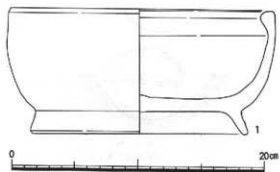
第65図 SI17・SI02 透構図



第66図 SI17出土遺物



第67図 SP322透構図



第68図 SP322出土遺物

さ0.15mを測る。遺構の性格は不明。

土師質土器丸火鉢 (第68図) は口径20.7cm、器高9.9cmを測る。堺・湊焼と考えられる。

S I 14

S I 14 (第69図) は、北端の東側に位置する。S I 17と同じ水琴窟で、これは明石焼かと考えられる播鉢と平瓦を利用したもの。平瓦、軒椀瓦を立てて四角に囲み、そのうえに底部を穿孔した播鉢を伏せて乗せる。掘形の直径0.59m、深さ0.23mを測る。S I 17と同様に、現行道路に面して設けられている。

出土遺物第70図のうち、1は、産地不明の陶器植木鉢。底部に焼成前の直径(推)2.6cmの穿孔がある。2は、均整唐草文軒椀瓦。3は、明石焼かと思われる播鉢。見込みの掘目は放射状で、底部に直径2.5cmの穿孔を施す。

S K 30

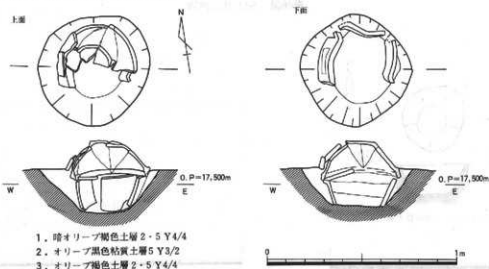
S K 30 (第71図) は、調査区中程の東側に位置する。全長2.71m、幅1.55m、深さ0.7mを測る長方形の土壌である。地下室の可能性はある。

出土遺物は比較的多い。第72図—1は、土師質土器皿。2は、京焼系灰釉鉢の蓋。3は、受け付きの柿輪灯明皿。4は泥面子。5は土人形の家である。7は、白地に鉄絵で草花文を描く瀬戸・美濃焼湯呑。6・8・9~11は、11は、肥前磁器。このうち、9は青磁染付筒型碗、10・11は碗蓋。12は、堺焼播鉢。口縁の片口部に「佐」の刻印がある。

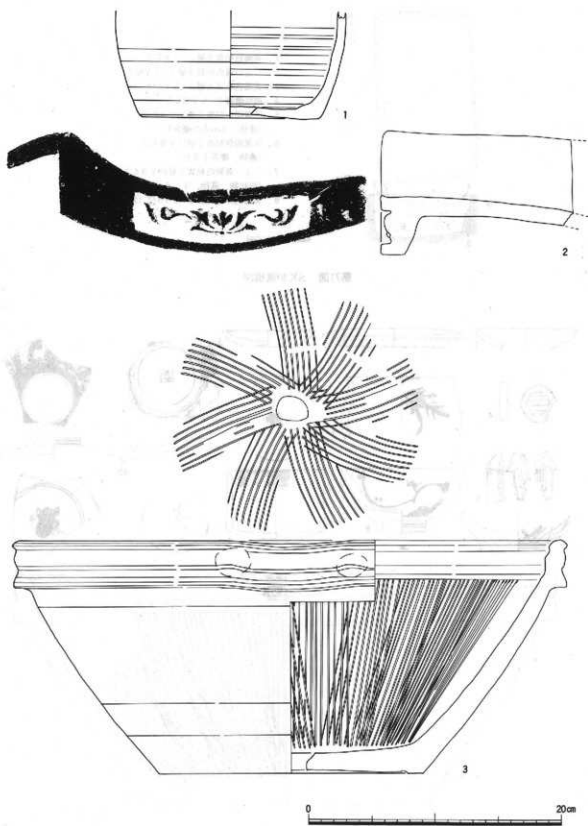
S I 01

S I 01 (第73図) は、南端の東寄りに位置する水琴窟である。掘形の直径0.65m、深さ1.03mを測る。これも現行道路に面して設けられている。下部は、瓦管を縦に埋めて地中に排水させる。瓦管の上部の周囲には、拳大の石を並べる。壁の上部は、白色タタキ (第73図、第3層) を播鉢状に塗る。このように、下に排水管を設ける例は少ない。またここは、前述の如く墓末には道路となった部分であるが、それまでは屋敷地であったことがこの例でもわかる。

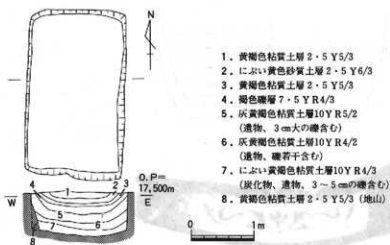
第74図は、本体の丹波焼鉄釉甕である。底部に2.6cmの穿孔がみられる。口径36cm、器高53.8cm。底部に2.8cmの穿孔がある。底部外面の周縁には、ハナレ砂がみられる。第75図—1は、瀬戸・美濃焼鉄釉天目茶碗。16世紀後半の遺物で、水琴窟を設置する際、下のS F 01の遺物が掘削されて混入したものである。2は、瓦管である。全長22.9cm、直径14cmを測る。



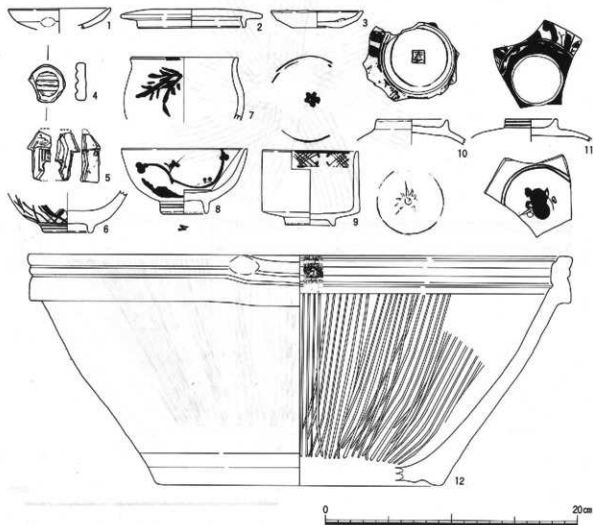
第69図 S I 14 遺構図



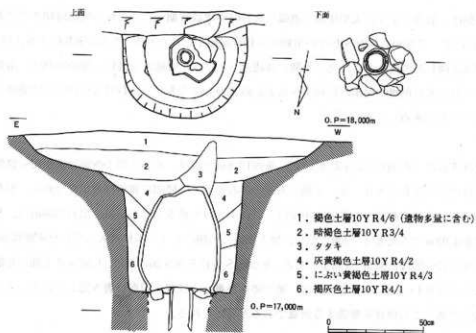
第70图 S114出土遗物



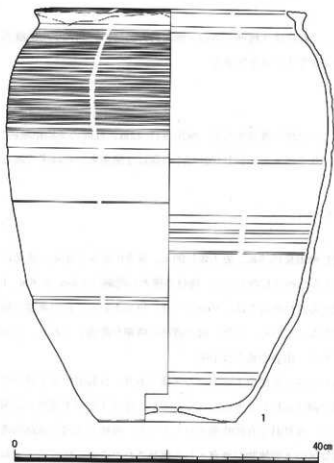
第71図 SK30遺構図



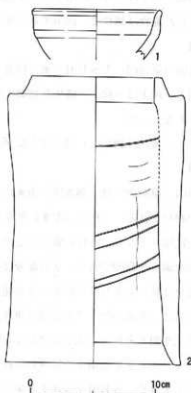
第72図 SK30出土遺物



第73図 S101 造構図



第74図 S101出土遺物(1)



第75図 S101出土遺物(2)

Ⅲ-B期

Ⅲ-B期は、前述のように大型建物（酒蔵）S B01の建設時期から、これの廃絶時期までである。建設時期は、これによって埋められたS E07の遺物から19世紀前半とみられる。さらにS K01やS I01の存在と「文化改正伊丹之図」との関係から、文化年間には建設されていた可能性が高い。廃絶時期は、南側の町屋の便漕に用いられた大谷焼甕が明治時代後半から大正時代のものであり、S D01もそのころに廃絶していることから、このころに求められる。

S B01

大型建物S B01（第76図）は南北23.63m、東西12.8mを測り、6×3間で西側に庇が付く建物である。検出したのは礎石の根石であり、4、5個の人頭大の石を並べ、隙間に黄色粘質土をつめる。石材は、主に花崗岩を用いる。地面の軟弱なS F01の中では、これを8段も積み上げている。根石の間隔は、S S1からS S2までが3.93mで六尺五寸で2間となり、地上ではこの間にもう一本柱が入っていた可能性がある。また、S S13とS S17の間は2.95mで1間半である。底部のS S17とS S20の間は、1.97mで1間の距離となっている。このうちS S4・S S5・S S11には、墨で礎石を乗せる位置を円形に書き記している。この建物は、規模から考えて酒どころ伊丹を象徴する酒蔵であると考えられる。

S S09

S B01の根石の掘形から出土した遺物は少ない。S S09は下に井戸S E07があり、根石は3段になっていた。第77図は、この掘形から出土した遺物である。1は、京焼系鉄釉陶器土甌の蓋。3は、同鍋の底部である。胎土は灰色で伊賀・信楽焼以外のもの。2は、肥前磁器染付碗。4は、同皿である。

S A01

S A01（第78図）はS B01の北東に位置し、これに伴う櫓列である。検出長9.25m、柱間の平均距離約3mを測る。埋土は一樣に、暗オリーブ色粘質土5 Y 4/3を呈する。

出土した遺物は細片で、図示するに至らない。

S A02

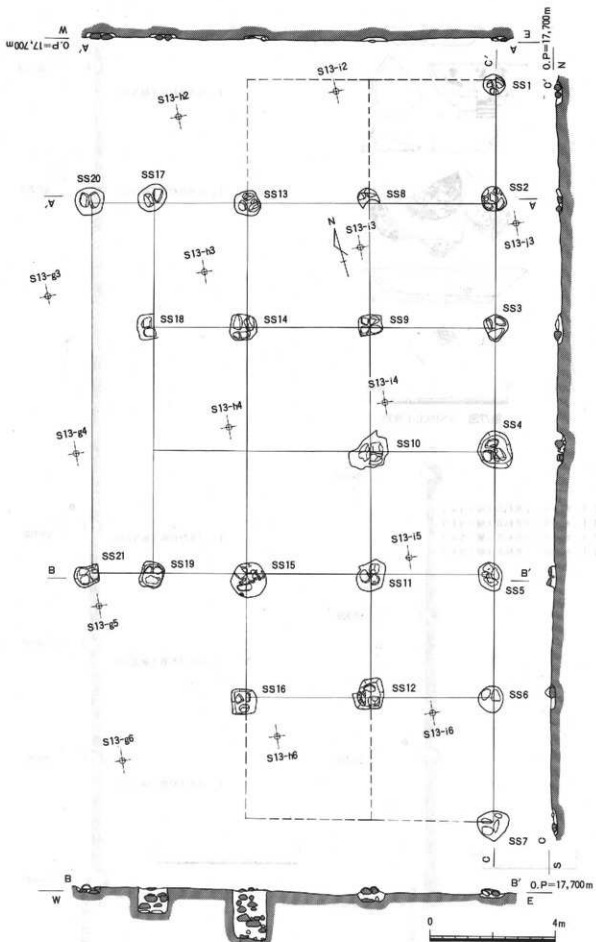
S A02（第79図）もS B01の東に位置し、これに伴う櫓列である。検出長17.43m、柱間の平均距離約2.5mを測る。埋土は一樣に、暗灰色粘質土N 3/0を呈する。S P102-203の間は2箇所あったはずであるが、検出されなかった。

出土した遺物は細片で、図示するに至らない。

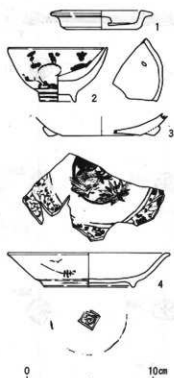
S D01

S D01（第80図）は、調査区の南東に位置し検出長15.5m、最大幅1.99m、深さ0.57mを測る。底部には、底板の棧材が残る。これは、底波えを容易にするためのものである。棧材の横木の間隔は0.7m、0.6m、0.6mで一区切りとなり、その繰り返して連結する。材の太さは、9cm（三寸）角である。これの東端の続きが第40次調査S D02であり、その部分は石組となっている。ただ、出土遺物の時期が前後しており、第40次調査部分は新しく作り直されている可能性がある。南側の続きは不明。

この溝は、前述の如く「文化改正伊丹之図」にみえる屈曲する道路の側溝であり、S K01やS I01の存在から文化年間をそれほどさかのぼらない時期に設けられたと考えられる。また、後述する出土遺物から明治時代後半から大正年間頃までに埋められており、S B01と存続時期を同じくする。規模も普通の道路側溝に比べると大きく、S B01や後述する第27次調査区の大型建物が酒蔵として建築されたことに伴って、大量の水を排水する必要に迫られて設けられたものと考えられる。

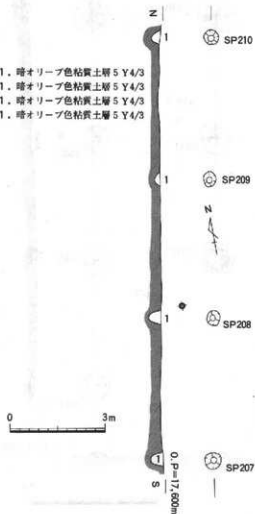


第76図 SB01遺構図

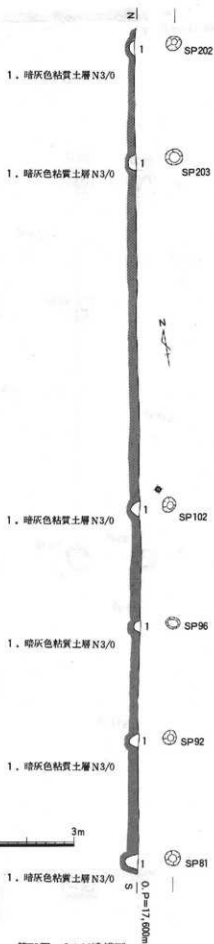


第77図 SS09出土遺物

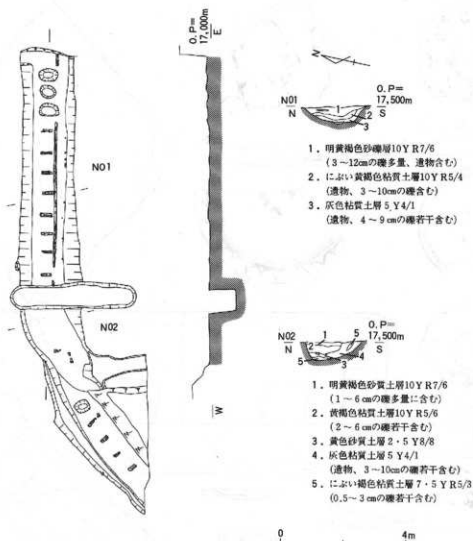
SP207 1. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/3
 SP208 1. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/3
 SP209 1. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/3
 SP210 1. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/3



第78図 SA01遺構図



第79図 SA02遺構図



第80図 SD01遺構図

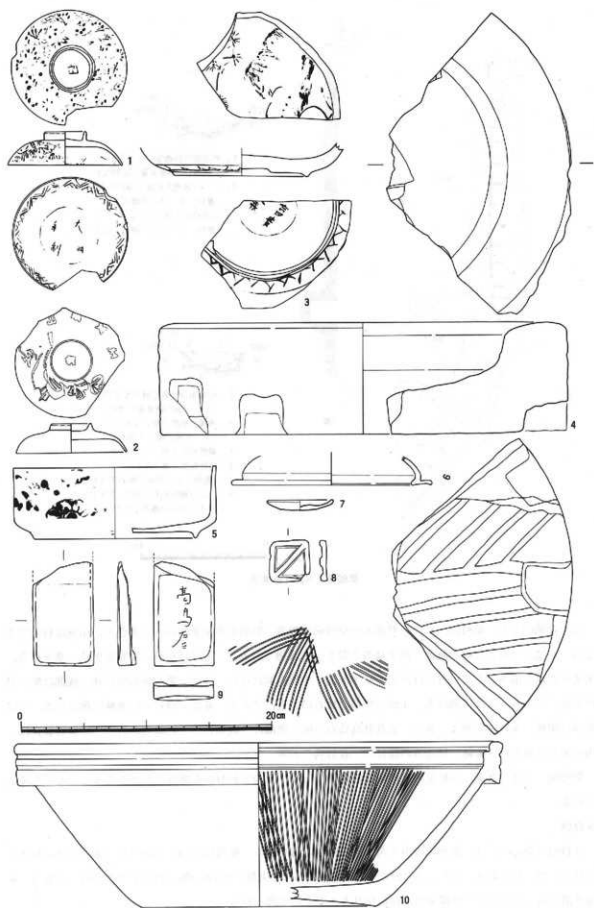
出土遺物のうち、第81図-1は、肥前系の染付磁器碗蓋。呉須がやや紫がかった青色で、産地は特定できない。2は、クロム青磁の碗蓋。出土品の下限を示す遺物である。一方には草花の葉脈を黒色、葉を緑色、果実を茶色で描き、もう一方には黒色で文字を記すが読み取れない。3は、肥前磁器染付鉢。底部は蛇の目四角高台である。5は、同段重。4は、花崗岩製石臼の上臼である。6は、伊賀・信楽焼灰釉鍋の蓋。7は、柿釉灯明皿。8は、泥面子。9は、滋賀県高島石の硯。底部に「高島石口」の線刻がある。粘板岩製10は、明石焼かと思われる播鉢。見込みの播目は、放射状である。

第82図-1は、奈良瓦。16世紀の有岡城期の遺物であり、下のS F01から掘り返されて混入したものと考えられる。

SD04

SD04 (第83図) は、調査区西南を西北西に延びる溝である。検出長8.2m、幅0.8m、深さ0.24mを測る。SD02に切られており、こちらの方がやや古い。西側は、中央部に0.3mの幅で白色タタキが残っており、素掘り溝であったものをこの部分だけ後に作り変えたものと思われる。

出土遺物のうち、第84図-1は、肥前系染付磁器釜。器壁が1mm程度と非常に薄い、型作りの製品である。



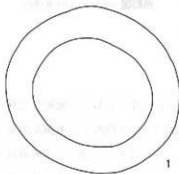
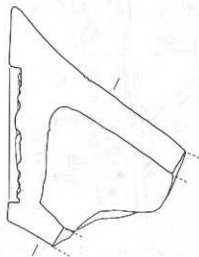
第81图 SD01出土遺物(1)

4は、手づくわの土師質土器灯明皿。器壁は厚く、口径も（推）16.1cmと大型である。このような大型の皿は、長時間の照明に適することから、酒造りの作業場で主として用いられたことが想定される（伊丹市教育委員会小長谷正治氏の御教示による）。

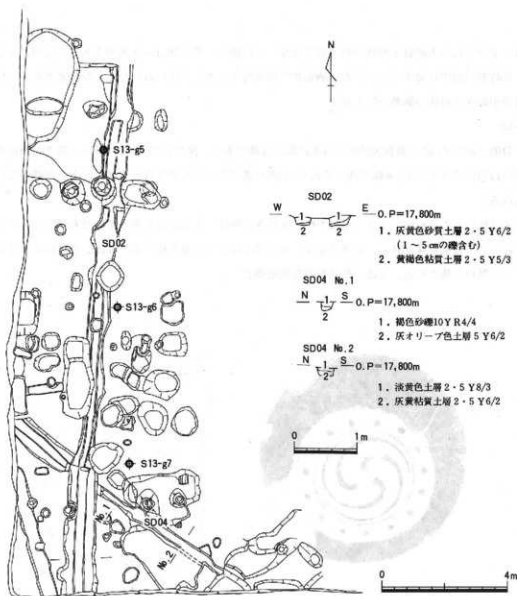
SD02

SD02（第83図）は、調査区西南を南北に延びる溝である。検出長16.8m、幅1m、深さ0.26mを測る。中央部に白色のタタキが0.3m幅で残っており、素掘り溝であったものを後にタタキによって補強したものと考えられる。

出土遺物のうち第84図-2は、産地不明の脚付き灯明具。上部は皿が乗っていたものと思われるが欠失している。胎土は灰色味が強く、底部外面及び脚内部を除いて灰釉を掛ける。3は、肥前磁器染付皿。口縁部には、口錆びが施される。5は、砂岩製の荒砥用砥石。



第82図 SD01出土遺物(2)



第83図 SD02・04遺構図

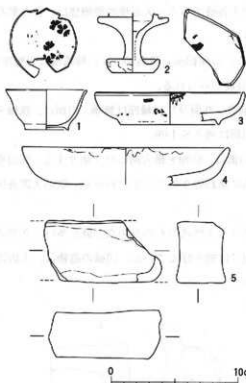
5. IV期の遺構と遺物

IV期は、大型建物（酒蔵）SB01やこれに伴うSD01が廃絶した後の時期で、明治時代後半から大正時代頃以降、現代までである。この区域に間口3~5間程度の町屋が再び立ち並んだことが、一定間隔で並ぶ二基一組の大谷焼便槽壁によってわかる。これはまた、第二次大戦直後の航空写真（図版1）にみられる建物とはほぼ一致し、再開発が始まるまで変わっていないことがその後の航空写真でも判明する（図版2）。これを見ると、南側の道路に面する建物は、棟割りの建物となっている。また中央部は、南北に長い建物が2棟建てられている。これは、さきのSB01とは全く一致しない建物である。

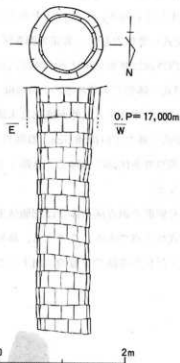
SE02

調査区北側の中程よりやや東に寄った所に位置する。中央部の南北建物に付随すると考えられる井戸である。井戸枠瓦横みの井戸で、掘形の直径1.16m、井筒の直径0.83mを測る。井戸枠瓦は、一段10枚で構成されている。深さは、3.89mまで確認したが底には達しなかった。

この井戸は大量の瓦が投棄されており、出土遺物は主に瓦類である。第86図-1は、棟端瓦、手張り成形。



第84図 SD02 (2・3・5)・SD04 (1・4) 出土遺物



第85図 SE02遺構図

2は、無文の軒棧瓦。「に」の刻印がみられる。第87図-1は、無文の軒丸瓦付きの軒棧瓦。「別府村山芳」の刻印がある。別府村は明石の別府かと思われるが、現段階では断定できない。第88図-1は、棧瓦。全長25.5cm、幅25.2cmである。第89図-1は、棟瓦。2は、不明木製品。3は、井戸杵瓦。全長23.2cm、幅27.8cm、厚さ4.5cmを測る。

SK02

SK02 (第55図) は、調査区南側でSD01を切って設けられた土塋である。全長3.38m、幅1.32m、深さ0.6mを測る、不整形長方形を呈する土塋である。

第90図-1は、泥面子のおたまじゃくしか。2は、肥前磁器青磁碗。底部無輪の17世紀中頃の製品であり、混入と考えられる。3は、底部を穿孔した、丹波焼植木鉢。4は、産地不明の陶器鉢。軟質で底部外面には、ハナレ砂がみられる。また、解説できないが、墨書がなされている。5は、京焼系鉄釉鍋。生産地は不明。6も、産地不明の鉄釉鉢。胎土は、瀬戸・美濃焼に似る。

SK06

SK06 (第55図) SK02の西側に位置する。第二次大戦中の防空壕のSK92を切って営まれており、最新の遺構である。全長1.34m、幅0.68m、深さ0.6mを測る。

出土遺物のうち、第91図-1は不明鉄製品。図の上側に2箇所の円孔がある。2は、産地不明の陶器植木鉢。3は、黒の基石。4は、土師質土器地炆。小型品である。5は、丹波焼鉄釉鉢である。

SI03

SI03 (第92図) は、調査区南東側に位置し、SI04と一緒に一組となる便槽である。掘形の長径0.64m、深さ0.32mを測る。これらは、いずれも内部に白色の付着物があり、それと断定できる。付着物の成分は不明である。

便槽に用いられた甕第97図S I 03は、徳島県鳴門市の大谷焼である。大谷焼の便槽甕は、伊丹郷町の各所で出土しているが、これらは次の3つの型式に分類できる。

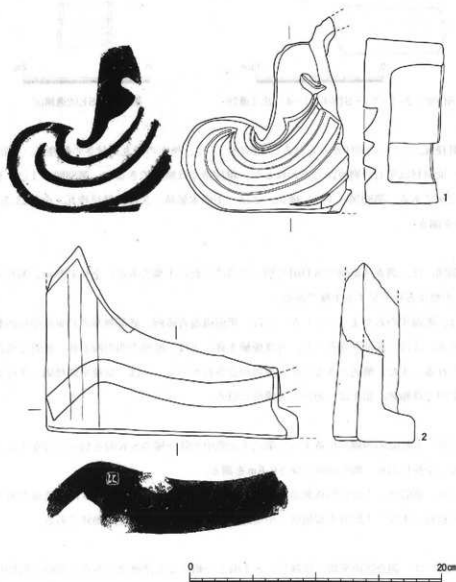
1型式一甕型のもの。第36次調査区S I 01がそれである。口径43cm、器高50cm。口縁端部は化粧掛けのみ。

内外面に鉄釉を掛ける。底部内面には、5箇所の砂目跡がみられる。

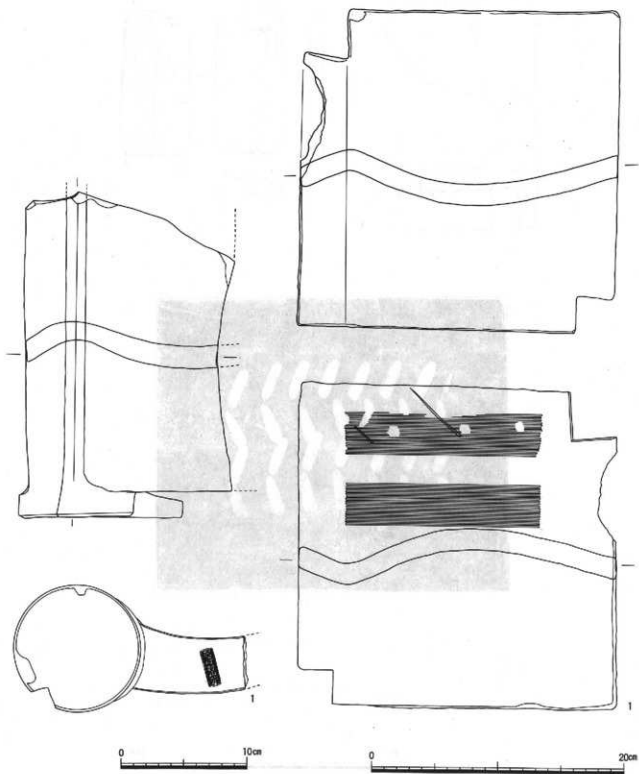
2型式一鉢型で大型のもの。口径60.6cm、器高45.4cm前後。外面及び口縁部は無釉。内面は、鉄釉を横方向にハケ塗りする。外面底部は未調整でハナレ砂が円形に残るS I 09。

3型式一鉢型で口径56.7cm、器高33.5cm前後のもの。内面は、鉄釉を横方向にハケ塗りする。外面底部は未調整外面体部は無釉で、体部上方に目跡が残り、直に重ね焼きしたことがわかる。第35次調査区S I 01など。

J R 駅前の調査区全体では28個体出土しており、このうち3型式のものが20点と最も多い。2型式は4点、1型式は4点である。このうち、鉢形のもの、生産地では碗と呼んでいる。同様の遺物は、大阪湾沿岸の近世・近代の遺跡で普遍的に出土している(川口1990年)。

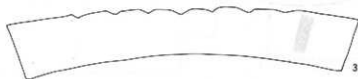
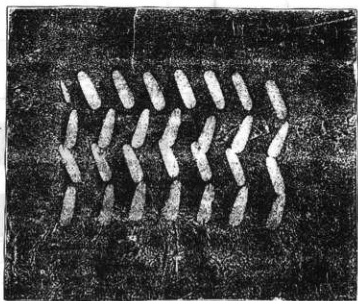
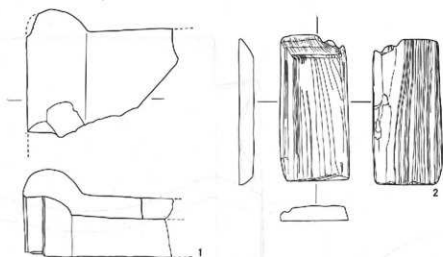


第86図 SE02出土遺物(1)

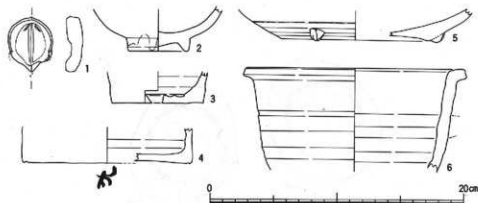


第87圖 SE02出土遺物(2)

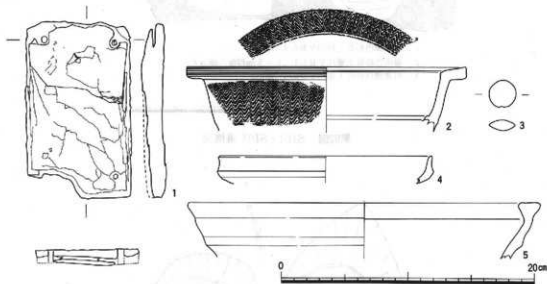
第88圖 SE02出土遺物(3)



第89図 SE02出土遺物(4)



第90図 SK02出土遺物



第91図 SK06出土遺物

S I 03は、このうち3型式のものである。

S I 04

S I 04 (第92図) は、S I 03に隣接する。掘形の長径0.68m、深さ0.34mを測る。甕は図示しなかったが、3型式のものである。

S I 05

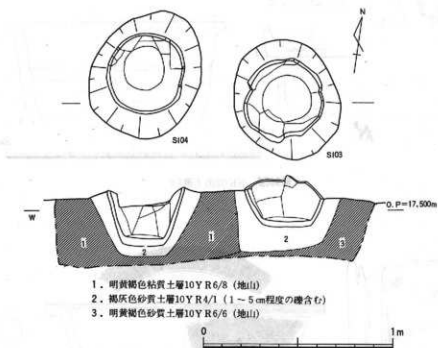
S I 05 (第93図) は、S I 03・04より西側に位置し、S I 06と2基一組の便槽である。掘形の長径0.62m、深さ0.33mを測る。1型式の甕を用いている (第96図)。

S I 06

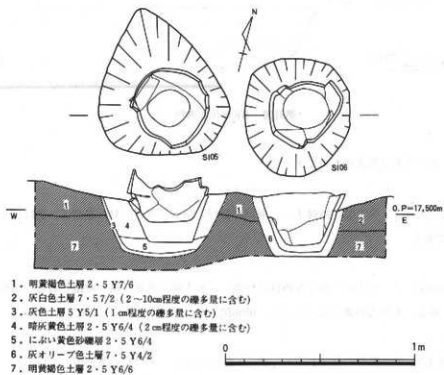
S I 06 (第93図) は、掘形の長径0.78m、深さ0.32mを測る。1型式の甕を用いている。

S I 09

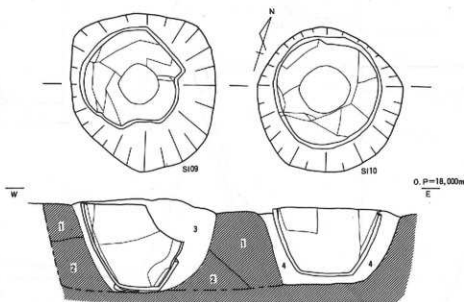
調査区西端に位置する。S I 09 (第94図) は、掘形の長径0.82m、深さ0.49mを測る。2型式の鉢形のものを用いている。



第92図 SI04・SI03 遺構図



第93図 SI05・SI06 遺構図



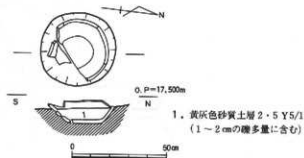
1. 褐色砂質土層 7・5 Y R 4/6 (地山)
2. 明黄褐色砂質土層 10 Y R 6/8 (地山)
3. 褐灰色粘質土層 10 Y R 4/1 (焼土若干含む)
4. によい黄褐色土層 10 Y R 4/3 (炭化物、焼土若干含む)



第94図 SI09・SI10 遺構図



第95図 SI09・SI10出土遺物



1. 黄灰色砂質土層 2・5 Y 5/1
(1~2cmの礫多量に含む)

第96図 SI13 遺構図

S I 10

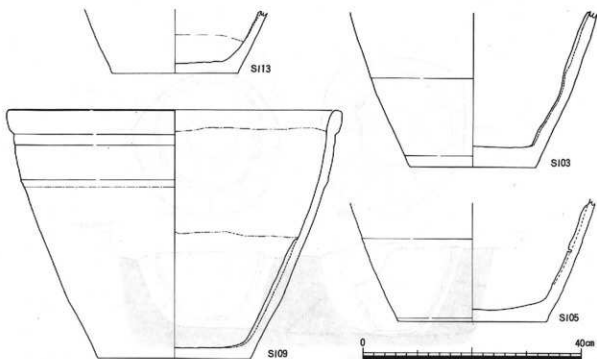
S I 09と2基一組の便槽である。掘形の長径0.76m、深さ0.4mを測る。器形は判定が難しい。この掘形から第95図に示した瓦器碗が出土している。

S I 13

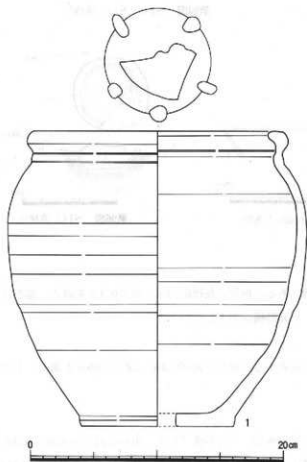
S I 13は、北側の東端に位置する。掘形の直径0.4m、深さ0.09mを測る。I 1型式の甕を用いている(第96図)。

S I 02

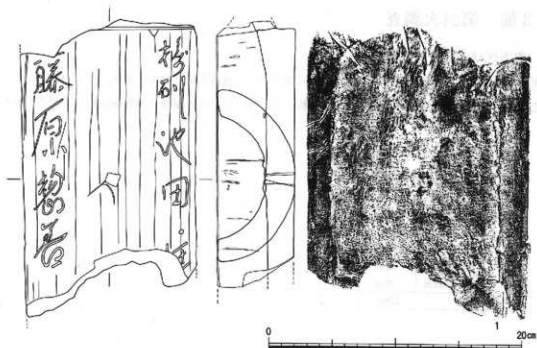
S I 02(第65図)は中央部で検出した水琴窟である。用いられている甕(第98図)は、丹波焼鉄軸小型甕である。外面体部は化粧掛けし、内面に鉄軸を掛ける。底部外面は無釉。底部内面に5箇所の胎土目跡が残る。底部は、穿孔する。



第97圖 S103・05・09・13出土遺物



第98圖 S102出土遺物



第99図 表面採集遺物

表面採集遺物

第98図は、表面採集した軒丸瓦である。一辺1cmの角形の釘穴がある。凸面に「摂州池田口藤原惣善」のへらによる線刻があり、現在の大阪府池田市で生産された瓦であることがわかる。瓦の生産地が判明する貴重な例である。遺物の時期は、江戸時代後期のうちに取まるものと考えられる。

第3節 第24次調査

1. 調査区域と調査の方法

調査対象区域は、現在の主郭残存部分の西側に相当する。道路北側に2本、南側に4本のトレンチを設定し、北からアルファベット順にAからFまで呼称した。各トレンチの規模及び発掘面積は下記のとおりである。

トレンチ の名称	規模		発掘面積
	幅	長さ	
A	6 m	23 m	138㎡
B	2 m	26 m	52㎡
C	2 m	9 m	18㎡
D	2 m	10 m	20㎡
E	2 m	31 m	62㎡
F	2 m	18 m	36㎡
合 計			326㎡

2. 調査の成果

(1) Aトレンチ (第1図)

遺構としては、土壌4ヵ所と堀があげられる。

Ⅲ期の遺構と遺物

SK02 (第3図) は、トレンチの西壁に接して、東西の幅は5.5mを測る。出土遺物は、肥前磁器碗・京焼風陶器などがあげられる。

SF01は、幅14.5m、深さ4.7mを測る堀であり (第1図)、23次の調査区域のもの (幅3～6m、深さ2～2.5m) よりも大規模であることがわかった。石垣を持たない素掘りのものである。堀の形状は、西側が底から65度の急な角度で立ち上がり、東側が35度のゆるやかな角度で立ち上がる箱堀である。土層は、大きく見て上・中・下の3層に分層される。下層は、灰色泥土層である。

出土遺物としては、屋瓦・陶磁器があげられる。中・上層出土陶磁器には、肥前磁器摺絵や銅板転写の染付の碗や皿、三田青磁やクロム青磁の碗や皿など明治以降のものとおもわれる。下層出土陶磁器には、肥前磁器の染付のくらわんか茶碗・広東碗・筒茶碗・そば猪口・德利・備前焼や丹波焼の擂鉢、瀬戸・美濃焼の灰釉・鉄釉の碗・皿、柿釉灯明皿や土師質灯明皿などの灯明具がみられる。时期的にみると18世紀のものが中心である。

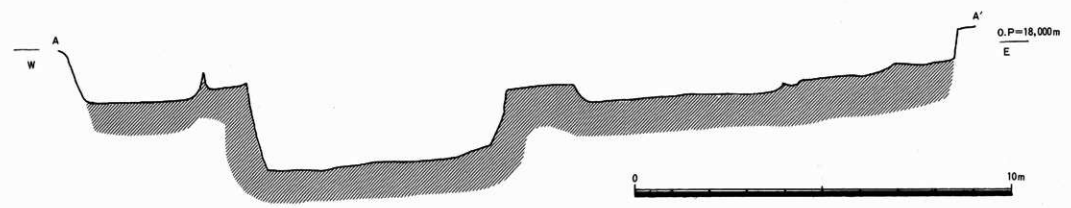
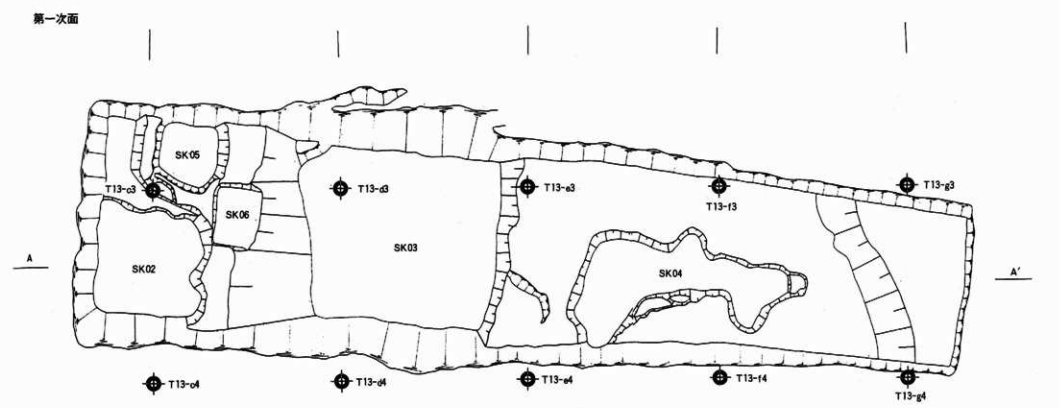
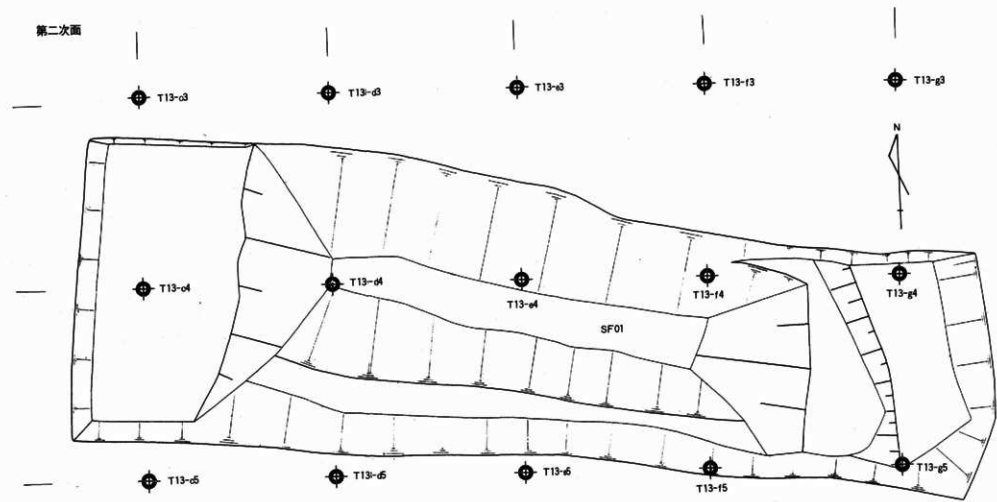
堀の下層の泥土層の部分は、18世紀末に埋められたものだと思われ、上層は明治以降になってから埋められたものと思われる。

(2) Bトレンチ (第12図)

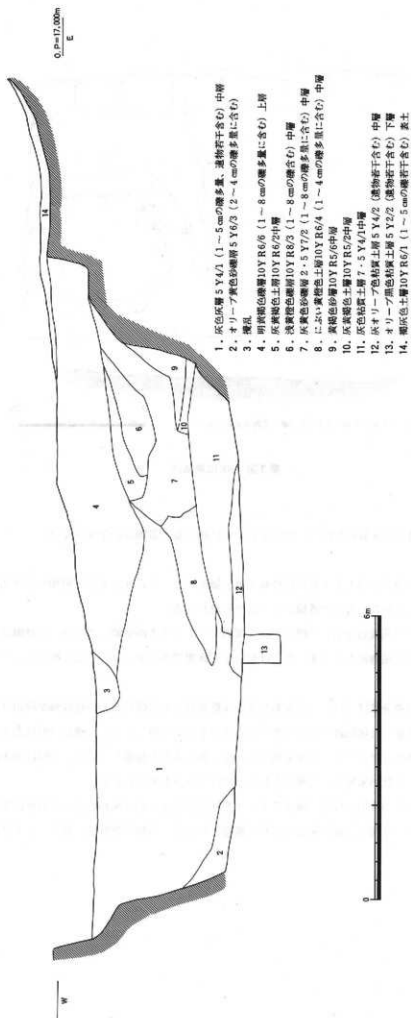
地表面から最深0.7m、最も浅いところで0.2mまでの表土及び攪乱層を機械で掘り下げた。その結果遺構は、土壌10ヵ所、礎石4ヵ所を検出し、南北に延びる堀の東側の堀形 (東西16.6m) が確認された。

Ⅲ期の遺構と遺物

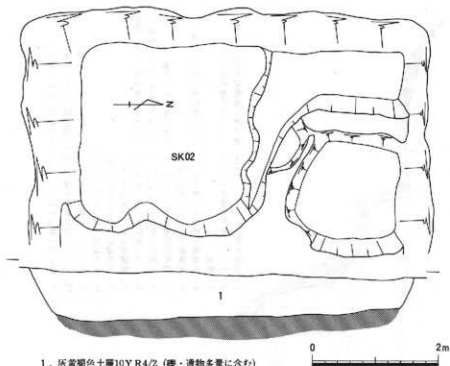
トレンチの東側で地山を掘り込んで設けられたSK01では、幅が南北0.94m、深さ0.14mで、遺物は平瓦片3点、磁器片4点が出土した。出土遺物からみると、幕末から明治にかけての遺構だと考えられる。



第1図 Aトレンチ遺構全体図



第2図 Aトレンチ北壁土層図



1. 灰黄褐色土層10YR4/2 (礫・遺物多量を含む)

第3図 SK02遺構図

Bトレンチの出土遺物はSK01だけで、他のトレンチに比べると遺物はかなり少ない。

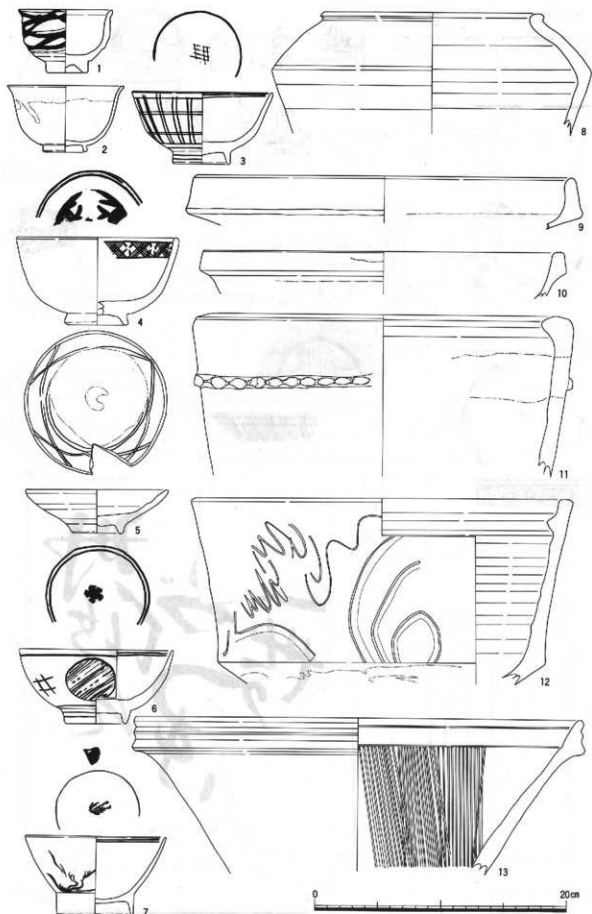
Ⅳ期の遺構と遺物

他の土壌も全体的に浅く、ほとんど灰褐色砂質土層一層からなっており、大正・昭和のガラス瓶や煉瓦などを若干含んでいることから、近代の遺構がほとんどと思われる。

また30cm位の大きさの花崗岩を用いた礎石が、等間隔でトレンチの南壁側に2ヵ所、北壁側に2ヵ所検出した。この礎石が南北に建物跡として並ぶのではないかと推測できるが、今のところ断定することはできない。

特徴として、23次の調査区域では、大きな石を3～4個集合させた礎石をもつ建物跡が検出されたが、今回は一石のみの礎石を使った建物跡で石の大きさは23次のものより少し小さく、礎石の形は23次の場合、丸形の自然石のものが多かったがここでは4ヵ所とも、長方形の切石を利用していた。規模は23次に比べるとかなり小さいと思われるため家屋として建てられたのではないかと考えられる。

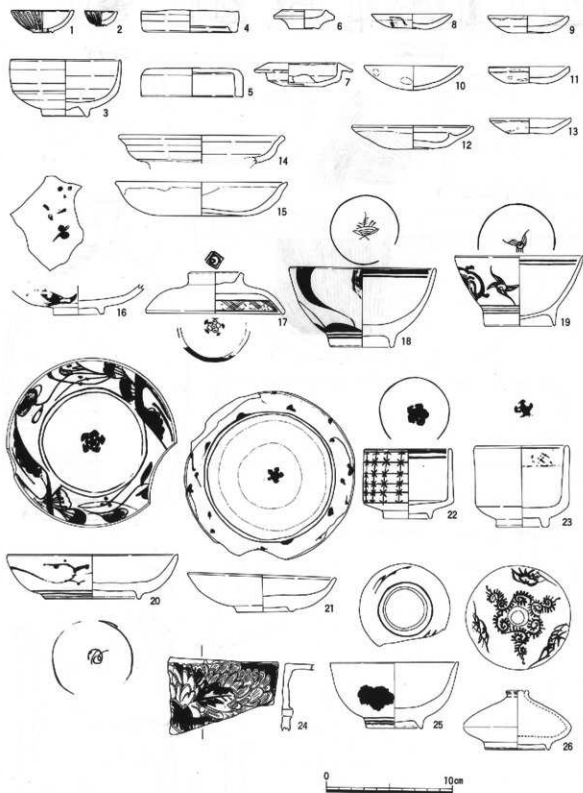
その他に不明遺構が1つ検出された。煉瓦でまわりを囲んでおり、何に使われていたのかは不明である。今回の調査によって、上面で、堀の東側の堀形が確認されたが、西側の堀形は、Bトレンチでは確認することができなかった。



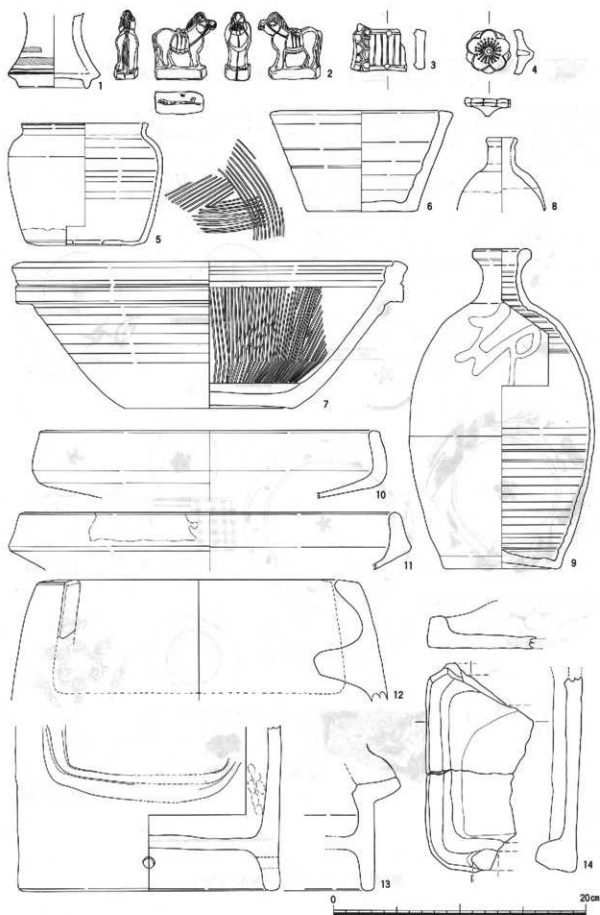
第4図 AトレンチSK02出土遺物(1)



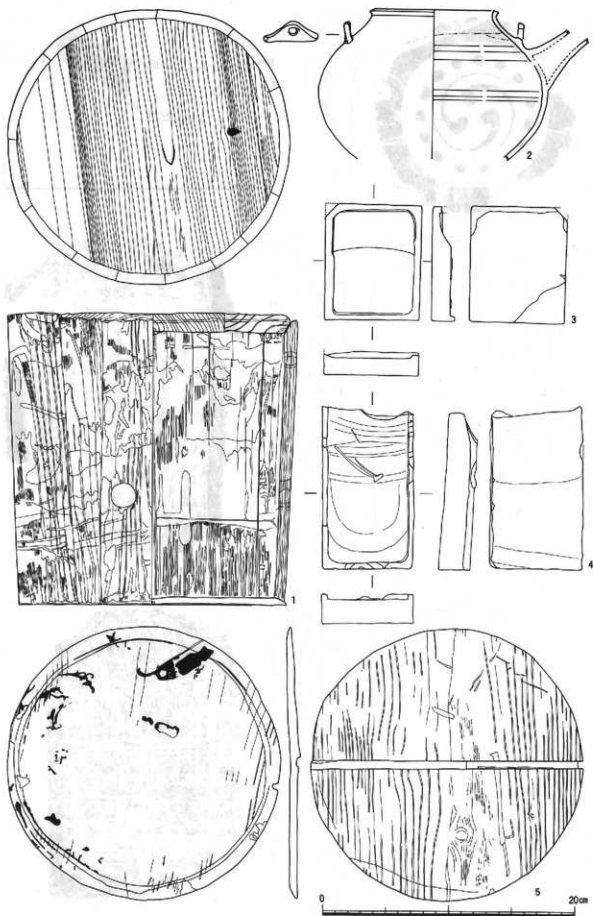
第5図 AトレンチSK02出土遺物(2)



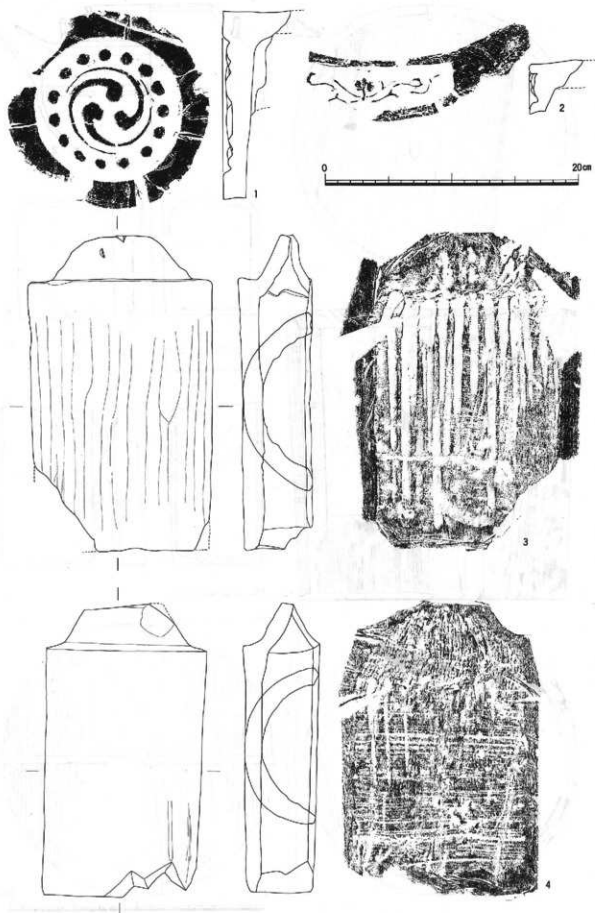
第6圖 AトレンチSF01中層出土遺物(1)



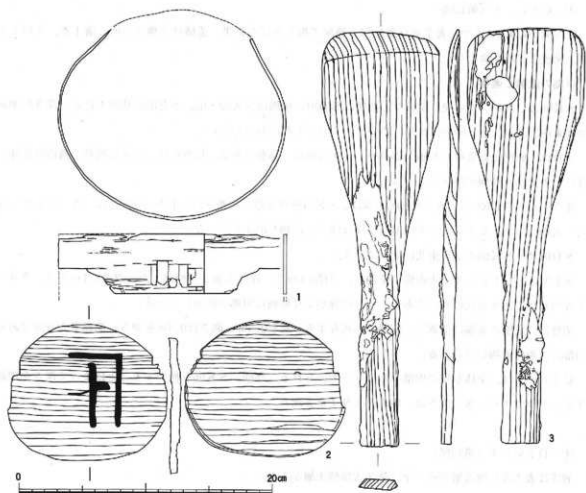
第7図 AトレンチSF01中層出土遺物(2)



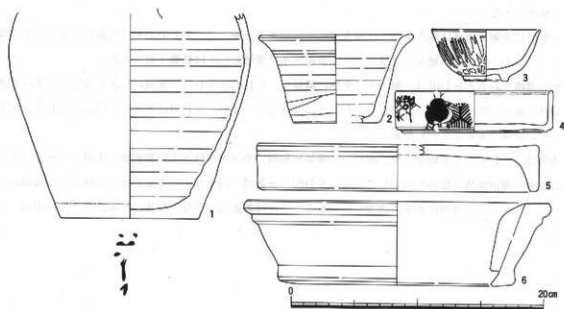
第8図 AトレンチSF01中層出土遺物(3)



第9図 AトレンチSF01中層出土遺物(4)



第10図 AトレンチSF01中層出土遺物(5)



第11図 AトレンチSF01上層出土遺物(6)

(3) Cトレンチ (第12図)

地表面から0.6mまでの表土及び攪乱層を機械で掘り下げた結果、遺構は土溝7カ所、溝1本、井戸1カ所、便壺1カ所を検出した。

Ⅲ期の遺構と遺物

SK06はCトレンチ中央に位置し、西側はSD01に南側はSK02・05、SE01に切断される。深さ3.00m、幅は東西3.50m、北は調査区域外にのびているので全形はわからない。

遺物は、肥前磁器染付の茶碗・筒茶碗、土師質炮烙、柿輪灯明皿、柿軸小皿、丹波焼徳利、備前焼播鉢、瀬戸・美濃焼灰輪碗が出土している。

深さ1mのSK02、0.3mのSK05土溝は、SE01を作る際に切断されており、全形ははっきりとわからない。遺物は出土しなかった。その他の土溝は浅く、遺物も出土していない。

SD01は、SK06の上を南北に走っている。

SE01は、Cトレンチ中央南側に位置し、直径0.6mで、深さ3mまで検出した。厚さ0.1mのコンクリート枠の井戸であり近代のものである。井戸の堀形より柿輪灯明皿が出土している。

便壺は、北壁の東端に位置し、底部のみ残存する。底径0.5m、高さは0.3mを測る。徳島県大谷焼である。内部に白色付着物が見られる。

Cトレンチは、全体が堀の内部であろうと考えられる。今回、SK06を検出することによって深さを確認することができた。堀の深さは、地表面より4mを測る。

(4) Dトレンチ (第12図)

層序は表土及び攪乱層でその下に第2次堆積土層がある。

遺構としては、ビット2カ所、溝3本を検出した。

Ⅱ期の遺構と遺物

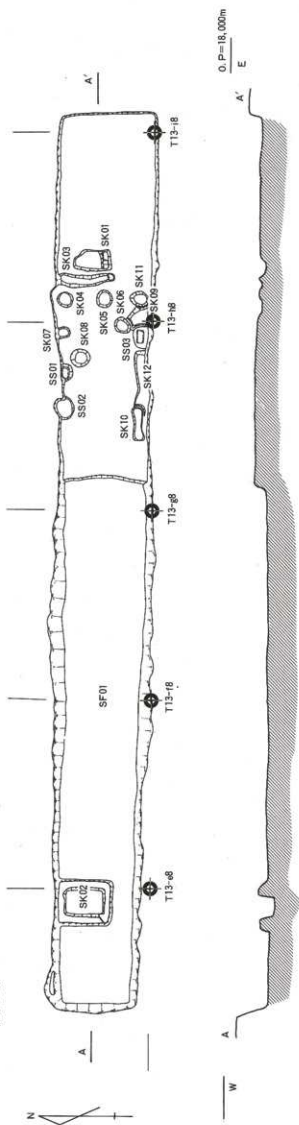
このうちトレンチの西端のところで検出したSF01は、堀跡である。第21次調査の第2トレンチで確認されている南北に延びるSF02の続きである。Dトレンチではこの堀の東側2m分を検出したが、西側の堀形は検出できなかった。

SF01は素堀で堀底は調査区内では地表から3mの深さを測った。SF01の形は底面から急な70度の傾きをもっている。層序は4層から5層に分れ、黄褐色系で礫層もしくは粘質土層である。

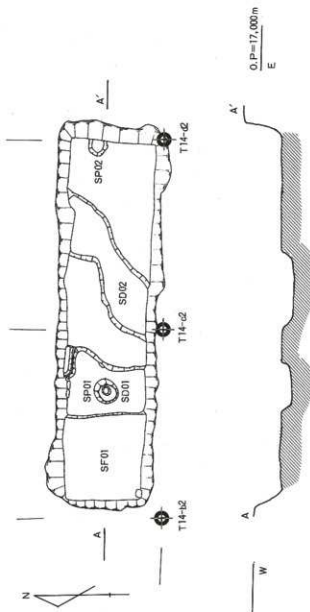
他の遺構をみるとSD01は、堀のすぐ東側に隣接し、SD02はSD01の東側に位置するが、いずれも調査区域外に南北に延びており、全形をつかむことはできない。また、SD01はSF01に切られており、SF01より古い遺構であることがわかる。

遺物は、SD02より東播系の甕、瀬戸・美濃焼灰輪碗、備前焼播鉢、土師質羽釜・小皿が、SF2より土師質羽釜、備前焼甕・播鉢が出土している。SD02、SF01で出土している備前焼の播鉢は、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、外側に数条の沈線がみられる。これは備前焼、間壁氏福年のV期(安土・桃山期)にあたる。

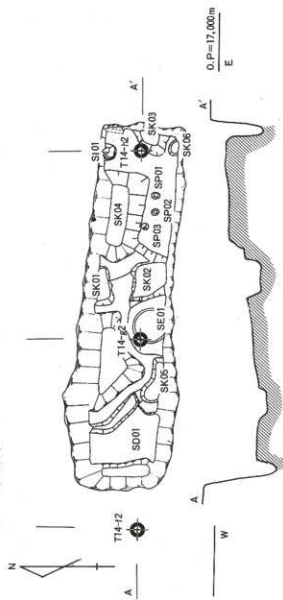
Bトレンチ



Dトレンチ

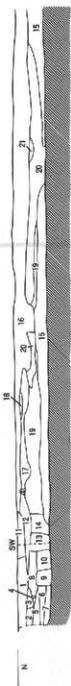


Oトレンチ



第12図 Bトレンチ、Cトレンチ、Dトレンチ遺構全体図

0. P=17,300m
E



0. P=17,300m
E



1. 暗灰色粘質土層 2・5 Y4/2
2. 暗褐色土層 7・5 YR5/6
3. 灰色土層 5 Y4/1
4. 暗灰色土層 10Y R4/1
5. におい黄褐色土層 10Y R6/4
6. 褐色土層 10Y R4/4
7. 黄褐色砂層 2・5 Y5/4
8. 褐色土層 10Y R4/6

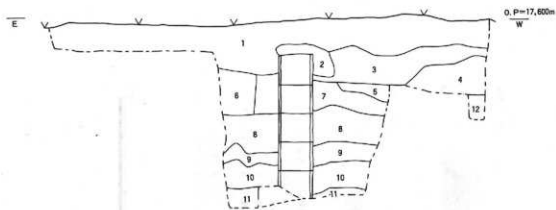
9. 暗灰色土層 10Y R6/1
10. 暗褐色土層 10Y R4/6
11. におい赤褐色土層 5 YR5/4
12. 暗灰色土層 2・5 YR4/1
13. におい褐色砂層 7・5 YR5/3
14. 暗灰色土層 5 YR5/4
15. 暗褐色砂層 2・5 Y7/6
16. 暗褐色土層 7・5 YR4/4

17. 暗灰色土層 7・5 YR4/4
18. 黄色粘土層 2・5 YR6/6
19. 黄褐色土層 10Y R5/8
20. 暗黄褐色土層 10Y R6/6
21. 淡灰色土層 7・5 YR8/3
22. 暗灰色土層 10Y R4/1
23. 灰黄褐色土層 10Y R4/2
24. におい黄色土層 10Y R5/4

25. 黒色灰化物層 2・5 YR2/1
26. 淡灰色土層 5 Y8/4
27. 淡黄色砂質土層 5 Y7/4
28. 黄褐色土層 10Y R5/6
29. におい黄褐色土層 10Y R5/6
30. 黒色土層 10Y R2/1
31. 灰オリーブ色土層 5 Y5/2
32. オリーブ褐色土層 5 Y3/1



第13図 B トレンチ西壁・南壁土層図

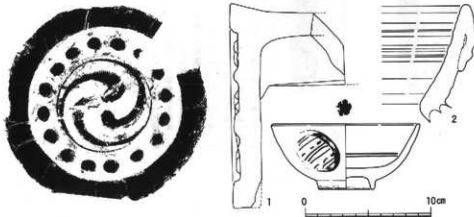


1. 暗褐色土層、黒色土層、7・5 YR3/3、7・5 YR2/1 (礫含む) 表土
2. 黄褐色土層、にぶい褐色粘質土層、7・5 YR8/8、7・5 YR5/4 (礫含む)
3. 明黄褐色砂礫層10Y R6/6 (1~8cmの礫多量を含む)
4. 明黄褐色砂層10Y R7/6
5. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y6/2 (炭化物多量を含む)
6. 褐色砂質土層 7・5 YR4/4 (20cmの礫若干含む)
7. 褐色砂層10Y R4/4 (3cmの礫、炭化物多量を含む)
8. 褐色礫層10Y R4/6 (6~10cmの礫多量含む)
9. 黒褐色粘質土層10Y R2/3 (3cm大の礫多量を含む)
10. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 (5cm大の礫多量を含む)
11. 明黄褐色砂層 2・5 Y6/6 (1cm大の礫多量を含む)
12. 明黄褐色砂層 2・5 Y7/6 (3cm大の礫多量を含む)

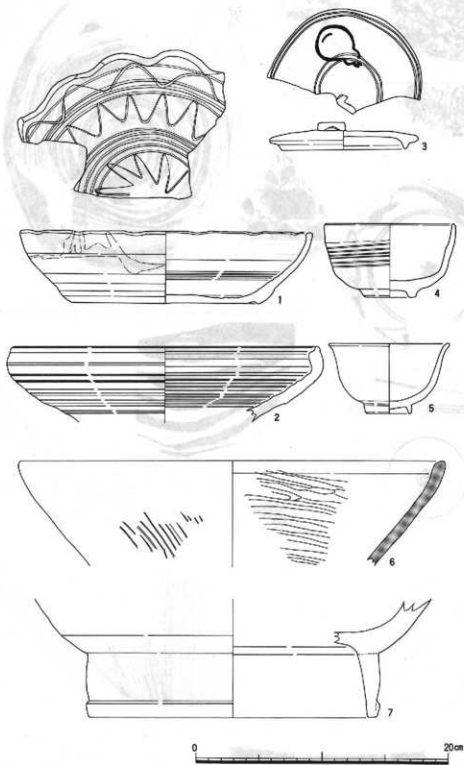
第14図 Cトレンチ南壁土層図



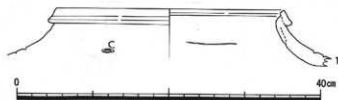
第15図 CトレンチSK03出土遺物



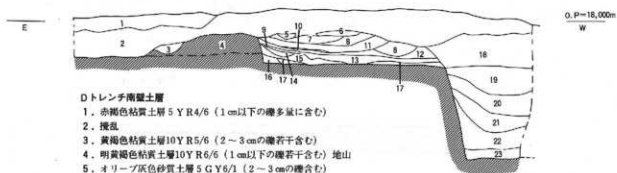
第16図 CトレンチSK04出土遺物



第17図 CトレンチSK06出土遺物(1)



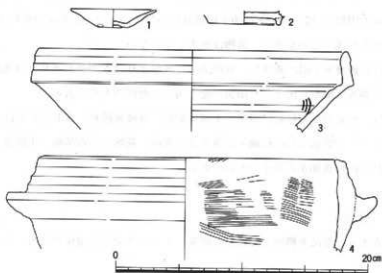
第19図 CトレンチSK06出土遺物(3)



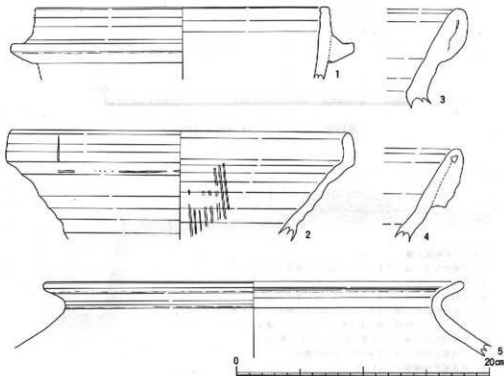
Dトレンチ南壁土層

1. 赤褐色粘質土層 5 Y R 4/6 (1 cm以下の礫多量に含む)
2. 擾乱
3. 黄褐色粘質土層 10 Y R 5/6 (2~3 cmの礫若干含む)
4. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/6 (1 cm以下の礫若干含む) 地山
5. オリーブ灰色砂質土層 5 G Y 6/1 (2~3 cmの礫含む)
6. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/8 (1 cm以下の礫含む)
7. 明黄褐色粘質土層 10 Y R 6/8 (3 cmの礫含む)
8. 明黄褐色砂礫層 2・5 Y 6/8
9. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/6 (1 cm以下の礫若干含む)
10. 黄色粘質土層 2・5 Y 7/8
11. 明黄褐色土層 10 Y R 6/8
12. におい褐色砂質土層 7・5 Y R 5/3
13. 黄褐色砂質土層 10 Y R 5/8
14. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/3
15. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/3
16. 褐色粘質土層 10 Y R 4/6
17. 灰黄褐色粘質土層 10 Y R 4/2 (6~10 cmの礫若干含む)
18. 褐色粘質土層 7・5 Y R 4/4 (10の礫含む)
19. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4 (2 cm以下の礫若干含む)
20. 黄褐色土層 2・5 Y 5/3 (10以下の礫含む)
21. 褐色粘質土層 10 Y R 4/1
22. 暗灰色粘質土層 2・5 Y 5/2 (2~15 cmの礫多量に含む)
23. におい黄色粘質土層 2・5 Y 6/4 (3~6 cmの礫若干含む)

第20図 Dトレンチ南壁土層図



第21図 DトレンチSD02出土遺物



第22図 DトレンチSF01出土遺物

(5) Eトレンチ (第23図)

層序は表土及び攪乱層で、3カ所のみ第2次堆積土層がみられた。

遺構は土壇11カ所、ピット10カ所、溝1本、堀1本、便壺1カ所が検出された。

SF01は従来、内堀とよばれている堀でEトレンチでは南北にのびる堀の西側の形が確認された。この堀は素掘りで、堀底は地表下から32mの深さを測り、底面から70度の急な傾斜である。西堀形から東へ14mまでを検出したが、それ以来は調査区域外となったので東側の形を検出することが出来なかった。この範囲では、堀底からヘドロを検出するには至らなかった。

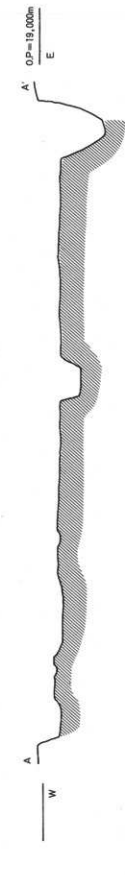
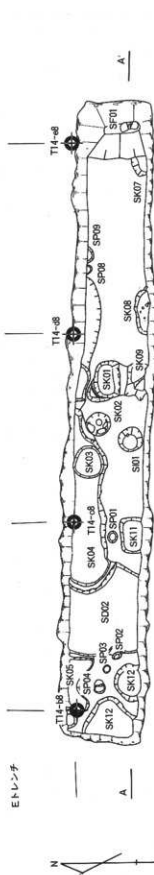
他の遺構についてみると、SF01から西へ8mに位置するSK10が、直径0.70mの円形、9mに位置するSK03が直径1.00mの円形で、残り9カ所は調査区域外にのびているので全形をつかむことはできない。ピットは直径20~50cmで底の浅いものが多く、遺物は出土していない。

ただ1つ検出された便壺SI01に隣接し、直径50cm、底部より高さ30cmを測り、口縁付近は原形をとどめていない。第23次調査区域から出土した陶製の甕と同一で近代のものである。

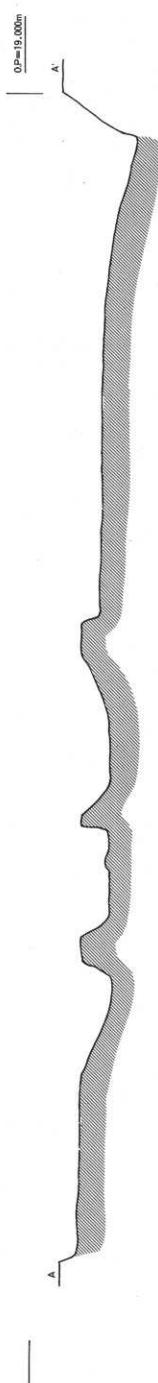
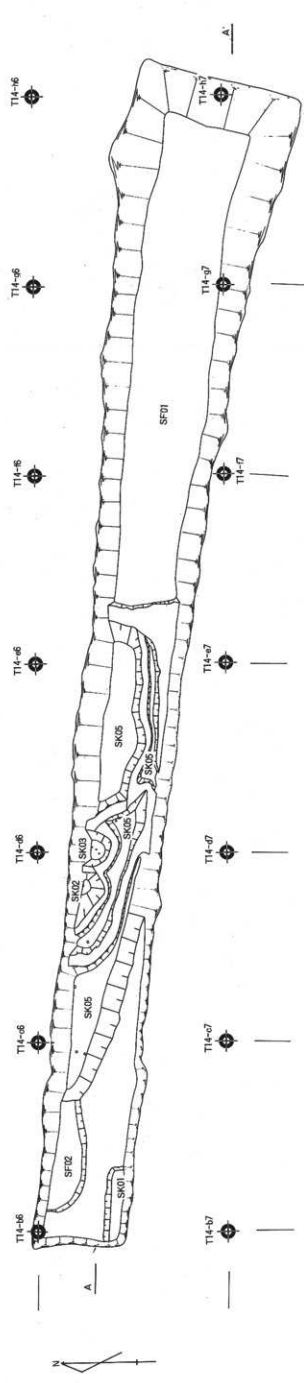
主な遺物としては、SK01から柿釉天明皿、土師質地烙、丹波焼徳利、SF01からは多量の遺物が出土し、その中でも主なものとして肥前磁器染付碗・蛸唐草文の華瓶、萩焼の湯呑茶碗、土師質火舎・火消壺が出土しているが、いずれも江戸後期から幕末のものである。

(6) Fトレンチ (第23図)

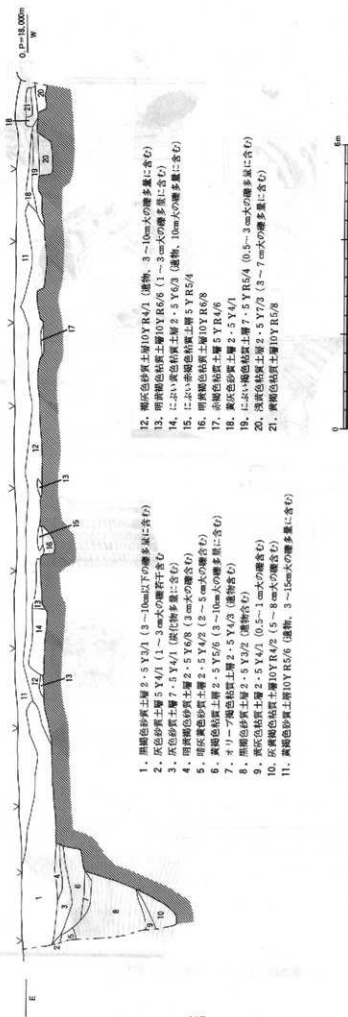
地表下0.50mの表土及び攪乱を機械で掘削した結果、トレンチ全域に遺構が分布しており土壇6カ所、堀跡2本を検出した。



Fトレンチ

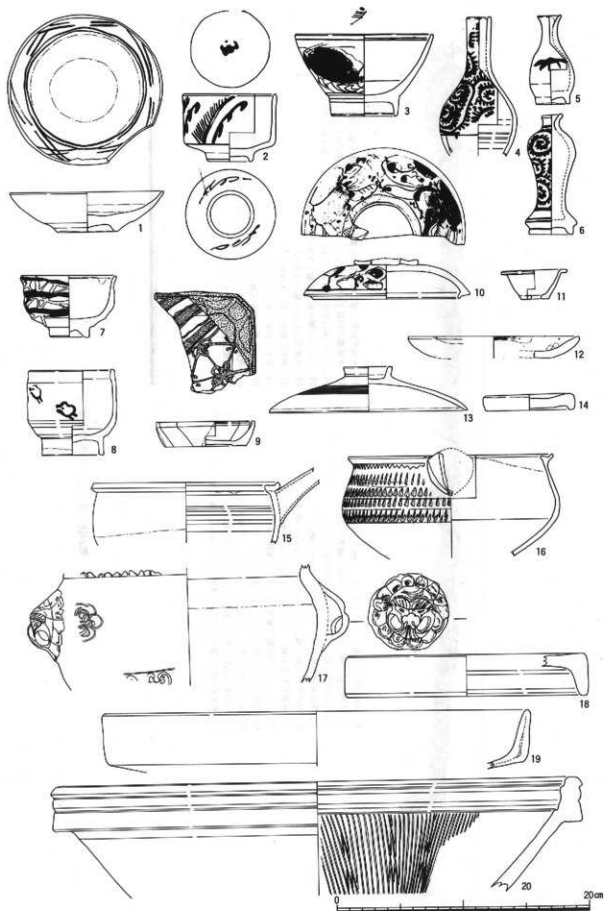


継23図 Eトレンチ・Fトレンチ遺構全体図

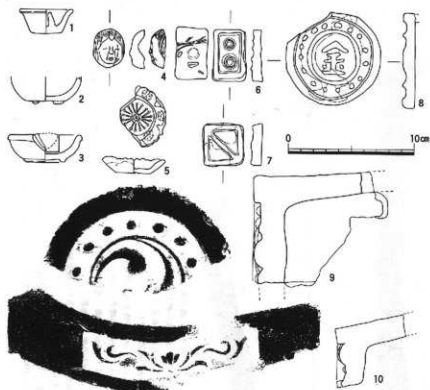


1. 照褐色砂質土層 2.5 Y3/1 (3~10cm以下の礫多量を含む)
2. 灰色砂質土層 5 Y4/1 (1~3cm大の礫若干含む)
3. 灰色砂質土層 7.5 Y4/1 (炭化跡多量を含む)
4. 明黄褐色砂質土層 2.5 Y6/8 (3cm大の礫含む)
5. 明黄褐色砂質土層 2.5 Y4/2 (2~5cm大の礫含む)
6. 黄褐色粘質土層 2.5 Y5/6 (3~10cm大の礫多量を含む)
7. オリープ褐色粘質土層 2.5 Y4/3 (遺物含む)
8. 照褐色砂質土層 2.5 Y3/2 (遺物含む)
9. 赤灰色粘質土層 2.5 Y4/1 (0.5~1cm大の礫含む)
10. 灰黄褐色粘質土層 10Y R4/2 (5~8cm大の礫含む)
11. 黄褐色粘質土層 10Y R5/6 (遺物, 3~15cm大の礫多量を含む)
12. 照褐色粘質土層 10Y R4/1 (遺物, 3~10cm大の礫多量を含む)
13. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/6 (1~3cm大の礫多量を含む)
14. 深い灰色粘質土層 2.5 Y6/3 (遺物, 10cm大の礫多量を含む)
15. 深い赤褐色粘質土層 5 Y R5/4
16. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8
17. 赤褐色粘質土層 5 Y R4/6
18. 黄褐色粘質土層 2.5 Y4/1
19. 深い褐色粘質土層 7.5 Y R5/4 (0.5~3cm大の礫多量を含む)
20. 淡黄色粘質土層 2.5 Y7/3 (3~7cm大の礫多量を含む)
21. 黄褐色粘質土層 10Y R5/8

第24図 Eトレンチ南壁土層図



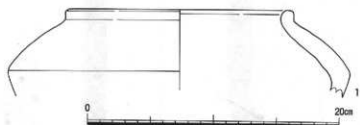
第25図 EトレンチSF01出土遺物(1)



第26図 EトレンチSF01出土遺物(2)



第27図 EトレンチSK01遺構図



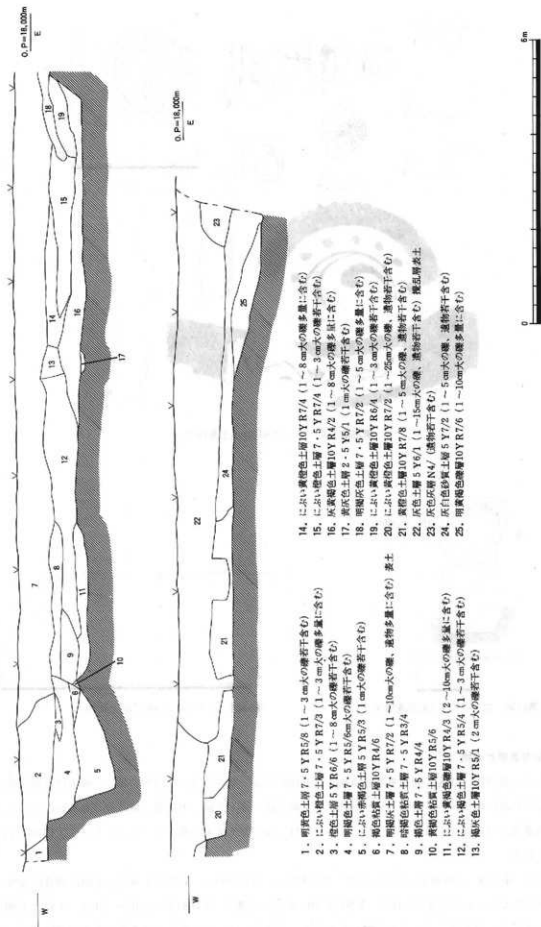
第28図 EトレンチSK01出土遺物

II期の遺構と遺物

S K03 (第31図) はS K02の東側に隣接し、直径0.80m、深さ0.50mの円形を呈し、埋土は黄褐色粘質土層が逆台形状に堆積する。遺物としては銭貨、土師質鉢・甕・土鍋、中国製白磁端反り皿等が出土している。

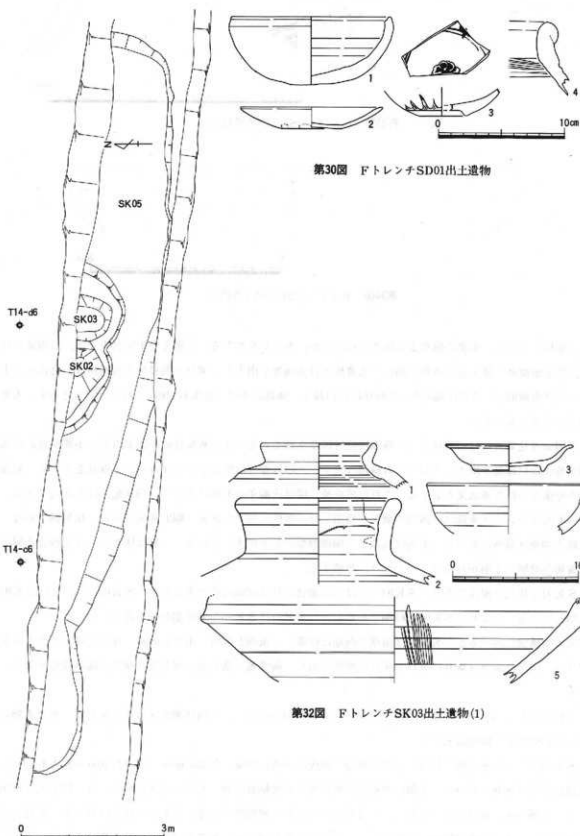
土師質甕は口縁部が玉縁状を呈し胎土は礫で太目の斜めのタタキが施されていることより、16世紀半ばと考えられる。

S K05 (第31図) は西端から19mに位置し東西125cm、南北2.00mの不定形土壌で、北側は調査区域外に延び、かなり大きいものと考えられる。深さは0.70-0.75mを測り、平均O.P.=1.67mである。土層は上層0.50mが、黄褐色砂質土層で1-5cmの礫を若干含み、下層20cmは、明黄褐色粘質土層に若干の遺物を含みU字



1. 明褐色土層 7・5 Y R 5/8 (1~3 cm 水の浸透層を含む)
2. 赤褐色土層 7・5 Y R 7/3 (1~3 cm 水の浸透層を含む)
3. 褐色土層 5 Y R 6/6 (1~8 cm 水の浸透層を含む)
4. 明褐色土層 7・5 Y R 5/5 (浸透層を含む)
5. 赤褐色土層 5 Y R 5/3 (1 cm 水の浸透層を含む)
6. 褐色土層 10 Y R 4/6
7. 明褐色土層 7・5 Y R 7/2 (1~10 cm 水の浸透層を含む)
8. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R 3/4
9. 褐色土層 7・5 Y R 4/4
10. 暗褐色粘質土層 10 Y R 5/6
11. 赤褐色土層 10 Y R 4/3 (2~10 cm 水の浸透層を含む)
12. 赤褐色土層 7・5 Y R 5/4 (1~3 cm 水の浸透層を含む)
13. 褐色土層 10 Y R 5/1 (2 cm 水の浸透層を含む)
14. 赤褐色土層 10 Y R 7/4 (1~8 cm 水の浸透層を含む)
15. 赤褐色土層 7・5 Y R 7/4 (1~3 cm 水の浸透層を含む)
16. 暗褐色土層 10 Y R 4/2 (1~8 cm 水の浸透層を含む)
17. 暗褐色土層 2・5 Y 5/4 (1 cm 水の浸透層を含む)
18. 暗褐色土層 7・5 Y R 7/2 (1~5 cm 水の浸透層を含む)
19. 赤褐色土層 10 Y R 6/4 (1~3 cm 水の浸透層を含む)
20. 赤褐色土層 10 Y R 7/2 (1~25 cm 水の浸透層を含む)
21. 暗褐色土層 10 Y R 7/8 (1~5 cm 水の浸透層を含む)
22. 赤褐色土層 5 Y 6/1 (1~15 cm 水の浸透層を含む)
23. 暗褐色土層 N4/ (浸透層を含む)
24. 灰白色砂質土層 5 Y 7/2 (1~5 cm 水の浸透層を含む)
25. 明褐色土層 10 Y R 7/6 (1~10 cm 水の浸透層を含む)

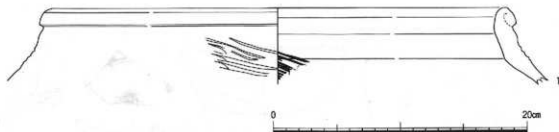
新29図 F トレンチ北壁土層図



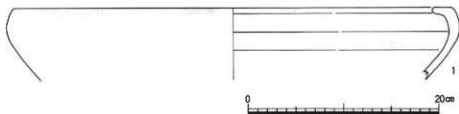
第30図 FトレンチSD01出土遺物

第32図 FトレンチSK03出土遺物(1)

第31図 FトレンチSK03・SK05遺構図



第33図 FトレンチSK03出土遺物(2)



第34図 FトレンチSK03出土遺物(3)

形に堆積している。南側の堀形より埋められたのか、南上がりである。下層より中国製青花皿、白磁端反り皿、備前焼播鉢・鉢・壺・水指、瀬戸・美濃焼天目茶碗等が出土し、瀬戸・美濃焼天目茶碗は、高台から上方へほぼ直線的で、高台は輪高台、化粧掛けは口縁から体部にかけて約3/4に掛けられていることから、大窯編年のVI期にあたる。

中国製青花皿は口縁部端反りで、外面は牡丹唐草文様である。また基底部の中国製青花の皿が見られる。備前焼壺は口縁部が出土しており、口縁部は直立し、口縁部は外に少しつまみ出た玉縁状を呈する。肩部はやや張りを持ち波状文を有する。これは備前焼、間壁氏編年のV期にあたり、16世紀半ばと比定できる。

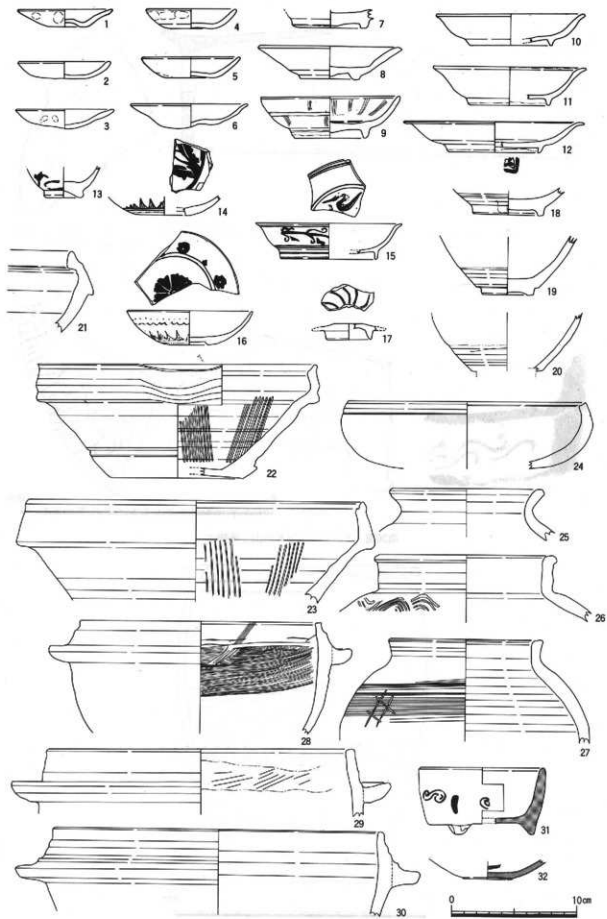
S F01はトレンチ東端に、西側の堀形を検出した。規模は長さ2.00m、幅3.50mであり、反対側の形は、東側の調査区域外に延びる。遺物は瓦類と、陶磁器類が若干出土している。土層は灰オリープ色砂質土層と明黄褐色礫層の2層からなり、西上がりに堆積する。

S K01は現代の擾乱であり、S K03・05は出土遺物よりはほぼ同時代と考えられ、S K02についてはS K03を切っていることより、S K03の時期より新しい。S F01はS K05と同時期かやや新しい。

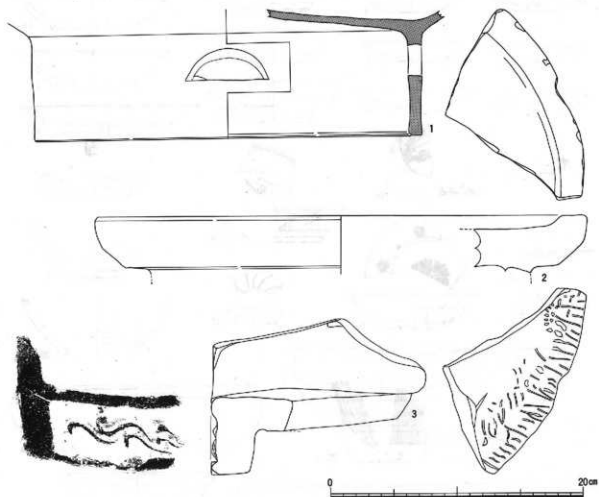
次に遺構別に述べるが、S K01は南壁の西端に位置し、東西2.00m、南北1.00m、深さ1.00mの長方形を呈する。南側は調査区域外に延びる現代の擾乱であり、陶器蓋・落し蓋、屋瓦等の現代の陶磁器類を含んでいる。

S K02はトレンチ中央北端に隣接し、直径1.50mの円形を呈し、北側は調査区域外に延びる。出土遺物がないため確定した時期は言えない。

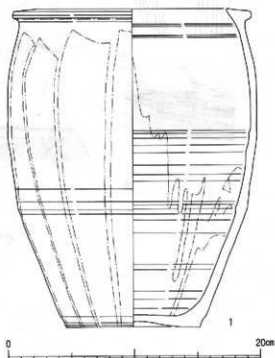
S F02はトレンチ西側に位置し、検出部分の規模は東西1.20m、南北0.60m、深さ1.40mの長方形を呈し、北側は調査区域外に延びる。土層は明褐色粘質土層と褐色粘質土層の大きく2層に分けられ、U字形に堆積する。2層の色、質は類似しており、一度期に埋められた可能性がある。S F02の位置はD・F、第21次調査第2トレンチの西側で検出。規模はトレンチ内より総長径31m、最深部はもう少し西側に考えられる。



第35図 Fトレンチ S K05出土遺物(1)



第36図 FトレンチSK05出土遺物(2)



第37図 FトレンチSF01出土遺物

3. 小 結

有岡城跡の堀跡は、A・B・C・D・E・Fトレンチで堀形の一部分が検出されている。伊丹市教育委員会による第21次調査で設定された第1～4トレンチからも堀跡が検出されており、その成果も考慮しながら次に内堀、中堀の位置を想定してみたい（付図6）。

Aトレンチでは、幅約1.45mの堀跡の立ち上がり部が東西ともに検出された。Bトレンチでは、Aトレンチ東側立ち上がり部に連続して、中程から検出された。Dトレンチでは第21次調査第2トレンチ西側、SF2の連続部分が検出された。Fトレンチでは、16世紀の土壌を切って、Dトレンチ、第2トレンチから中堀が連続している。E・Fトレンチでは、第1トレンチSF01、第2トレンチSF01の連続部分が検出された。また、東西に走る道路の下水道工事の際、交差点北東角より約75mの箇所より内堀の西側堀形を確認している。

これらの点から内堀の位置を想定してみると、東西道路では北側に、幅約15mであり南側では約12mであることから、途中、東西道よりやや南側で鉤形に屈曲していると考えられる。

さらにDトレンチ、第2トレンチ、Fトレンチ西側より検出されたような中堀は、昭和60年度第17次調査区域でも確認されており、内堀とあわせて、惣構の中で縦横に張りめぐらされていたものと想定される。

また、今回Aトレンチでは内堀の底部を検出し、その規模が確認できた点は大きな成果である。幅1.45m、深さ47cmを測り、第21次調査時に行なわれたボーリング調査の結果とほぼ一致している。内堀の埋没時期は、一度幕末にある程度埋まり、その後、明治～大正以降に完全に埋まっていることがわかった。

今後、史跡指定の範囲を明確にするには、東西道路の下とCトレンチ、Dトレンチの間部分の徹底的な調査が必要であろう。

第4節 第30次調査

1. 調査の方法

第30次調査、再開発区域の南半部、南北に通じる道路と本泉寺の東側塙との間で、未撤去家屋が有る事から、発掘可能な面積を対象とした。

検出した遺構は、堀1条、井戸3箇所、柱穴87箇所、土壇84箇所、溝13本、便壺9箇所、礎石2箇所を数え、狭い面積に比べると非常に濃密な分布状態であった。これらの遺構は、中世から近世・近代に及んでいるが、各時代にそれぞれ盛土による整地が実施されている。

2. 基本層序

南壁を見ると、GL-30cmで第1層の黄色系の粘質土層、GL-50cmで第2層の地山層の2面の遺構面が確認できる(第1図)。

第2層の地山面からは、SF01、SD01が掘り込まれている。

3. 調査の成果

I・II期の遺構と遺物

有岡城期と考えられる遺構は、SF01、SD01、SD12・13・14、及びこれらの堀・溝に囲まれた中央部分の柱穴群である。

SF01

SF01は、幅5.00m、深さ2.50mを測る。下場の幅が4.10mを測り、東壁は86度、西壁は72度という急傾斜で立上がり、典型的な箱堀の形態を呈する。泥質土が最下層に10cm程度堆積するのみで、空堀であったことが分かる。この堀の底には、1.50mの間隔で2箇所の柱穴を検出した。南側の柱穴には、一辺20cmの角柱で先端を尖らせている(第8図、第9図6)。この2つの柱穴は、その位置から見て橋脚の痕跡である可能性が大きい。SF01は、南北の方向に延び、さらに本泉寺の境内を囲んでいると想定される。

土層の堆積状況について見ると(第6図)、下層の礫層から順序よく堆積しており、土層を崩して埋めたような層位は見られない。水堀であったような痕跡は見られない。

出土遺物(第9図)には、SF01の最下層の礫層から青磁蓮弁文碗の底部(1~3)、瓦質土器風が(5)、巴文軒丸瓦(4)があげられる。

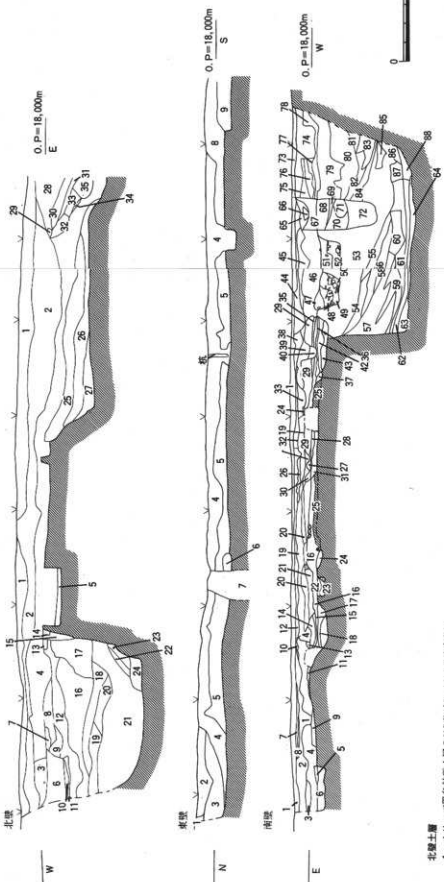
SD01

SD01は、幅1.6m、深さ1.0mを測る。下場の幅は、0.60mを測り、北壁は約70度で、南壁は約60度で立上がる。泥質土は最下層に約0.20m程度堆積していることから(第10図)、常時水の流れていた可能性が高い。東から西に向かって流れ、SF01の堀に流れ込んでいたと考えられる。

主な出土遺物(第11図)には、土師質土器皿(2~6)、青花皿(1)、瓦質土器鉢(7)があげられる。土師質土器の法量には大小2タイプある。先ず、大は口径12.8cm、器高2.2cm、小は口径7.6~8.0cm、器高1.4~2.2cmで有る。いずれも、体部外面に指頭圧痕があり、(2~4)は、へそ皿である。瓦質土器鉢は、口径33.2cm、残存器高12.0cmを測る。

SD12・13・14

SD12・13・14は、幅0.60mから1.00mで、深さ0.20m程度の浅い溝である(第3図)。前後関係は、遺構



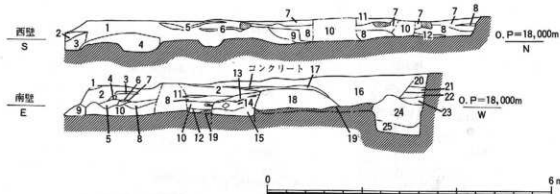
- 北線土層**
1. オリーブ褐色粘質土層 5 Y3/2 (1~6cmの礫を含む)
 2. 砂土
 3. 褐色粘質土層 10 Y R4/6 (1~2cmの礫を含む)
 4. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (1~5cmの礫多量に含む)
 5. 明褐色粘質土層 7・5 Y R6/6 (3~4cmの礫多量に含む)
 6. 明褐色粘質土層 10 Y R6/8 (0.5~2cmの礫多量に含む)
 7. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/4 (1~6cmの礫を含む)
 8. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/4 (12cmの礫を含む)
 9. 暗褐色粘質土層 5 Y R5/3 (0.5~2cmの礫多量に含む)
 10. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/8 (0.5~3cmの礫多量に含む)
 11. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/4 (5cmの礫を含む)
 12. 明褐色粘質土層 10 Y R6/6 (0.5~3cmの礫を含む)
 13. 明褐色粘質土層 2・5 Y R6/2 (礫化物質多量、礫、礫を含む)
 14. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/6 (1cmの礫を含む)
 15. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/3 (1~3cmの礫を含む)
 16. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/6 (0.5~3cmの礫を含む)
 17. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/4 (0.5~3cmの礫を含む)
 18. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (0.5~10cmの礫多量に含む)
 19. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (0.5~3cmの礫多量に含む)
 20. 暗褐色粘質土層 2・5 Y R6/6 (0.5~1cmの礫を含む)
 21. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/6 (灰白色、5 Y R2, 暗褐色粘質土層を含む)
 22. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R6/8 (0.5~3cmの礫を含む)
 23. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/6 (0.5~2cmの礫を含む)
 24. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1.5~3cmの礫を含む)
 25. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1.5~3cmの礫を含む)
 26. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/6 (0.5~2cmの礫を含む)
 27. 暗褐色粘質土層 2・5 Y R6/2 (2~4cmの礫を含む)
 28. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R6/8 (礫を含む)
 29. 暗褐色粘質土層 5 Y R6/8 (礫を含む)
 30. オリーブ褐色粘質土層 5 Y R6/8 (礫を含む)
 31. オリーブ褐色粘質土層 5 Y R6/8 (礫化物質多量に含む)
 32. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (2~5cmの礫多量に含む)
 33. 暗褐色粘質土層 5 Y3/2 (2cmの礫を含む)
 34. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R6/8 (3cmの礫を含む)
 35. 暗褐色粘質土層 2・5 Y3/2 (2cmの礫を含む)

- 東線土層**
1. オリーブ褐色粘質土層 5 Y3/2 (1~6cmの礫を含む)
 2. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (1~6cmの礫、礫物を含む)
 3. オリーブ褐色粘質土層 7・5 Y R5/4 (2~5cmの礫を含む)
 4. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/3 (1~6cmの礫を含む)
 5. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R4/3 (1~6cmの礫を含む)
 6. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/4 (1cmの礫を含む)
 7. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (1cmの礫多量を含む)
 8. オリーブ褐色粘質土層 10 Y R3/4 (礫化物質多量、礫、礫を含む)
 9. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1~3cmの礫を含む)
- 南線土層**
1. 明褐色粘質土層 7・5 Y R7/1
 2. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (礫化物質、礫物を含む)
 3. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (礫化物質、礫物を含む)
 4. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (0.5~2cmの礫を含む)
 5. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (0.5~2cmの礫を含む)
 6. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (礫化物質を含む)
 7. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/8 (0.5cmの礫を含む)
 8. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (0.5cmの礫を含む)
 9. 暗褐色粘質土層 10 Y R7/1 (1~3cmの礫多量に含む)
 10. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (礫多量に含む)
 11. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (0.5~2cmの礫を含む)
 12. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (0.5~2cmの礫を含む)
 13. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (0.5~2cmの礫を含む)
 14. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (1cmの礫物を含む)
 15. 暗褐色粘質土層 2・5 Y R6/6 (1~5cmの礫を含む)
 16. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y R6/6 (1~5cmの礫を含む)
 17. 明褐色粘質土層 10 Y R6/8 (3cmの礫物を含む)
 18. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (3cmの礫物を含む)
 19. 暗褐色粘質土層 2・5 Y3/2

20. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/4 (礫化物質多量、4cmの礫物を含む)
21. 明褐色粘質土層 2・5 Y R6/8 (3cmの礫物を含む)
22. 明褐色粘質土層 10 Y R6/8 (3cmの礫物を含む)
23. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y R4/4
24. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/6 (1cmの礫物を含む)
25. 明褐色粘質土層 10 Y R6/8 (礫山)
26. 明褐色粘質土層 2・5 Y R6/6
27. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/4 (礫化物質、0.5~3cmの礫を含む)
28. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/4 (礫化物質を含む)
29. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (0.5~3cmの礫を含む)
30. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8
31. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/4 (礫化物質を含む)
32. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (0.5cm以下の礫物を含む)
33. 暗褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (礫化物質、1cmの礫物を含む)
34. 暗褐色粘質土層 2・5 Y R8
35. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (2cm以下の礫物を含む)
36. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (0.5cm以下の礫物を含む)
37. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (0.5cm以下の礫物を含む)
38. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (0.5cm以下の礫物を含む)
39. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (2cm以下の礫物を含む)
40. オリーブ褐色粘質土層 10 Y R4/3 (礫物、1cm以下の礫物を含む)
41. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (0.5cm以下の礫物を含む)
42. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6 (0.5cm以下の礫物を含む)
43. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/6 (3~5cmの礫物を含む)
44. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (3cm以下の礫物多量、礫物、礫物を含む)
45. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (礫化物質、礫物、2cmの礫物を含む)
46. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (1cm以下の礫物多量を含む)
47. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (1cm以下の礫物多量を含む)
48. 暗褐色粘質土層 10 Y R3/4 (礫物、10cmの礫物を含む)
49. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/6
50. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/1
51. 暗褐色粘質土層 5 Y4/3 (礫物、3cm以下の礫物を含む)
52. オリーブ褐色粘質土層 5 Y3/2 (礫物多量、10cmの礫物を含む)

53. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/8
54. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R5/4
55. 明褐色粘質土層 10 Y R6/6 (5~8cmの礫物を含む)
56. 明褐色粘質土層 10 Y R7/6 (0.5~2cmの礫物を含む)
57. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (0.5~2cmの礫物を含む)
58. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/3
59. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/6
60. 灰土層 7・5 Y R6/8
61. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/8
62. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/3 (礫土を含む)
63. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8
64. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8
65. 暗褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (礫化物質、3cm以下の礫物を含む)
66. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1cm以下の礫物を含む)
67. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1cm以下の礫物を含む)
68. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (礫化物質、1cm以下の礫物を含む)
69. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/6 (0.5cm以下の礫物を含む)
70. 明褐色粘質土層 10 Y R5/6 (0.5cm以下の礫物を含む)
71. 暗褐色粘質土層 10 Y R4/3
72. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/8
73. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (礫土)
74. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R6/8
75. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/2 (礫物多量に含む)
76. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1~2cmの礫物多量に含む)
77. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8 (1~2cmの礫物多量に含む)
78. 暗褐色粘質土層 2・5 Y5/3 (0.5cmの礫物多量に含む)
79. 暗褐色粘質土層 2・5 Y5/6
80. 暗褐色粘質土層 7・5 Y R6/8
81. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/8
82. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8
83. 暗褐色粘質土層 10 Y R6/8
84. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/6
85. 暗褐色粘質土層 2・5 Y4/6
86. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
87. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4
88. 暗褐色粘質土層 10 Y R5/6

第1図 第30次調査北線・東線・南線土層



西壁土層

1. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (4~8cmの礫、遺物含む)
2. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y6/8 (2~4cmの礫含む)
3. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/6 (1.5~4cmの礫含む)
4. 明黄褐色砂質土層 10Y R6/8 (1cmの礫含む)
5. 黄褐色砂質土層 10Y R7/8 (2~3cmの礫含む)
6. 淡黄色砂質土層 5 Y8/3

7. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (0.5~1cmの礫含む)
8. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R6/4 (2~5cmの礫含む)
9. 明褐色粘質土層 7・5 Y R5/8 (4~10cmの礫含む)
10. 塵灰
11. 黄褐色砂質土層 10Y R8/6
12. 黄褐色粘質土層 7・5 Y R7/8 (2~4cmの礫含む)

南壁土層

1. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/4 (0.5~1cmの礫含む)
2. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R6/4 (2~5cmの礫含む)
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (1cm以下の礫含む)
4. 暗オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y3/3 (3cmの礫多量に含む)
5. 暗オリーブ色粘質土層 5 Y4/3 (2cmの礫、炭化物含む)
6. 明赤褐色粘質土層 5 Y R5/6
7. 暗褐色粘質土層 10Y R3/4 (1cmの礫、炭化物含む)
8. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 (1~3cmの礫、炭化物含む)
9. 灰オリーブ色粘質土層 5 Y5/3 (3cmの礫含む)
10. 明灰黄色砂質土層 2・5 Y4/3 (礫、遺物多量、炭化物含む)
11. 灰黄色 10Y4/1 石灰の塊、炭化物含む)
12. 暗オリーブ色砂質土層 5 Y4/3 (2cm以下の礫含む)
13. オリーブ色砂質土層 5 Y R5/6 (5cm以下の礫多量に含む)

14. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 (礫、遺物、炭化物含む)
15. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y R4/4 (1~5cmの礫、炭化物含む)
16. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/3 (3cm以下の礫、遺物含む)
17. 黄褐色粘質土層 2・5 Y5/4 (貝殻含む)
18. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y4/4 (1~5cmの礫、遺物含む)
19. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 (地山)
20. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y4/4 (3cm以下の礫含む)
21. にぶい黄褐色粘質土層 10Y R5/3 (1cm以下の礫、炭化物含む)
22. 褐色粘質土層 10Y R4/6 (3cmの礫若干含む)
23. 明黄褐色粘質土層 10Y R6/8 (1~5cmの礫含む)
24. 暗褐色粘質土層 10Y R3/4 (5cmの礫含む)
25. 暗褐色粘質土層 10Y R3/3 (3~6cmの礫、遺物含む)

第2図 西壁・南壁土層図

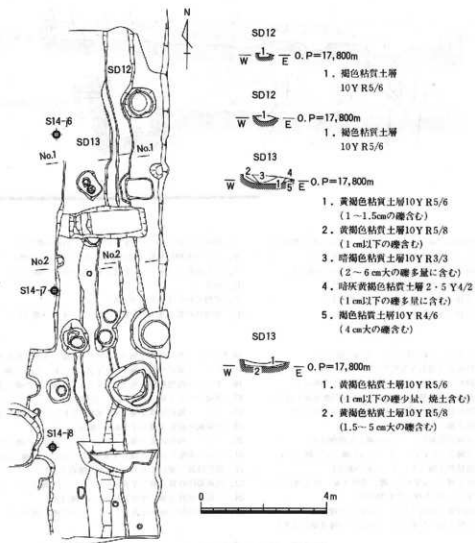
の切り合いから、SD13が最も古く、SD12・14がその後が続くことが判明した。北端と南端の比高差は、約45cm有り、南から北に向かって流れていたことが分かる。

出土遺物は、南端から多量の土師質土器が出土しているが、ここでは、SD13のものを取り上げる(第4図)。中国製白磁碗(1)、瓦器碗(2)、土師質土器皿(3・4)、東播系須恵質土器鉢(5)、瀬戸美濃焼天目茶碗(6)、土師質土器羽釜(7)、備前焼甕(第5図1・2)が出土している。中国製白磁碗は、横田・森田分類IV類に比定される。瓦器碗は、口径10.8cm、器高3.1cmを測る。内面に粗雑なへう磨き調整を施し、外面に横ナデ調整で段をつけている。和泉産、14世紀代か。土師質土器皿は、(3)は口径7.2cm、器高2.0cmを測り、(4)は口径14.8cm、器高2.5cmを測る。いずれも、外面に指頭圧痕がある。須恵質土器鉢は、東播系であり、時期不明である。瀬戸美濃焼天目茶碗は、大窯I期のものである。土師質土器羽釜は、口径22.6cm、残存器高5.2cmを測る。備前焼甕は、口縁帯があまり肥厚しない間壁幅年III期のものである。

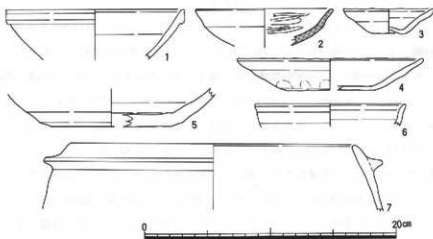
以上のように、SD13出土遺物は、大きく見て14世紀代と16世紀前半から中葉に分離される。

柱穴群

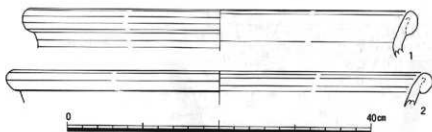
発掘区中央部のビット群は、直径20~40cm、深さが20cm前後のものが多く、いずれも獨立柱建物の柱穴である可能性が高いが、どういう形でたてられていたかは不明確である。



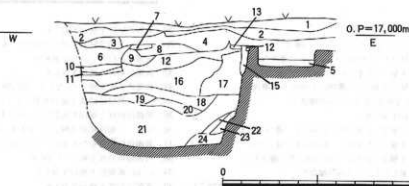
第3図 SD12・SD13遺構図



第4図 SD13出土遺物(1)



第5図 SD13出土遺物(2)



- | | |
|---|--|
| 1. オリーブ黒色粘質土層 5 Y3/2 (1~6 cmの礫含む) | 13. 灰黄色粘質土層 2・5 Y6/2 (炭化物多量に含む) |
| 2. 撈丸 | 14. 褐色土層 10 Y R4/6 (1 cmの礫若干含む) |
| 3. 褐色粘質土層 10 Y R4/6 (1~2 cm大の礫含む) | 15. 褐色粘質土層 7・5 Y R4/3 (1~3 cmの礫若干含む) |
| 4. オリーブ褐色土層 2・5 Y4/4 (1~5 cm大の礫多量に含む) | 16. 褐色砂質土層 7・5 Y R4/4 (0.5~3 cmの礫多量に含む) |
| 5. 明褐色砂質土層 7・5 Y R5/6 (3~4 cmの礫多量に含む) | 17. におい褐色砂質土層 7・5 Y R5/4 (0.5~2 cmの礫多量に含む) |
| 6. 明黄褐色砂質土層 10 Y R6/8 (0.5~2 cmの礫多量に含む) | 18. におい黄褐色砂礫層 10 Y R6/3 (0.5~10 cmの礫多量に含む) |
| 7. 暗灰黄色土層 2・5 Y5/2 (2 cmの礫多量に含む) | 19. 明黄褐色砂質土層 10 Y R6/8 (0.5~3 cmの礫含む) |
| 8. 明黄褐色土層 10 Y R5/6 (0.5~3 cmの礫多量に含む) | 20. 黄褐色砂質土層 2・5 Y5/6 (0.5~1 cmの礫若干含む) |
| 9. におい赤褐色土層 5 Y R5/3 (0.5~2 cmの礫多量に含む) | 21. 褐色礫層 (灰白色 7・5 Y8/2, 暗青灰色 5 B4/3混ざる) |
| 10. 黄褐色砂質土層 10 Y R7/8 (0.5~3 cmの礫含む) | 22. 明黄褐色粘質土層 2・5 Y6/6 (0.5~3 cmの礫含む) |
| 11. におい褐色土層 7・5 Y R5/4 (5 cmの礫若干含む) | 23. 明褐色土層 7・5 Y R5/8 (0.5~3 cmの礫若干含む) |
| 12. 明黄褐色砂質土層 10 Y R6/6 (0.5~3 cmの礫含む) | 24. 黄褐色粘質土層 10 Y R5/6 (0.5~2 cmの礫若干, 遺物含む) |

第6図 SF01北陸土層図

出土遺物としては、SP87からの中国製青磁蓮弁文碗が唯一のものである。

Ⅳ期の遺構と遺物

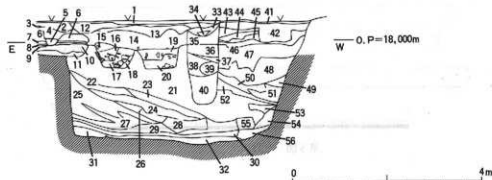
江戸時代と考えられる遺構は、土壌SK02・21・27・28・78・79、SD15である。

SK02

SK02は、0.80m×1.10mの長方形の土壌に幅0.20cm、長さ1.0mの溝が流れ込んでいる。中からSI05・SI06が検出された。(第15図)

出土遺物には、土師質土器鍋(第16図1)、土師質土器風炉(第16図2・3)、肥前磁器広底碗(第16図1)、同・皿(第16図6)、同・蓋(第16図5)、瀬戸美濃焼鉢(第16図12)、伊賀信来焼おとし蓋(第16図4)、同・土瓶(第16図8・10・11・13)、同・徳利(第16図7)、同・鍋(第16図14)、があげられる。

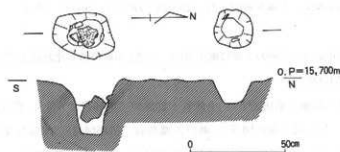
土師質土器鍋は、口径20.2cm、残存器高5.6cmを測る。胴部外面に叩き調整が見られ16世紀代に比定される。土師質土器風炉はいずれも、脚部外面に巴文の遺かしが見られ、外面に赤彩を施す。18世紀末から19世紀前半の年代が付与される。



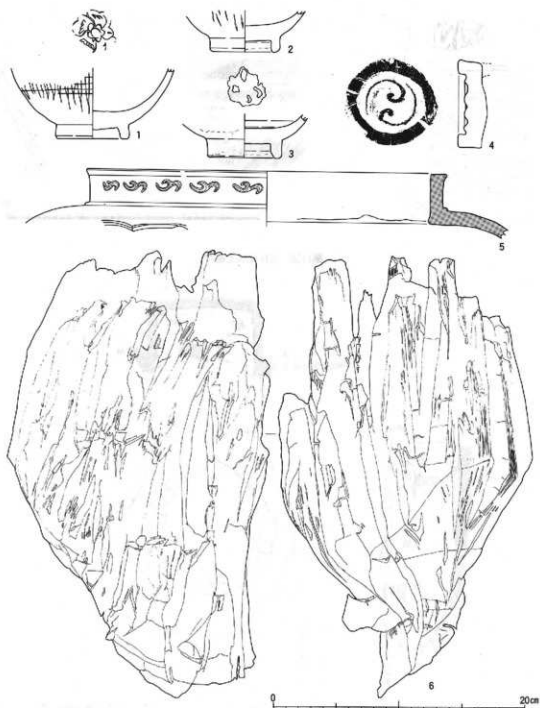
南壁土層

1. 明緑灰色砂質層 7・5 G Y 8/1 表土
2. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y 5/2 (3~5 cmの礫含む)
3. におい黄色砂質土層 2・5 Y 6/4 (0.5cm以下の礫含む)
4. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/4 (2 cm以下の礫含む)
5. におい黄色砂質土層 10Y R 4/3 (遺物、1 cm以下の礫含む)
6. 黄色砂質土層 2・5 Y 8/6 (0.5~5 cmの礫含む)
7. 明黄褐色粘質土層 10Y R 6/8
8. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/4 (2 cm以下の礫少量含む)
9. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/3 (1 cm以下の礫含む)
10. オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 4/6 (0.5cm以下の礫含む)
11. 褐色粘質土層 10Y R 4/6 (3~5 cmの礫含む)
12. 暗灰黄色砂質土層 2・5 Y 4/2 (3 cm以下の礫多量、炭化物、遺物含む)
13. 淡黄色砂質土層 2・5 Y 8/4 (炭化物、遺物、2 cm以下の礫含む)
14. 暗灰黄色粘質土層 2・5 Y 4/2 (1 cm以下の礫少量含む)
15. 暗オリーブ褐色砂質土層 2・5 Y 3/3 (遺物、10cm大の礫含む)
16. におい黄褐色砂質土層 10Y R 5/3
17. 灰黄色砂質土層 10Y R 5/2
18. 褐灰色土層 10Y R 4/1
19. 暗オリーブ褐色土層 5 Y 4/3 (遺物、3 cm以下の礫含む)
20. オリーブ黒色土層 5 Y 3/2 (遺物多量、10cm大の礫若干含む)
21. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
22. におい褐色砂層 7・5 Y R 5/4
23. 明黄褐色粘質土層 10Y R 6/6 (5~8 cmの礫含む)
24. 明黄褐色砂質土層 10Y R 7/6 (0.5~2 cmの礫含む)
25. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/6
26. におい黄褐色粘層 10Y R 5/3
27. オリーブ褐色粘層 2・5 Y 4/6
28. 灰オリーブ色砂層 5 Y 4/2
29. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
30. におい黄褐色粘質土層 10Y R 5/3 (粘土含む)
31. 淡黄褐色砂質土層 10Y R 8/4
32. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
33. 黄褐色砂質土層 2・5 Y 5/4 (炭化物、3 cm以下の礫含む)
34. におい黄褐色砂質土層 10Y R 7/4 (1 cm以下の礫含む)
35. 黒褐色砂質土層 10Y R 3/2 (1 cm以下の礫含む)
36. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4 (炭化物、1 cm以下の礫含む)
37. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/6 (0.5cm以下の礫含む)
38. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y 6/6
39. におい黄褐色土層 10Y R 4/3
40. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
41. オリーブ褐色土層 2・5 Y 4/4 表土
42. 黒褐色砂質土層 7・5 Y R 3/1
43. におい黄褐色粘質土層 2・5 Y 6/3
44. 灰黄色砂質土層 2・5 Y 7/2 (炭化物多量を含む)
45. におい黄褐色砂層 10Y R 6/4 (1~3 cmの礫多量を含む)
46. におい黄褐色土層 10Y R 4/3 (1~2 cmの礫多量を含む)
47. 黄褐色砂層 2・5 Y 5/3 (0.5cm大の礫多量を含む)
48. 黄褐色粘層 2・5 Y 5/6
49. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/6
50. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/8
51. におい黄褐色粘層 10Y R 4/3
52. 黄褐色粘層 10Y R 5/6
53. 明黄褐色粘層 2・5 Y 6/8
54. オリーブ褐色粘層 2・5 Y 4/6
55. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4
56. 黄褐色粘質土層 10Y R 5/6

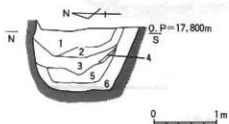
第7図 SF01南壁土層図



第8図 SF01掘底柱穴エレベーション図

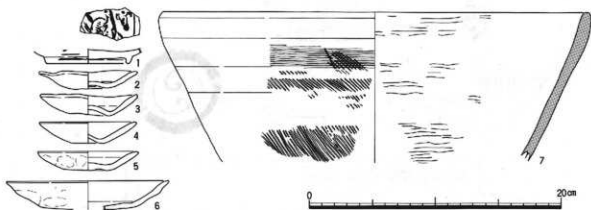


第9図 SF01出土遺物(4以外は最下層)

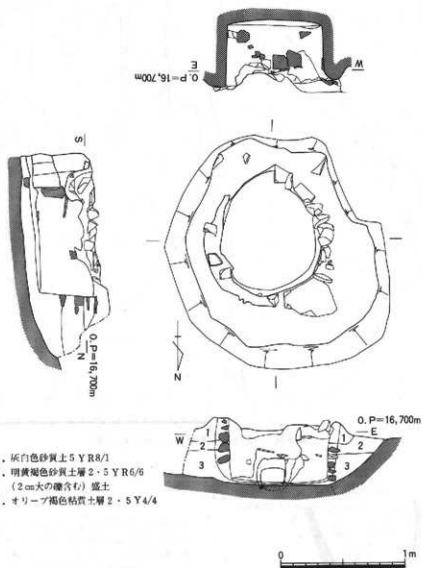


1. 黄褐色砂質土層10Y R5/6 (1~3cmの礫多量に含む)
2. 褐色粘質土層10Y R4/6 (5~10cmの礫含む)
3. 褐色砂礫層7.5 Y4/4 (3~5cmの礫含む)
4. 濃い黄褐色粘質土層10Y R5/4
5. 濃い赤褐色粘質土層5 Y4/4 (2~4cmの礫含む)
6. 褐色粘質土層10Y R4/4 (遺物含む)

第10図 SD01土層図



第11図 SD01出土遺物



1. 灰白色砂質土 5 Y R 8/1
2. 明黄褐色砂質土層 2・5 Y R 6/6
(2cm大の礫含む) 盛土
3. オリーブ褐色粘質土層 2・5 Y 4/4

第12図 SK28遺構図

SD15

SD15は、幅1.00m以上、深さ0.20mを測る溝である。(第12図)

出土遺物(第13図)は、土師質土器皿(2・6・7)、柿輪灯明皿(4)、白磁紅皿(3)、鉄胎陶器壺(1)、刷毛目唐津碗(2)、土師質土器炮烙(8~12)、堺焼播鉢(13)などがあげられる。

土師質土器皿は、大小2法量あり、口径10.4cm、器高2.5cmを測るもの(2)と、口径7.6cm前後、器高1.5cm前後を測るもの(6・7)とに大別される。土師質土器炮烙は、いずれも同一型式であり、口径30cm前後、器高3.8~4.8cmである。いずれも底部にカーボンが付着している。堺焼播鉢は、口径31.0cm、残存器高11.4cmを測る。内面の卸目は、12本単位である。

SK21は、径0.20m、深さ0.20mの土壇である。肥前磁器染付碗が出土した。

SK22は、径0.64m、深さ0.20mの土壇である。肥前磁器染付碗が出土した。

SK27は、2.50m×0.70m、深さ0.15mの土壇である。肥前磁器染付碗が出土した。

SK28は、カマド状遺構である(第14図)。地山の上に砂質土と粘質土を互層にして、高さ1.0m、厚さ0.5m、径0.8m、の円形の壁を築いている。南側に0.2m×0.25mの方形の穴を壁面に貫通させて焚口している。焚口の外側には、段を設けている。カマド内は、火を受けて酸化焙焼成となっている。炉壁の中には瓦を入れて壁面を補強している。炉壁内からは、肥前磁器染付碗が出土した。

SP78-79は、火消壺を2個並置した遺構である(第18図)。径が0.28mで、深さが0.10mを測る。壺内で数回火を消した痕跡が認められる。堀形内には砂を入れて壺を固定している。

出土遺物としては、土師質土器蓋・壺が2個体分があげられる(第19図1~4)。1と2、3と4はセットである。1と2の蓋と壺は、粘質土でできた「タタキ」で密封されている。

その他の遺物

表面採集遺物であるが、花崗岩製石臼の下臼がある(第26図)。8分割の溝式であり、左回しのものである。

IV期の遺構と遺物

明治時代以降と考えられる遺構は、多数存在するが、ここでは、特に便壺S101・02・03・04・07・08・09を取り上げる。

S101

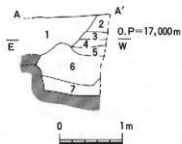
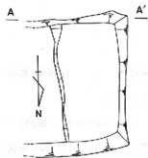
S101・02は、セットと考えられるが、大谷焼の壁を上向きに配置したのち粘質土を周囲に充填している(第20図)。発掘区の北東隅に位置する。以下に記する便壺自体は、S107が丹波焼であることを除外して、いずれも19世紀代の大谷焼であり、成型方法や調整方法が類似している。それは、3段ないし4段の輪積み成型を行ない、底部離れ砂、胴部外面にトチを使用して、焼成している。外面底部を除外して、黒褐色釉を施している。なお、いずれの便壺にも内面に灰褐色の付着物が見られる。

S104

S104は、直径0.48m、深さ0.16mを測る堀形の中に便壺を設置している。堀形埋土中より、堺焼播鉢が出土している(第21図)。19世紀前半代の設置の可能性が高い。口径27.0cm、器高9.0cmを測る。卸目は9本単位である。

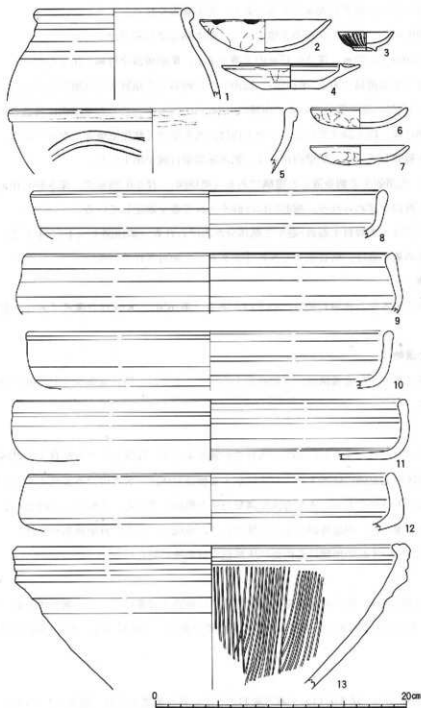
S107

S107は、直径0.31cm、深さ0.14cmを測る堀形のなかに丹波焼壺を入れて便壺としている(第22図)。堀形埋土の中から、柿輪灯明皿(1)・丹波焼壺(2)・瓦質火消し壺(3)が出土している。便壺埋土から、巴

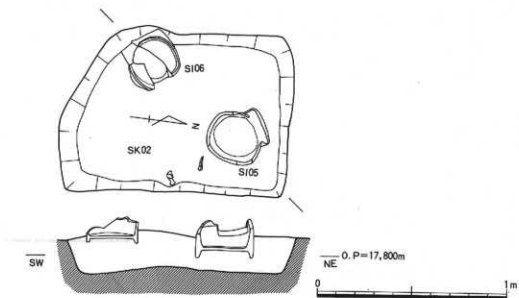


第13図 SD15遺構図

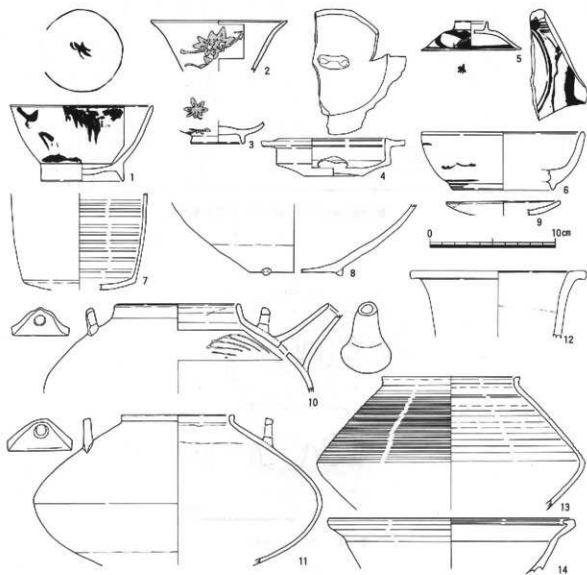
1. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y4/3
(3cm以下の礫・遺物含む)
2. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y4/4
(3cm以下の礫・遺物含む)
3. にぶい黄褐色砂質土層10Y R5/3
(1cm以下の礫、炭化物含む)
4. 褐色砂質土層10Y R4/6
(3cmの礫若干含む)
5. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8
(1～5cmの礫含む)
6. 明褐色粘質土層10Y R3/4
(5cmの礫含む)
7. 暗褐色粘質土層10Y R3/3
(3～6cmの礫・遺物含む)



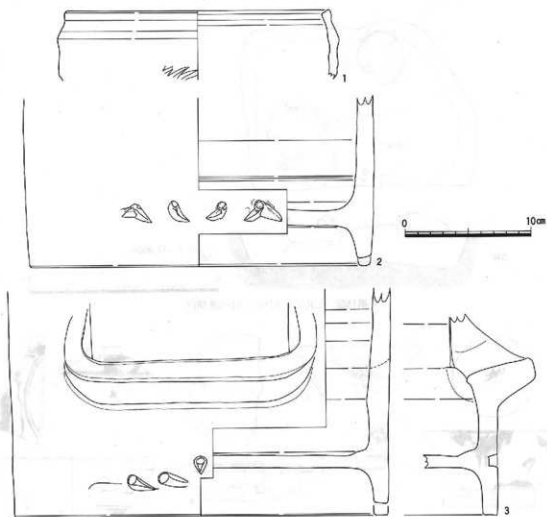
第14図 SD15出土遺物



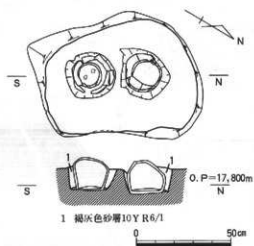
第15图 SK02・SI05・SI06追横図



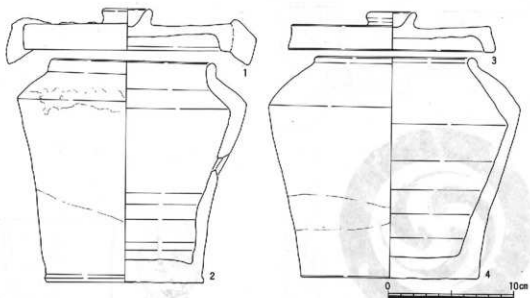
第16图 SK02出土遺物



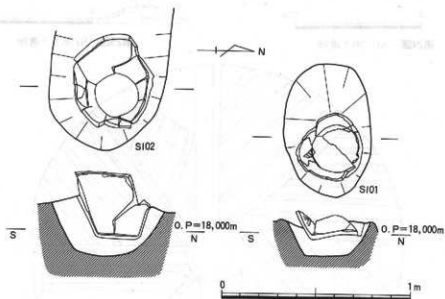
第17圖 SI05(3)・SI06(1・2)出土遺物



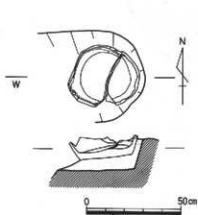
第18圖 SP78・79遺構圖



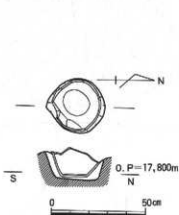
第19図 SP78(1・2)・SP79(3・4)出土遺物



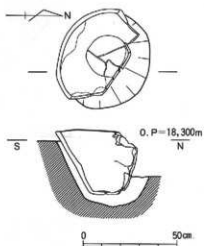
第20図 SI01・SI02遺構図



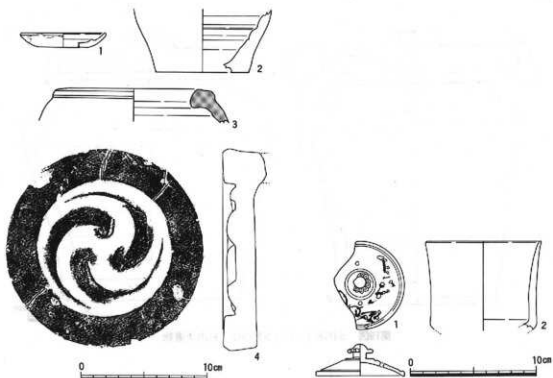
第21図 SI04遺構図



第22図 SI07遺構図

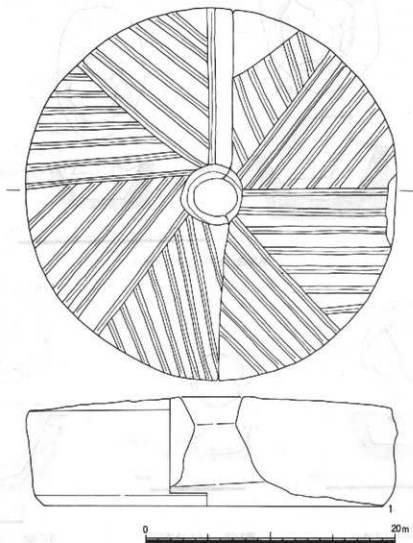


第23図 SI08遺構図

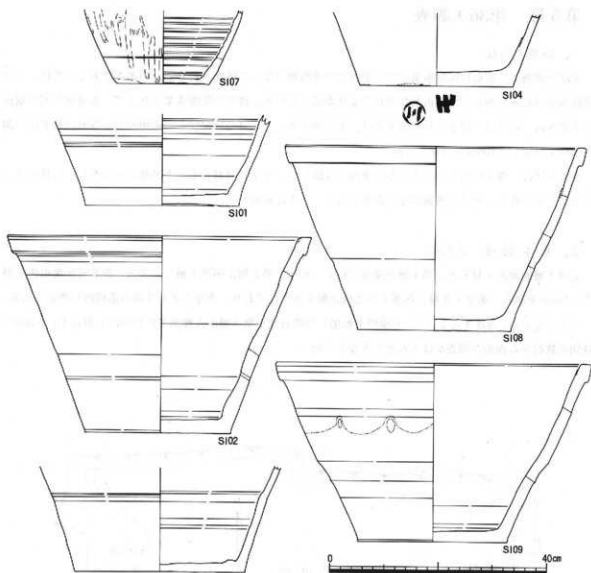


第24図 SI07出土遺物

第25図 SI08出土遺物



第26図 表面採集遺物



第27図 SI01～04・07～09出土遺物

文軒丸瓦（4）が出土している。（第24図）19世紀半ば頃設置され、明治に廃絶している。

SI08・09

SI08・09は、SI01・02の南に隣接する便所である。SI09が機械掘削時に破壊を受けたため、SI08のみの記述に留める。直径約0.45m、深さ0.34mを測る堀形の中に、便所を設置している。堀形埋土より、産地不明の陶器蓋（1）、肥前磁器青磁染付筒茶碗（2）が出土している。（第25図）19世紀末頃の設置と想定される。

第5節 第36次調査

1. 調査の方法

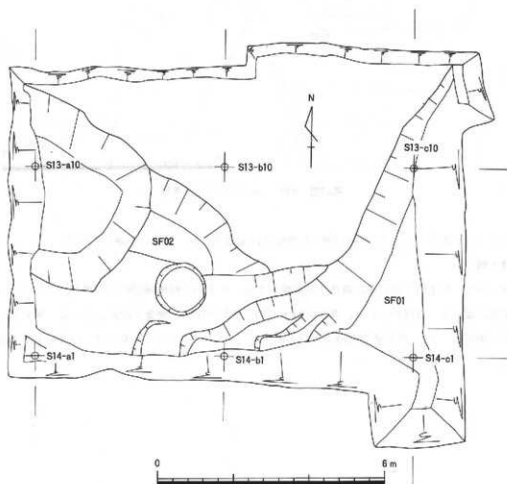
第36次調査は、駅前再開発事業に伴う東西主要道路敷となって破壊される部分の調査である。当初、この道路部分の81㎡の調査を伊丹市教育委員会より委託されたが、従来の発掘成果よりみて、本泉寺を囲む堀跡が予想され、我々は、提示された部分では、不十分と考え、予算及び期間での範囲内で、寺側に若干広く調査面積を設定し、106㎡を対象とした。

調査方法は、排土場所がないことから東西に分離して、先ず10月21日より東側部分を調査し、11月8日に埋め戻しを行ない、続けて西側部分を調査するという方法を取った。

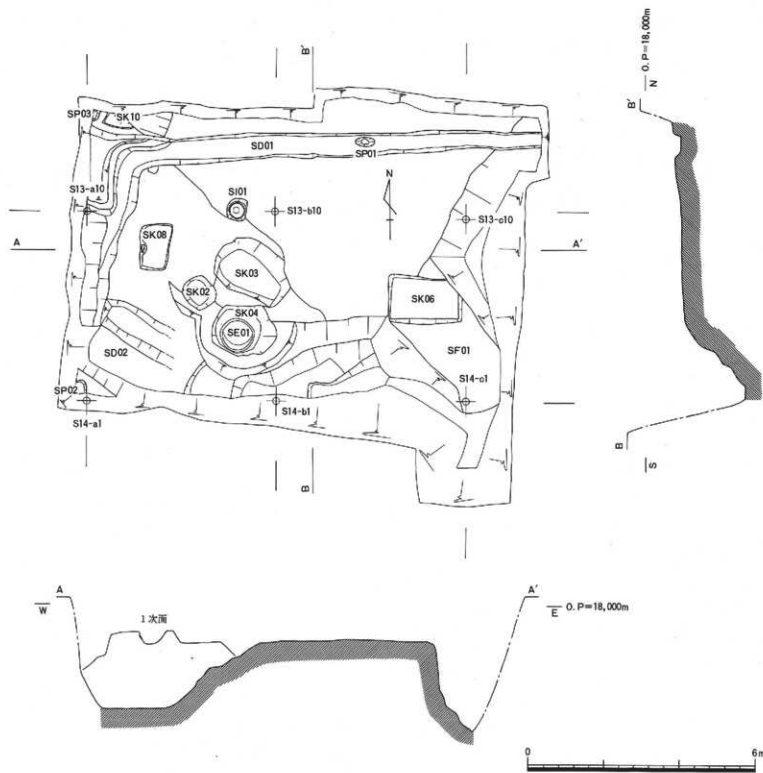
2. 基本層序 (第3図)

北壁土層断面図を見ると、第1層が攪乱でGL-40cm、第2層が褐色土層で-70cm、第3層が黄褐色土層で-100cmを測る。第2・3層から多くの遺構が掘り込まれており、少なくとも3面の遺構面が想定される。

しかしながら、後述するように、五輪塔を転用した礎石列が第3層から検出されたのにも拘らず、予算的・時間的制約から面的な調査がほとんどできなかった。



第1図 第2次面遺構全体図



第2図 第一次面透視全体図

第2層は18世紀末から19世紀初頭、第3層は17世紀後半の年代が想定される。

3. 調査の成果

検出した遺構は、堀2条、井戸1箇所、柱穴3箇所、土壇11箇所、溝2本を数え、面積に比較して非常に濃密な分布状態であった。

I・II期の遺構と遺物

有岡城期と考えられる遺構は、S F01・02である。但し、S F02は、S F01にきられており、伊丹城期の可能性も考えられる。

S F01

S F01は、幅4.0m、深さ25.0mを測る。下場の幅が25mを測り、西壁は、途中まで約45度、半ばより上半は約90度という急傾斜で立上がり、東壁も下場の一部のみ検出しているが、西壁と同様である(第3図)。S F01は、基本的には、南西・北東方向の堀であるが、南端では、4段の階段状遺構が検出されており、ある時期には、通路として利用されていた可能性がある。

土層の堆積状況は、下層から順序よく堆積しており、土塁を崩して埋めた痕跡は見られない(第4図)。出土遺物は、明確に時期を決定できるものではなく、S F01下層から、花崗岩製組合せ五輪塔空風輪部が出土しており、そのみを記した(第5図)。

S F02

S F02は、S F01に切られており、古い時代の堀である。幅4m、深さ2mを測る。下場の幅が約2.3mを測り、南壁が75度、北壁が60度で立上がる。泥質土が最下層に約30cm程堆積しており、水堀であった可能性が高い。この堀は、S F01に破壊されているために、明確には不明であるが、交差部分まであった浅い堀を掘り直している可能性がある。

出土遺物は、白磁端反り皿、備前焼壺、屋瓦などがある程度出土している。

IV期の遺構と遺物

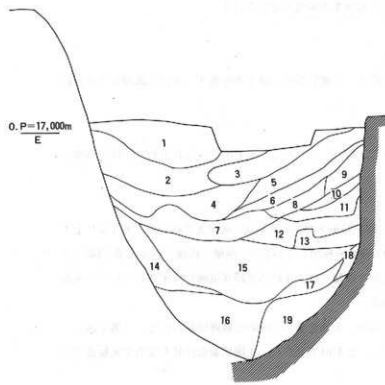
江戸時代の遺構は、S D01・02、S K02・03・08・09・10・11、S F01・02・03があげられる。周辺の土層観察から、S K03・08が第3層から掘り込まれている以外、いずれの遺構も第2層から掘り込まれている。

S D01

S D01は、現存幅約0.50m、深さ約0.10mを測る溝である。東壁の土層断面図を観察すると、本来幅約0.60m、深さ約0.50mを測ることが判明した。北端より土師質土器がまとまって出土している(第9図)。

出土遺物は、灯明皿多数(第10図1～3)、銅製キセル(5)、唐津系青緑釉皿(4)、備前焼建水(6)、肥前磁器焼赤絵香油壺(7)、土師質土器炮烙(8)、軒丸瓦・軒平瓦である。灯明皿は、最下層から出土し、炭化物と共に投棄された状態が明瞭にわかる。灯明皿は、いずれもてすくお非ロクロ成型であるが、口径・器高から2タイプに分れる。口径10.5cm、器高2.1cm前後のもの(1・3)と口径8.0cm、器高1.8cm前後のもの(2)とである。銅製キセルは、長さ6.6cm・口径1.4cmを測る。備前焼建水は、口径12.4cm、器高5.5cmを測る。肥前磁器焼赤絵香油壺は、胴部最大径は、9.4cm、器高は、7.1cm以上、を測る。土師質土器炮烙は、口径21.0cm、器高4.9cm以上を測る。2mm前後のくさり礫を多く含み、外底から胴部外面低位にカーボンが多く付着する。

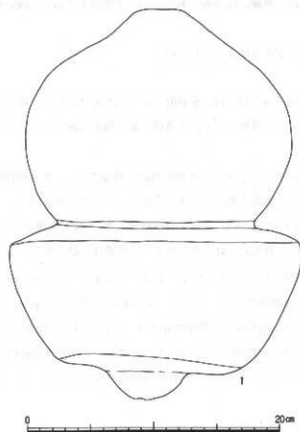
これらのことから、18世紀半ば頃の遺構であることがわかる。



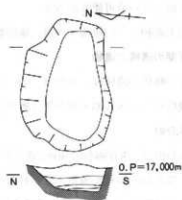
第4図 SF01土層図

SF01土層

1. 明褐色砂質土層 7・5 Y R 5/8
2. におい褐色砂質層 7・5 Y R 6/8
3. 褐色砂質土層 7・5 Y R 4/8 (礫多量に含む)
4. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/8 (炭化物多量に含む)
5. におい褐色粘質土層 7・5 Y R 6/4
6. におい褐色砂質土層 7・5 Y R 5/4 (1cmの礫含む)
7. 灰黄褐色礫層 10 Y R 4/2 (5cm大の礫多量に含む)
8. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 5/4 (1cm大の礫多量に含む)
9. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 5/4 (炭化物含む)
10. におい褐色粘質土層 7・5 Y R 6/4
11. 灰褐色礫層 7・5 Y R 6/2 (3cm大の礫、炭化物多量に含む)
12. 明褐色粘質土層 7・5 Y R 5/8 (4cm大の礫多量に含む)
13. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 6/4 (2cm大の礫含む)
14. におい黄褐色粘質土層 10 Y R 4/3 (4cmの礫含む)
5. 褐色粘質土層 10 Y R 4/4 (礫若干含む)
16. 黒褐色粘土層 10 Y R 2/3 (10cm大の礫、炭化物多量に含む)
17. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 5/3 (3cmの礫含む)
18. におい褐色粘質土層 7・5 Y R 5/4 (10cmの礫含む)
19. 黄褐色砂質土層 2・5 Y R 5/4 (15cm大の礫含む)



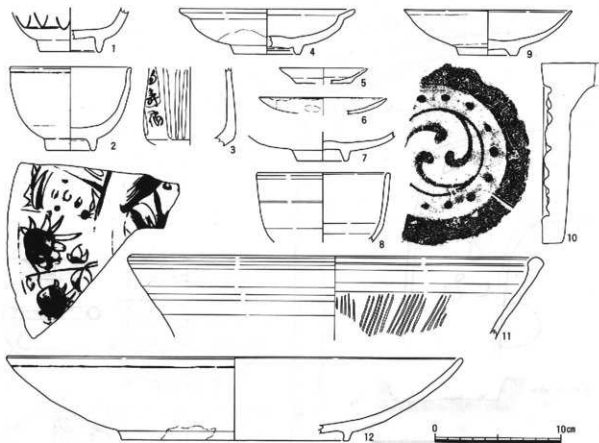
第5図 SF01出土遺物



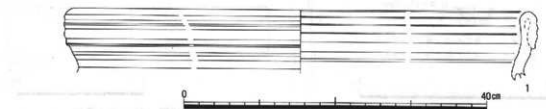
1. 褐色砂質土層 10 Y R 4/4 (0.5-10cmの礫含む)
2. におい褐色砂質土層 2・5 Y 4/3 (礫、炭化物多量に含む)
3. 明黄褐色砂質土層 10 Y R 6/5 (2-4cmの礫少量含む)
4. におい黄褐色砂質土層 10 Y R 5/4 (1cm以下の礫多量に含む)



第6図 SK03遺構図



第7図 SK03出土遺物(1)



第8図 SK03出土遺物(2)

SD02

SD02は、幅2.30m、深さ0.75mを測り、北側に段を有する溝である。遺物は、18世紀代の肥前磁器碗が出土しており、SD01に切られている。発掘区東半では、検出しえなかった。

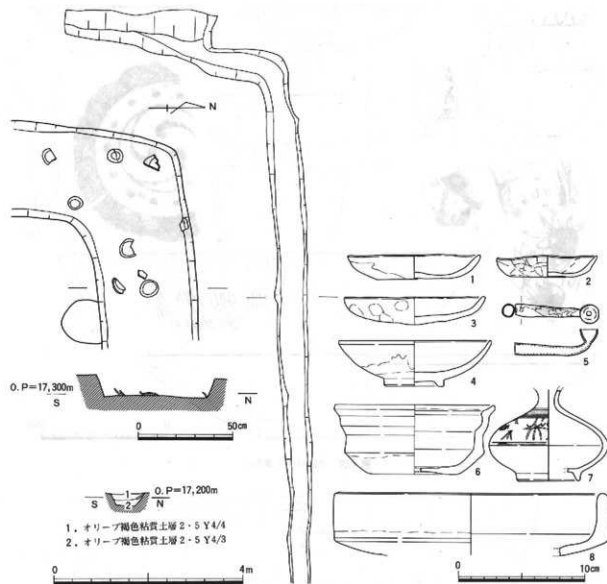
SK02

SK02は、径0.90m、深さ0.50mを測る土壇である。18世紀代の肥前磁器を出土している。

SK03

SK03は、径1.00m、深さ0.42mを測る土壇である(第6図)。土層は、四層に分層でき、遺物は第3・4層からすべて出土している。

17世紀後半代の唐津系青緑釉皿(9)、17世紀中葉頃の肥前磁器染付碗(1・2)、17世紀前半代の芙蓉手の青花大皿(12)、17世紀中葉頃の肥前磁器茶先徳利(3)が出土しており、遺構の年代は17世紀後半と考えられる。(第7図)



第9図 SD01遺構図

第10図 SD01出土遺物

その他の遺物としては、肥前磁器青磁皿（4・7）、瀬戸美濃焼碗（8）、丹波焼摺鉢（11）、備前焼大甕（第6図1）、が出土している。

S K03は、S K02に切られており、より古い遺構であることがわかる。

S K08

S K08は、1.20×0.80m、深さ0.30mを測る土罫である。

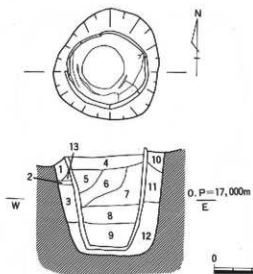
出土遺物は、巴文軒丸瓦、銅製キセル片、肥前磁器碗等が出土しており、18世紀代の遺構であることがわかる。

S K09

S K09は、S D01と同様の遺物が出土しており、堆積土の土質からもS D01と同じ遺構の可能性はある。

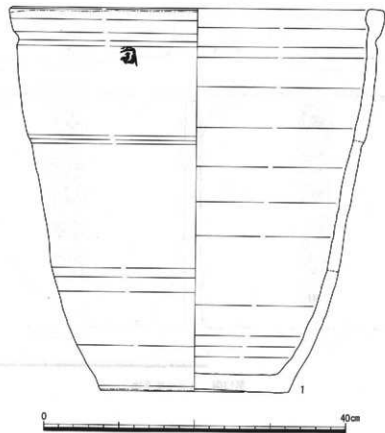
S K10

S K10は、S K09に切られた土罫である。径1.00m、深さ0.25mを測る。18世紀代の肥前磁器が出土している。



1. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 (炭化物、燼土若干含む)
2. 灰オリーブ褐色粘質土層5 Y4/2 (燼土含む)
3. オリーブ褐色土層5 Y2/2 (1~2cmの礫多量に含む)
4. オリーブ褐色土層2・5 Y4/6 (炭化物、燼土含む)
5. オリーブ褐色粘質土層5 Y3/2
6. 暗オリーブ色粘質土層5 Y4/4
7. オリーブ褐色粘質土層5 Y3/1
8. 暗褐色粘質土層10Y R3/4
9. 暗オリーブ褐色砂質土層2・5 Y3/3
10. 黄褐色粘質土層10Y R5/8
11. 灰オリーブ色粘質土層5 Y4/2
12. 黄褐色粘質土層2・5 Y5/6
13. 明黄褐色粘質土層10Y R6/8

第11図 S101遺構図



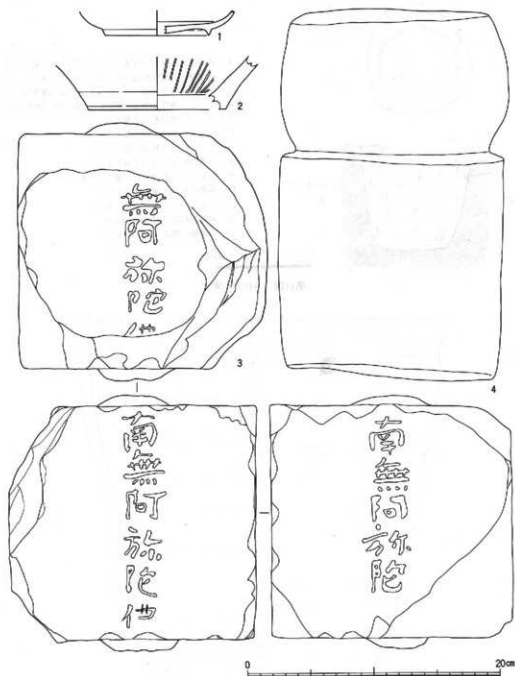
第12図 S101出土遺物

S K 11

S K 11は、S D 10を切った約70cmの土壌である。平面では確認できなかったが、西壁土層断面図では観察できた。

S P 01

S P 01は、S D 01内の柱穴である。0.50×0.20mで深さ0.30mを測る。



第13図 表面採集遺物

S P02・03は、径0.30mを測る柱穴である。出土遺物はないが、整地層の上面より掘り込んでいること、埋土が伊丹郷町期の遺構のものと似ていることから、江戸時代のものと判断した。

IV期の遺構と遺物

明治時代以降と考えられる遺構は、S E01・S K06・S I 01があげられる。

S E 01

S E01は、径0.80m、深さは、2.00m以上を測る。最上部には、コンクリート製井戸枠がのっており、明治～大正期の摺絵染付皿が出土している。大正時代の井戸である可能性が高い。

S K 06

S K 06は、1.80×1.20mで深さは32cmをはかるコンクリート枠の方形土壌である。中に、川砂が一面に詰っていた。遺構の時期は不明である。

S I 01

S I 01は、径0.40mを測る便壺である（第11図）。明治～大正時代の遺構である。壺自体の法量は、口径48.4cm、50.4cmを測る。全面に黒褐色釉が掛けられ、胴部に二ヵ所接合痕が見られる。口縁部外面直下に押印がある。大谷焼の可能性がある。

口縁が欠損していないこと、S E 01の高さがS I 01とほぼ同一レベルであること、を考慮すると、明治～大正時代に、江戸時代の整地層及び有岡城の地山層を削平して、遺構面としていると考えられる。

その他の遺物

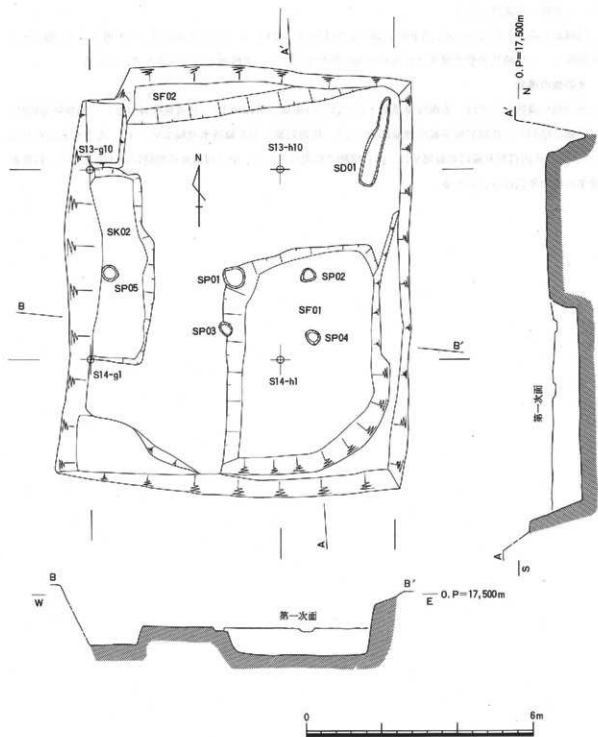
その他の遺物としては、表面採集遺物としては、白磁皿（第13図1）、丹波焼摺鉢（2）、「南無阿弥陀仏」を三面に陰刻した花崗岩製五輪塔地輪部分（3）、花崗岩製一石五輪塔水地輪部分（4）、などがあげられる。

（3）の花崗岩製五輪塔地輪部分は、礎石建物の転用石として、第3層機械掘削時に出土しており、17世紀後半の使用年代が与えられる。

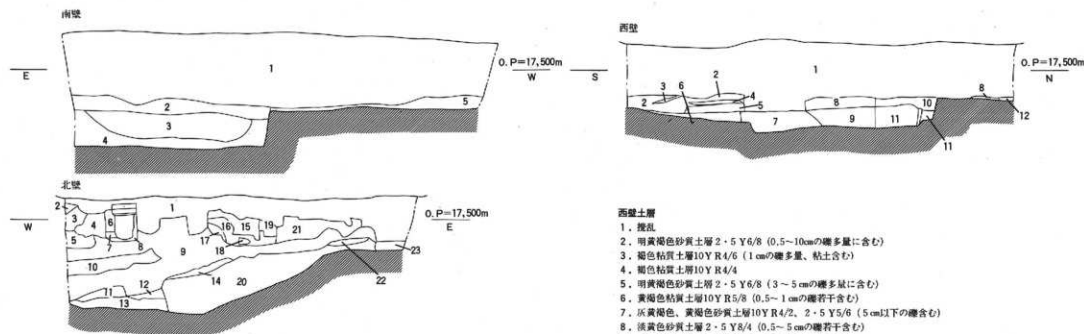
第6節 第38次調査

1. 基本層序

南壁を見ると、上面から1.50m程度は、擾乱を受けており、堀は、上面がかなり削平を受けている状況がよくわかる（第2図左上）。第3・4層は、粘質土層であり、水堀であった可能性が高い。



第1図 第38次調査遺構全体図



南壁土層

1. 擾乱
2. 明黄褐色砂質土層10Y R6/4 (0.5-10cmの礫多量に含む)
3. 褐色粘質土層10Y R4/6 (1cmの礫多量、粘土含む)
4. 褐色砂質土層7・5 Y R4/6 (3-5cmの礫含む)
5. 明黄褐色砂質土層2・5 Y 6/8 (0.5-10cmの礫多量に含む)

北壁土層

1. 擾乱
2. 黄褐色砂質土層2・5 Y 5/6 (炭化物多量に含む)
3. オリーブ褐色粘質土層2・5 Y 4/6 (1-5cmの礫多量に含む)
4. 黄褐色粘質土層10Y R5/6 (0.1-5cmの礫多量に含む)
5. 褐色粘質土層10Y R4/6 (3-10cmの礫多量に含む)
6. 灰キリープ色礫層5 Y 6/2
7. 明黄褐色粘質土層7・5 Y R5/6 (0.5-1cmの礫多量に含む)
8. 黄褐色粘質土層2・5 Y 5/4 (2-3cmの礫若干含む)
9. 明黄褐色粘質土層10Y R6/6 (1-10cmの礫含む)
10. 褐色礫層7・5 Y R4/6
11. 黄褐色粘質土層Y R5/6 (0.5-5cmの礫多量に含む)
12. 黄褐色粘質土層2・5 Y 5/4 (1cmの礫、炭化物多量に含む)
13. オリーブ黄色礫層5 Y 6/3
14. 褐色粘質土層7・5 Y R4/6 (2cmの礫若干含む)
15. 明黄褐色砂質土層2・5 Y 6/8 (1-10cmの礫多量に含む)
16. 灰キリープ褐色砂質土層2・5 Y 3/3 (炭化物多量、遺物若干、3-7cmの礫含む)
17. オリーブ褐色砂質土層2・5 Y 4/3
18. 明黄褐色砂質土層2・5 Y 6/6 (1-5cmの礫含む)
19. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8 (2-7cmの礫含む)
20. 黄褐色粘質土層10Y R5/8 (1-2cmの礫多量、粘土含む)
21. 褐色砂質土層10Y R4/4 (遺物若干、2-7cmの礫含む)
22. 黄褐色粘質土層10Y R7/8 (2cmの礫含む)
23. 明黄褐色砂質土層10Y R6/8 (3-10cmの礫含む)

西壁土層

1. 擾乱
2. 明黄褐色砂質土層2・5 Y 6/8 (0.5-10cmの礫多量に含む)
3. 褐色粘質土層10Y R4/6 (1cmの礫多量、粘土含む)
4. 褐色粘質土層10Y R4/4
5. 明黄褐色砂質土層2・5 Y 6/8 (3-5cmの礫多量に含む)
6. 黄褐色粘質土層10Y R5/8 (0.5-1cmの礫若干含む)
7. 灰黄褐色、黄褐色砂質土層10Y R4/2, 2・5 Y 5/6 (5cm以下の礫含む)
8. 淡黄色砂質土層2・5 Y 8/4 (0.5-5cmの礫若干含む)
9. 黄褐色砂礫層10Y R6/8 (3-5cmの礫多量に含む)
10. 褐色粘質土層10Y R4/4 (4-5cmの礫若干含む)
11. 褐色砂質土層10Y R4/4 (0.5-1cmの礫、遺物多量に含む)
12. 褐色粘質土層10Y R4/4



第2図 第38次調査南壁・西壁・北壁土層図

2. 調査の成果

検出した遺構は、堀2条、井戸1箇所、柱穴4箇所、土塼2箇所を数えるが、上面が、上部建築物の基礎で大きく破壊されており、深く掘り込まれた遺構の底部のみが残存していた（第1図）。検出した遺構を中世（室町時代）、近代（明治時代）に分けて略述する。

II期の遺構と遺物

有岡城期と考えられる遺構は、SF01・03である。SF01・02・03・04は、SF01とは直接的には関係のない柱穴群である。

SF01

SF01は、幅4.20m、深さ1.00mを測る堀である。下場では、幅3.50mを測る。先述した、第30次調査SF01を北に延長した位置に相当し、同一の堀と想定される。

出土遺物は、小型軒丸瓦（第3図2）、内面に布目圧痕、外面に縄目痕がついている平瓦（3）、肥厚した口縁縁帯を有する備前焼V期終末の播鉢（4）が出土している。

SF03

SF03は、第23次調査SF01から続いてくるもので、この地点で屈曲していることが分かる。南側扇形のみが検出され、北側堀形は、発掘区域外になる。堀底は検出されていない。

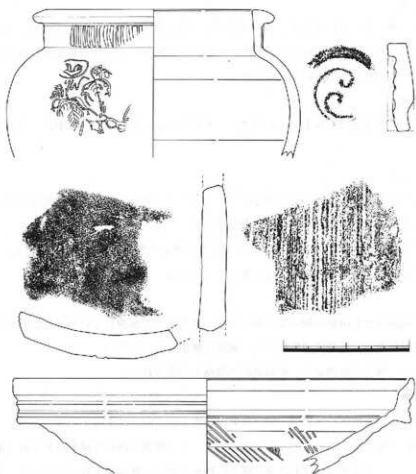
出土遺物はないが、埋土の色調から、有岡城期の遺構と想定される。

IV期の遺構と遺物

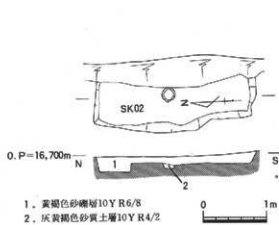
明治以降と考えられる遺構は、SK01・02、SP01・02・03・04、S I01である。

SK02は、深さ0.40mを測る土塼である。北端にセメントで周囲を固めた植木鉢S I01（第5図）と多数の煉瓦が出土している。S I01は、径0.20m、深さ0.19mを測り、底部に穿孔が見られる。また、瀬戸美濃焼緑釉瓶拵第3図（1）も出土している。口径16.2cm、胴部最大径23.0cm、残存器高11.6cmを測る。

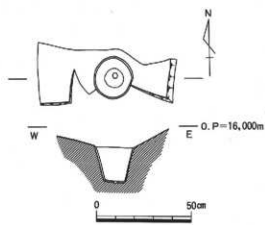
SK01、SP01~04からは、出土遺物はないものの埋土の状態、及び遺構検出面の高さから明治以降のものと想定した。



第3图 SK02(1)·SF01(2~4)出土遗物



第4图 SK02遺構図



第5图 S101遺構図

第5章 結 語

第1節 在 城 期

在城期は、前述したように堀や井戸など深いものだけが残されていて、充分に当時を復元することができない。しかし、数少ない遺構・遺物からいくつかの想定をなすことができる(付図6、他)。

1. I期 伊丹城期

まず、堀の有り方についてであるが、伊丹城期のものとしては、第23次調査S F03がある。これは、他の堀とは異なった方向を示し、第21次調査で検出された同時期のS F02と方向がほぼ一致する。第27次調査で検出した浅い溝SD04も、同じ時期に属すると考えられるが、やはりこれと方向を同じくする。堀の断面形は箱堀であり、出土遺物も16世紀中頃前後で、伊丹城期の中でも新しい時期に属すると考えられる。これにより伊丹城期の堀は、後述する有岡城期のものとは異なった方向で設けられていたことがわかる。また、この第21次調査S F02と第23次調査S F03の間は、ひとつの区画された空間すなわち曲輪と考えることができる。とすれば、第2郭が西側に設けられていたことになる。さらに16世紀前半以前は、主郭の周辺には堀は存在せず、主郭周辺の防備の発達は16世紀中頃を第1段階とすることも判明した。

このほか、第23・27次調査で井戸S E06・09を検出し、第30次調査では溝SD12・13を検出したことによって、この地域にも伊丹城期の何らかの施設の存在を想定することができる。しかし、過去に主郭南側で行われた調査ほど遺構・遺物とも多くない。これは、遺存状態の関係とも考えられるが、それだけでなく、南側が当該地区よりもより重要な地域であったためとも考えられる。すなわち、南側は江戸時代に「大手町」と呼ばれており、有岡城期の大手を想定する事ができる。さらに、伊丹城期にも同様に大手としてあったことが、このような遺構・遺物の密度によって推測できるのである。

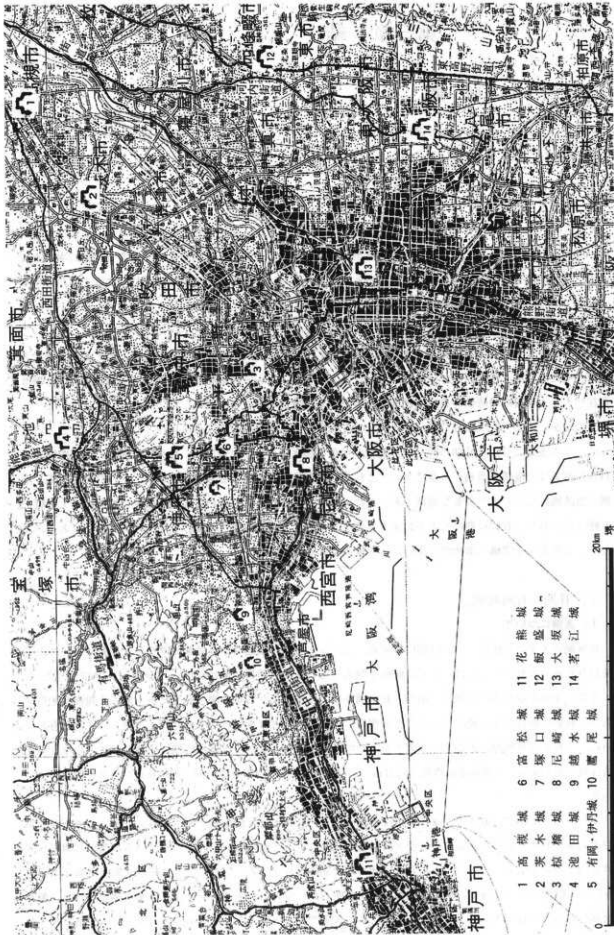
2. II期 有岡城期

1. 遺構について

在城期の大半の遺構は、この時期に属する。このうち堀は、前述の伊丹城期と異なり、非常に多いことが注目される。これについては、すでに概略を発表しているが(前川 要1987年)、改めてまとめておきたい。

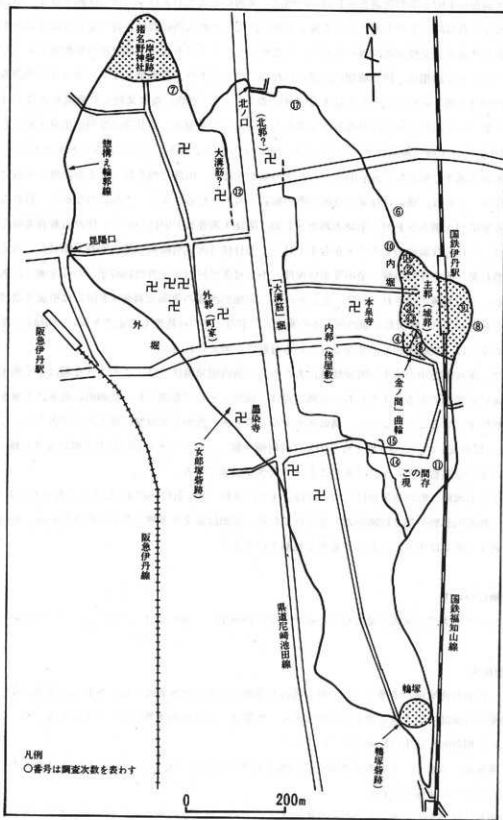
まず、主郭を取り巻く内堀は、第24・40次調査によって幅15~17m、深さ6~7mを測る大規模な箱堀であり、鉤形に折れながら続いていることが明確になった。これは築堀で、明治時代まで埋まらずに遺存していた。これが伊丹城期にどのような姿であったかは不明であるが、ほぼ同時期の平地の城である東大阪市若江城(推定30m)や高槻市高槻城(約24m)、丘陵を利用した池田市池田城(約25m)に次ぐ規模をもっている。

また、その外側には幅4~5mの中規模の堀や幅2~3mの小規模な堀が何本もみられる。このうち、第23次調査S F02、第27次調査S F01などは、現行道路に沿って南北方向で設けられている。第30次調査S F01も同じ方向を示す。しかも、これらはほぼ一定の間隔で存在する。これによって伊丹城期とは異なる、現在に残る町割りがこの時期に形造られたことが判明した。さらに、東西方向には、第30次調査S D01、第35次調査S D04・11の溝が設けられ、これによって区画される区域のなかに、第27次調査S E08、第35次S E



第1圖 大阪平野の中世末期の主要城郭

- 1 高槻城
- 2 茨木城
- 3 榎橋城
- 4 池田城
- 5 右衛門・伊丹城
- 6 富田城
- 7 塚本城
- 8 尾崎城
- 9 藤水城
- 10 鷹尾城
- 11 花菱城
- 12 飯盛城
- 13 大著城
- 14 江崎城



第2図 有岡城復元案(浅岡俊夫1987年より転載)

04など一基ずつ井戸が設けられている。すなわち、これらの区画は、屋敷地と考えられるのである。なかでも、第23次調査S F02と第27次調査S F01との間は、東西45m南北35m以上の広い区画をなす。第23次調査S F01・02から落城時のものと考えられる焼土と共に出土した輸入陶磁器は、質・量ともに主郭出土品に匹敵し、屋瓦も共通する文様が過半数を占める。したがって、ここは有力な上級家臣の屋敷地であった可能性が高い。このような様相は、伊丹城期には認められないことであり、宣教師ルイス・フロイスの語る「我等は宵の口に伊丹と称し甚だ壮大にして見事なる城に着きたり。(中略)彼は又新たに築造せる彼の壯麗なる城を日中に觀せんと欲し、翌日は是非彼と午餐を共にせんことを望みしが我等は黎明前出発すること必要なりき。」(耶蘇會士日本通信異國叢書)とある荒木村重の大改造の一環としてとらえることができる。

一方、第40次調査で検出したS F03は、S F02の幅をせばめ、両側に枕を打って上面に覆いを設けた特異な構造をなす。これは、織田信長軍の攻城の際の施設と考えられる。また、これにつながる、折れながら斜めに延びる堀第23次調査S F01、第38次調査S F03、第36次調査S F01について、伊丹市教育委員会の小長谷正治氏は、これも攻城用のもので天正七年十月二十七日付「河尻秀隆あて織田信長黒印状」にみえる「彼向事外構悉打果、天主斗攻詰候、金堀等申付候間、不日可落居候」(八木哲治1987年)の「金堀」にあたるのではないかと、との見解を示されている。たしかに、この堀の西端の第36次調査S F01には壁面を階段状にした不自然な箇所があり、断面形も他の堀とやや異なっており、その可能性も否定できない。同様に、幅2~3mの小堀の中には、攻城用のものが含まれている可能性が考えられる。

ところで、現在調査中の城下の町屋地域にあたる宮ノ前再開発地区では、このような堀は全く検出しておらず、非常に対照的である。すなわち、主郭周辺は「城内」として意識され、計画的に幾重にも堀を巡らせ、家臣団の居住地とすることによって、高低差が少なく最も弱い西からの攻撃に備えたのであろう。この調査によって、【信長記】にみえる「城と町との間に侍町御座候、これをハ火をかけはたか城になされ候」とある侍町のような実態を明らかにできたことは、大きな成果である。

このような有岡城下町の位置付けについては、すでに前川 要(前川1987年)によって行われており、「近世城下町の初源的形態」(第2段階(b)期)とされている。詳細は論文を参照していただきたいが、その評価を大きく変更する意見は出されておらず妥当な見解といえよう。

2. 遺物について

遺物についてもすでに速報を発表しているが(川口1988年)、一部に留まっており、ここでまとめておきたい。

(1) 遺物組成

表1は、II期有岡城期の遺構のうち、最も豊富な遺物が出土したS F01・02、SD10の遺物のなかで、土器、漆器類の口縁部の破片数を数えたものである。数量は、実際の個体数に対してかなり多くなっているはずであるが、相対的な比率は反映されている。

これを種類別にみると、土師質土器類が73.7%と大半を占める(表2)。このうち97%は皿である。ほかに、釜、火舎なども少量みられる。

輸入陶磁器は16.5%を占め、かなりの高率である。この点は、この地点の性格を考える上で重要である。しかし、遺構によって片寄りもみられ、SD10では非常に少ない。ここでは、93.1%が土師質土器である。輸入陶磁器のうち最も多いものは白磁で、8.7%を占める。この大半は、壺反り皿である。次いで青花が5.6%となっている。これも器種は皿が多く、特に小野分類E群皿が主体となっている。青磁の比率は低く、器

種としては碗が多い。青磁皿の数量は、碗に対して約1/3である。

国産陶磁器は8.3%と、輸入陶磁器を下回っている。製品で最も多いのは備前焼であり、4.7%と半数を占める。次いで瀬戸・美濃焼2.0%、丹波焼1.5%となる。伊賀・信楽焼かと思われる器種不明品も1点出土している。

このほか、瓦質土器も少量みられ、その多くは火舎類である。

これを、器種別にみると、表3のようになる。最も多いのは皿であり、84.0%を占める。碗は4.2%。他の器種に至っては播鉢が2.4%、壺が1.1%を占めるほかは、すべて1%にも満たない。このような構成比に、従来、木地碗が多く使われていたが残らなかったのではないかと、という意見も聞かれたが、渋谷高秀氏は、皿中心の姓をなす時期ではないかという意見を出されている（渋谷1991年）。

次に、器種毎に各種類の比率をみてみよう。まず、供膳形態の碗の種類別の構成比をみると、表4のようになる。SD10では青花碗が出土しておらず、比率が異なっているが、碗の出土点数そのものが少ないため、正確な構成比を示しているかどうか判断できない。SF01・02では青花が最も多く、29%を占める。青磁も比率は高く、27%を占める。次に多いのが瀬戸・美濃焼鉄軸天目茶碗で、19.3%を占めている。漆器碗も少ないながら10.2%と一定の比率を占めている。

皿は、前述のように土師質土器皿が多い。これは、先に3つの型式に分類したが、それを口径と器高によってグラフ化したのが表7である。これをみると、1型式A類と2型式A類は、分布範囲がほぼ重なる。また、1型式B類、2型式B類、3型式A類も口径10~11cmの範囲でまとまっている。さらに、1型式C類と3型式B類も、ややバラツキはあるものの一定のまとまりをみせている。このように当該期の土師質土器皿は、型式は異なっても特に口径を中心にして大・中・小の3つの群が認められ、これが主体となる。中でも8cm前後の小型のものが多く、これらは灯芯痕がみられるものもあるが、多くは食器として用いられているようである。このように多くの土師質土器皿が出土する理由として、食事儀礼によるものであるという意見も傾聴に値する。

これに次いで多いのが、白磁皿で9.61%を占める。大半が、端反り皿である。青花皿は、4.27%で白磁皿の約1/2である。

調理具・貯蔵容器は、表6のようになる。これをみると、調理具・貯蔵容器は、主に国産陶磁器によって構成されていることがわかる。なかでも、備前焼製品は75.6%を占めている。次いで丹波焼製品が23.7%みられ、この2つの生産地によってはほぼ賄われている。主な器種の備前焼の占有率は播鉢が82%、壺が100%、壺が37.5%となる。壺だけは、丹波焼が備前焼を上回っている。

(2) 遺物組成における他遺跡との比較

さて、このような比率は、外の遺跡と比較するとどのような差異が認められるであろうか。ここでは、データが提示されている遺跡のうち、同時期の城下町である一乗谷朝倉氏遺跡と距離的に近い標環塚都市遺跡と比較の対象にしてみよう。（小野1984年、森村健一1984年、岩田 隆1988年、吉岡泰美・月輪 泰1990年）ただ、一乗谷朝倉氏遺跡では、総破片数をデータに用いており、標環塚都市遺跡や有岡城のデータの基準と異なっているため、正確な比較にはならないことを断っておく。

まず、供膳具で土師質土器皿の占める割合が高いのは、標環塚都市遺跡や一乗谷朝倉氏遺跡などと共通する。これは全体の70.9%を占め、一乗谷朝倉氏遺跡の朝倉館や中の御殿の91~95%という比率には及ばないが、武家屋敷・町屋・寺院の平均値50~60%前後という数字を上回る。また、標環塚都市遺跡の最高値63.3%をも上回っている。

表4 第23次調査 有岡城期遺構出土陶組成

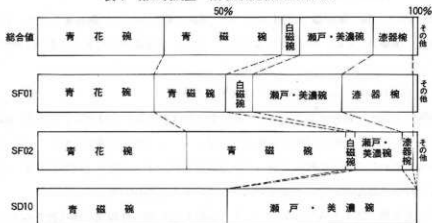


表5 第23次調査 有岡城期遺構出土皿組成

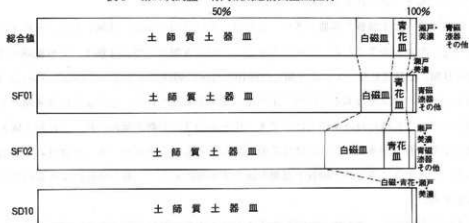
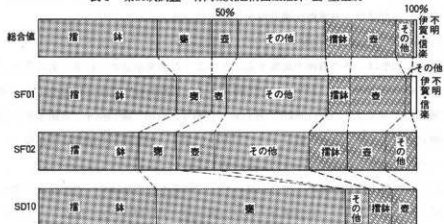
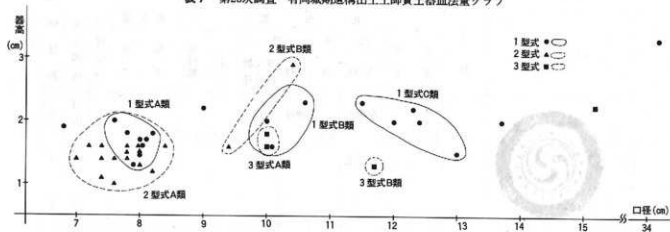


表6 第23次調査 有岡城期遺構出土播鉢・壺・壺組成



播鉢 壺

表7 第23次調査 有岡城期遺構出土土師質土器皿法量グラフ



輸入陶磁器は、絶対数では少ないが、比率的には朝倉館の1.5%、中の御殿の3.4%、第10・11次調査の重臣クラスの武家屋敷の5.7%に対して16.5%とはるかに上回っている。もちろん、朝倉館や中の御殿では土師質土器の比率が極端に高い事もあるが、これを除いても有岡城の場合61.9%となり、両地点の倍の比率となる。当該期の堺環濠都市遺跡でも、一定面積を調査した地点では12~13%であり、これを上も上回っている。青磁、白磁、青花の比率は1:5:3程度で、堺環濠都市遺跡の1:2:6あるいは1:4:4(地点によって差が認められる)とは異なっており、一乗谷朝倉氏遺跡の平均的傾向の4:4:2とも違っており、中の御殿の2:7:3に近い。また、その器種構成では、青磁では碗が多く、白磁、青花では皿が多いという点は一乗谷朝倉氏遺跡と同じ傾向である。堺環濠都市遺跡のデータは、この点についてはバラツキがある。

このような比較からは、土師質土器皿の比率は一乗谷朝倉氏遺跡の一般的傾向から領主館の傾向にやや近く、青磁、白磁、青花の比率でも、その傾向がみられることがわかる。

次に調理具・貯蔵容器についてであるが、播鉢の比率は38.2%あり、一乗谷朝倉氏遺跡の平均値10~20%を上回っている。堺環濠都市遺跡では、備前焼、丹波焼に占める播鉢の割合は40~95.1%で、地点によって大きな差がある。ただ、やはり播鉢が多い傾向は認められ、この点は畿内周辺の遺跡の特徴と言えるかもしれない。また、堺環濠都市遺跡との比較で注目されるのは、丹波焼の比率が高いことである。当該期の堺環濠都市遺跡では、1・2点の播鉢がみられる程度で、国産陶磁器に占める割合は、わずかに2~6%である。その理由として西摂地域が丹波焼の生産地により近いということもあるが、堺環濠都市遺跡が港湾都市であり、備前焼がダイレクトに搬入されていると考えられることも挙げられよう。

壺と甕の比率では、一乗谷朝倉氏遺跡では甕は壺の約3倍出土しているが、有岡城では4:5と壺の方がわずかに上回っている。堺環濠都市遺跡では、4:9で約2倍である。ただ全体に数量が少なく、この点については、データの蓄積がさらに必要かと思われる。

以上、2つの遺跡との比較を行ってみた。これによって、第23次調査出土遺物の性格がある程度つかめたと思う。しかし、今回のデータは限られた範囲のものであり、今後もデータの蓄積を必要とする。したがって、次の機会を待って町屋のデータなども合わせて、改めて論じてみたいと考える。

3. 屋瓦について

屋瓦については、文中で代表的なものの説明をするに止まった。ここでは、特に第23次調査 S F 01・02で

表8 第23次調査出土 軒丸瓦計測表 ()内は残存値 S=1/6

(1)







型 式	全 長	瓦 当 部							丸 瓦 部		玉 縁 場 所	出 土 場 所	個 体 数	
		直 径	厚 さ	内 区		外 区			周 縁 幅	長 さ				厚 さ
				文 様	径	文 様	珠 文 数	珠 文 径						
1		18.7	2.9	左巻き 三ツ巴	8.89	連珠	19 0.85	10.5	2.6			SF 01	2	
												SF 02	2	
												計	4	
2		14.2	2.45	左巻き 三ツ巴	7.1	連珠	19 0.8	0.9	1.75			SF 01	11	
												SF 02	9	
												計	20	
3		(14.2)	16.8	2.0	左巻き 三ツ巴	連珠	25 0.85	0.9	2.0		2.38	SF 01	1	
												計	1	
4		(9.2)	13.8	2.53	左巻き 三ツ巴	連珠	20 0.85	0.8	1.6		2.8	SF 01	7	
												SF 02	1	
												計	8	
5		(5.02)		1.95	左巻き 三ツ巴	連珠	19 1.02	1.0	1.65		2.0	SF 01	1	
												計	1	
6					左巻き 三ツ巴	連珠	0.8					SF 01	1	
												計	1	

表8 第23次調査出土 軒九瓦計測表 ()内は残存値 S=1/6

(2)















型 式	全 長	瓦 当 部						丸 瓦 部		玉 縁 場 所	出 土 場 所	個 体 数		
		直 径	厚 さ	内 区		外 区		間 縁 幅	長 さ				厚 さ	
				文 様	径	文 様	珠文数 珠文径							深 さ
7			15.6	3.05	左巻き 三ツ巴	8.3	連珠 20	0.9	1.4	1.92		SF 01	1	
												計	1	
8		(8.8)	16.5	1.2	左巻き 三ツ巴		連珠 25	0.8	0.7	3.52		1.45	SF 01	2
													計	2
9		(5.95)	11.35	2.11	左巻き 三ツ巴	6.29	連珠 24	0.65	1.22	1.65	(2.1)	2.05	SF 02	2
													計	2
10			14.1	2.29	左巻き 三ツ巴		連珠 26	0.8	0.9	2.55			SF 01	1
													計	1
11					左巻き 三ツ巴		連珠	0.62					SF 02	1
													計	1
12					右巻き 三ツ巴		連珠	1.0					SF 02	1
													計	1

表9 第23次調査出土 軒平瓦計測表()内は残存値 S=1/6

(1)

型式	全長	瓦 当 部							額部 平 瓦 部			出土場所	個体数			
		高さ	上弦幅	下弦幅	文 様 区			脇区幅	厚さ	鉄端幅	厚さ					
					中心部	脇文様	幅							高さ	深さ	
1		(13.4)	4.72	(8.5)	(8.21)		連珠	(8.0)		(0.6)	0.91	3.31	(9.65)	2.45	SF01 計	1 1
2		(9.19)	5.21	(12.61)	((8.99)	宝珠	唐草	(12.6)	(1.81)	0.79	1.31	2.31	(6.05)	2.8	SF02 計	1 1
3		(11.45)	4.21	(13.21)	(13.6)	三葉	唐草	(11.41)	2.29	0.55	1.7	2.41	(7.25)	1.71	SF01 SF02 計	7 10 17
4		27.25	3.49	(10.3)	(10.0)	宝珠	唐草	(11.3)	(2.1)	0.7	1.49	2.41	2.41	2.4	SF02 計	3 3
5			5.81	(11.09)	(10.89)		唐草	(8.52)		0.7	2.55	2.95			SF02 計	1 1
6		(16.7)	3.6	(9.0)	(9.0)		唐草	(7.32)		0.8	2.0	2.21	(13.75)	2.1	SF01 SF02 計	4 5 9
7		(19.75)	3.15	(17.11)	(17.2)	三葉	唐草	(16.0)	1.92	0.7	2.69	2.29	(16.35)	2.02	SF01 SF02 計	3 3 6
8		(11.6)	4.0	(9.7)	(6.1)		唐草	(7.09)			2.25	2.3	(8.85)	1.89	SF01 計	2 2

大量に出土した屋瓦について、その全体像に触れておきたい。








軒丸瓦は、型式が確定できないものを除くと12種類に上る(表8)。このうち第12型式が右巻き三つ巴文であるが、他はすべて左巻き三つ巴文である。数量的に最も多いのは第2型式であり、46.5%とほぼ半数を占める。次に第4型式が8点で18.6%、続いて第1型式が4点で9.3%となっており、この3種類が主流を占めている。これらは、主郭部でも出土しており、第1型式は西側の第27次調査や第34次調査でも出土している。ここでは、建物の建築に伴って用意されたのはこの3種の軒丸瓦と考えられ、なかでも第2型式が中心となっていたと考えられる。また、主郭部の出土品と同じであることは、この建物がそれに匹敵する重要性を持っていたことを示唆する。

その他の軒丸瓦については、第8型式、第9型式が2点ずつ出土している。この2つの軒丸瓦は、連珠数が24及び25と、非常に多い。この点からいえば、第3型式が25、第10型式も26を数え、主流を占める前述の軒丸瓦の19-20とは、異なっている。

技法的には、顕著な差異は見出し難い。丸瓦部のコピキの痕跡は、すべてコピキA(糸切り)である。瓦当部との接合方法も、すべて瓦当部裏面に横方向のクシ目を入れて接合する。相違点としては、瓦当面に

表9 第23次調査出土 軒平瓦計測表 ()内は残存値 S=1/6

(2)

型 式	全 長	瓦 当 部							額部		平 瓦 部		出 土 場 所	個 体 数		
		高 さ	上 弦 幅	下 弦 幅	文 様 区				厚 さ	狭 端 幅	厚 さ					
					中心部	脇文様	幅	高さ				深さ			幅	
9	 (14.8)	4.05	(10.4)	(8.85)		唐草	(8.0)		0.6	1.75	1.85	(10.75)	1.72	SF01 計	1 1	
10	 (12.61)	5.71	(29.0)	(28.8)		菊花	唐草	(2.0)	1.0	3.9	27.2	(8.32)	2.2	SF01 計	1 1	
11	 (4.1)	(4.1)	(7.6)	(7.6)			唐草	(4.15)		0.5	3.3	2.0		SF01 計	1 1	
12	 (8.52)	3.72	(10.3)	(8.0)			唐草	(9.2)		0.45	2.41	1.91	(5.75)	2.0	SF01 SF02 計	1 1 2
13	 (13.31)	3.9	(10.15)	(8.65)			唐草	(8.05)		0.4	1.81	2.0	(10.5)	1.9	SF02 計	1 1
14	 (12.9)	4.1	23.5	22.1		宝珠	唐草	17.3	21.5	0.5	3.1	2.3	(10.7)	1.9	SF02 計	1 1
15	 (4.25)	3.6	(10.85)	(13.18)		宝珠	青海波	(10.45)		0.30	1.1	1.81	(1.7)	1.95	SF02 計	1 1

ハナレ砂痕が残るか否かで2つに分類できるだけである。ハナレ砂痕が残っているのは、第1型式、第10型式、第12型式である。

胎土は第3型式、第10型式、第12型式がきめこまかなものを用いているが、他は粗い。

法量の点からは、第1型式の瓦当部の直径が18.7cmとほかのものより大きいことが指摘できる。

しかし、このなかで新旧関係をつかむことは難しい。文様の変化の流れからいえば、連続数の多いものが古く位置付けられることになるが、一括で出土しているため積極的に断定できない。ただ、第1型式が1期伊丹城期のSF03から出土しており、遺構の切り合い関係から、唯一やや古いことが判明する。これはまた、伊丹城期の建物の瓦を再利用していることを示している。また、点数の少ない瓦が主流となる瓦の代用として、用いられたと考えれば、これらの中に古く位置付けられるものがある可能性は高い。

次に軒平瓦について、見てみよう。軒平瓦は15種類に上る(表9)。このうち第1型式、第2型式は、明らかに古い瓦である。数量的には第3型式が最も多く、17点で35.4%を占める。次いで第6型式が9点で18.8%、第7型式が6点で12.5%、第4型式が3点で6.2%と続く。数量的点からは、軒丸瓦第2型式に対応するのは、軒平瓦第3型式、軒丸瓦第4型式に対応するのは軒平瓦第6型式といえる。また、第7型式は、主郭部でも出土している。

技法的には、第9型式、第10型式の瓦当面にハナレ砂が認められる。また、第9型式の平瓦部凹面に布目痕が残る。瓦当部に成形にあたっては、すべて平瓦の広端部下に横方向のクシ目を入れ、粘土帯をハリツケ

た後、范型に押し込むという手法をとる。

胎土は、第8型式、第10型式、第12型式、第13型式、第16型式が重い。この他、第5型式のみ上縁部の面取りを行っていないが、他はすべて面取りが施されている点が特徴として指摘できる。

瓦当文様については、均整唐草文を1列に配するものが一般的である。これを2列に配するのは第3型式、第4型式、第5型式の3種類だけである。また、第14型式のように唐草の巻き込み方向を左右逆になっているものも1点みられる。これは隅瓦で、左側を切断している。青海波文を用いているものも、1点ある。中心飾りは不明なものが多いが、わかる範囲では宝珠文を用いているものが多く、次に三葉が多い。宝珠文が多い理由として、SF01出土棟端瓦が宝珠文であることとの関連が考えられる。文様の類似性からは、第6型式と第7型式・第8型式、第12型式と第13型式がよく似ている。特に、第12型式と第13型式は、同一型式の可能性があるが、中心部を残す資料がなく、断定できなかった。

法量の点では、第2型式、第5型式、第10型式が大型である。

さて、この多種多様な軒平瓦も一括出土遺物であり、同時期の建物の屋根を飾っていたものである。遺構の前後関係からも、新旧関係をつかめる例はない。瓦当部と文様区の比率なども極端な差は認められない。ただ数量的に主体となる瓦の唐草文は、1列のものについては3反転するのが一般的であり、当該期の特徴として挙げられる。また、軒丸瓦と同様に、数の少ないものが主流となる瓦の代用として用いられている可能性が高く、そのなかに古いものが含まれていることも考えられる。

さらに付け加えれば、主流となる瓦以外に多くの種類に瓦が混じることは、古代の寺院のように建物の建設のあたって全ての瓦を新たに用意するということをせず、不足分は代用品で賄っていたことを如実に示しているといえよう。このような点は、主郭部でみられる石造物を石垣に利用する例とも共通し、興味深い。

最後に平瓦について、触れておきたい。森田克行氏は、平瓦の縦横比によって時代差がみられることを指摘している(森田1984年)。それによると、0.83以下のものが安土・桃山時代頃までの平瓦で、江戸時代にはそれ以上になる、すなわち正方形に近くなるという。有岡城の場合、全長26.6cm、広幅幅(推)20.8cmであり、その比率は0.78となる。これは同時期の奈良市多聞城(0.77~0.78)、東大阪市若江城(0.76)、高槻市高槻城(0.77)などとはほぼ同じ値である。これによって、有岡城の資料は当該期の特徴を有しているといえる。

第2節 伊丹郷町期と近代

1. III期 伊丹郷町期

1. 遺構について

この時期については調査期間の問題もあり、建物や町並の復元を行うだけの資料に恵まれなかった。しかし本文ですでに述べたように、第36次調査区では、17世紀後半に溯る遺構・遺物が検出され、本泉寺北側では江戸時代前期から何らかの施設があったことがわかる。これが本泉寺に直接関係するものかどうかは確認できなかったが、その可能性は高い。

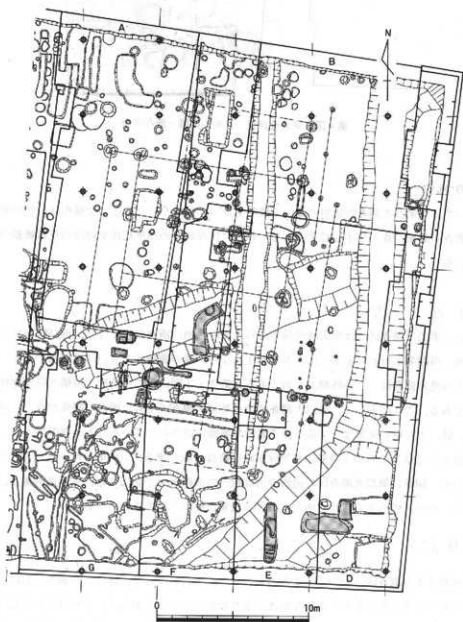
また、第23次調査区ではA期(18世紀後半~19世紀前半)以前は畑、A期には一定間隔で井戸が検出され、町屋が立ち並んでいたことがわかる。第30次調査区でも同様の様相を示す。内堀は埋まらずに利用されており、第24次調査ではこの時期の遺物が多数出土している。

この頃の天明四年(1784)には、伊丹の酒荷運搬を目的とした猪名川の通船許可に伴う船着場が設置されている(柚木 学1989年)。

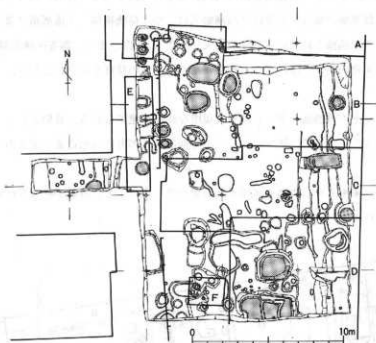
さらに、浅岡俊夫氏によって『文化改正伊丹之図』及び『天保十五年（1844）伊丹郷町分間絵図』から、19世紀前半頃には主郭北側の駄六川河岸に「高瀬船入口」や「荷物揚場」、「造酒荷ノ蔵」、「造酒蔵守」などが設けられていたことが指摘されている（浅岡俊夫1983年）。同氏はまた、調査区域北側の道路が「雲正坂」と呼ばれているのは荷物の運び上げに用いられていたため、との見解を示されており、これに伴う遺構も検出されている。

第23次調査区では、その後酒蔵と考えられる大規模な建物が建てられる。B期としたこの時期の上限が文化年間頃に求められることはすでに述べたが、この時期は伊丹郷町では酒造業が第2のピークに達する時期である。

このような一連の出来事と第23次調査区周辺に町屋が立ち並び、また酒蔵が建設されることは、密接な関係があると考えられる。



第3図 第23次調査 IV期の遺構と既存建物



第4図 第30次調査 IV期の遺構と既存建物

2. 遺物のついて

遺物については、第23次調査の説明のなかで概略を述べておいた。このような様相は、伊丹郷町北端で行った第17次調査の成果（藤本史子1987年）とも一致し、伊丹郷町の18世紀後半以降の日常雑器の様相を表しているといえる。

2. IV期 近 代

この時期は、第23次調査区では明治時代後半から大正時代頃に酒蔵がなくなり、再び町屋が立ち並ぶことになる。以後、再開発が行われるまでは大きな変化はない。他の調査区でも、ほぼ同様である。一定間隔で設けられた大谷焼の便槽は、この時期のものである。第3・4図は、この時期の遺構と既存建物との関係を示したものである。これによって、第23次調査区でも第30次調査区でも、両者の関係が良く一致していることがわかる。特に大谷焼の便槽は、2基一組で建物の裏側に設けられていることが判明する。

大きな変化としては、この頃主郭部の東半分が鉄道建設で取り壊され、内堀も埋め立てられてしまったことが挙げられる。同時に第23次調査区の南側の道は駅への道路として延ばされ、主郭部西側も南北に分断されてしまった。やがて埋め立てられた堀の上にも、民家が建設されることとなる。

おわりに

以上、今回報告する調査区についてのまとめを行った。これによって、ほぼこの調査における成果の概略が報告できたものとする。もちろん、なお述べ足りなかったこともあるが、それは次回に報告する予定の調査区の調査成果に譲りたい。最後に、緊急で困難を極めたこの調査に、誠意を持って尽力くださった関係各位の方々に改めて謝意を表したいと思う。

参考・引用文献

- 浅岡俊夫「有岡城跡における既往の調査と二・三の考察」『有岡城跡・伊丹舞町Ⅰ』大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987年
- 浅岡俊夫「伊丹城（付、有岡城）」『日本城郭体系12 大阪・兵庫』新人物往來社 1981年
- 石（鳥羽）希聰『和漢祝詞』寛政七年（1795）
- 浅岡俊夫・橋本 久『有岡城跡発掘調査報告書Ⅴ』伊丹市教育委員会 1983年
- 伊丹市博物館編『荒木村重と伊丹城』伊丹市博物館 1979年
- 若田 隆他『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ 第10・11、第54次調査』福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館 1988年
- 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 上田秀夫「16世紀から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会 1991年
- 岡崎正雄「丹波焼について」『中尾城跡—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書11—』兵庫県教育委員会 1989年
- 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 小野正敏「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分組」『貿易陶磁研究No.4』日本貿易陶磁研究会 1984年
- 大橋康二他「国内出土の肥前陶磁」佐賀県立九州陶磁資料館 1984年
- 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1988年
- 勝田邦夫・阿部嗣治「若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編」朝東大阪市文化財協会 1982年
- 勝田邦夫・阿部嗣治「若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編」朝東大阪市文化財協会 1983年
- 勝田邦夫・吉村博志「若江遺跡第25次発掘調査報告書」朝東大阪市文化財協会 1987年
- 鐘ヶ江一朗・宮崎康雄「高槻城三ノ丸跡」『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』高槻市教育委員会 1991年
- 川口宏海「有岡城跡出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究No.8』日本貿易陶磁研究会 1988年
- 川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」『中・近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会 1990年
- 川口宏海「大谷焼探訪記」『いな の 文化財調査室だよりNo.5』大手前女子大学史学研究所文化財調査室 1990年
- 黒田俊雄編『伊丹中世史料 伊丹資料叢書2』伊丹市役所 1974年
- 建築資料研究所「水琴窟アラカト」『庭別冊 庭の水景』1986年
- 河野通明「角先グワの成立—織豊期技術革新の事例—」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会 1991年
- 朝東大阪市文化財協会「若江遺跡第38～2次発掘調査現地説明会資料」1989年
- 渋谷高秀「瓦質土器出現期の地域性—南北朝期における和泉・紀伊の土器様相—」『考古学研究・第38巻第3号』考古学研究会 1991年
- 菅 関月『日本海名産図会』名著刊行会 1979年
- 白神典之「櫻撰鉢と明石撰鉢」『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編 江戸遺跡研究会 1990年
- 鈴木充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅰ』伊丹市教育委員会 1976年
- 鈴木充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市教育委員会 1977年
- 鈴木充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅲ』伊丹市教育委員会 1978年
- 鈴木充他『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅳ』伊丹市教育委員会 1979年
- 鈴木重治「京焼と京焼写し—生産と流通—」『江戸の陶磁器』発表要旨・資料編 江戸遺跡研究会 1990年
- 田上雅則「池田城跡—主郭部発掘調査概要報告Ⅰ—」池田市教育委員会 1990年
- 豊田 進「阿波のやきもの」『日本やきもの集成10』平凡社 1988年
- 中井 公「多聞廃城跡発掘調査概要報告」奈良市教育委員会 1979年

- 中村 浩他『大阪府文化財調査報告30 陶器 3』大阪府教育委員会 1978年
- 中村 浩『和泉陶器窯の研究』柏書房 1981年
- 名倉鳳山『日本の硯』日貿出版社 1986年
- 嶋崎彰一他『萩焼古窯』日本工芸会山口支部 1990年
- 長谷川 真『丹波系播鉢について』『中・近世土器の基礎研究IV』日本中世土器研究会 1988年
- 藤沢典彦『中・近世瓦の研究—元興寺篇—』元興寺文化財研究所 1982年
- 藤沢良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要5』瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤沢良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要6』瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 藤沢良祐他『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要7』瀬戸市歴史民俗資料館 1988年
- 藤本史子『伊丹郷町における出土陶磁器の様相』『岡城跡・伊丹郷町1』大手前女子学園岡城跡調査委員会 1987年
- 前川 要『岡城惣構の再検討』『岡城・伊丹郷町1』大手前女子学園岡城跡調査委員会 1987年
- 前川 要『近世城下町発生に関する考古学研究』『ヒストリア 第121号』大阪歴史学会 1988年
- 前川 要『伊丹郷町の都市構造の変化とその歴史的背景』『いな文化財調査室だよりNo.2』大手前女子大学史学研究
所文化調査室 1990年
- 間壁忠彦・間壁霞子『備前焼研究ノート(1)』『倉敷考古館研究集報 第1号』倉敷考古館 1966年
- 間壁忠彦・間壁霞子『備前焼研究ノート(2)』『倉敷考古館研究集報 第2号』倉敷考古館 1966年
- 間壁忠彦・間壁霞子『備前焼研究ノート(3)』『倉敷考古館研究集報 第5号』倉敷考古館 1968年
- 間壁忠彦・間壁霞子『備前焼研究ノート(4) (—その後の新資料—)』『倉敷考古館研究集報 第18号』倉敷考古館 1984年
- 間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社 1991年
- 百瀬正恒『平安京及びその近郊における土器の生産と消費』『中・近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1985年
- 水野正好『江州高島産石硯資料暫見録』『滋賀考古学論叢 第2集』滋賀考古学論叢刊行会 1985年
- 森田克行他『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1984年
- 森田 勉『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年
- 森村健一『堺環濠都市遺跡出土の陶磁器の組成と機能分担』『貿易陶磁研究No.4』日本貿易陶磁研究会 1984年
- 八木哲浩編『伊丹市史』第1～5巻 伊丹市役所 1968～1972年
- 八木哲浩編『荒木村重史料 伊丹史料叢書4』伊丹市役所 1978年
- 八木哲浩編『伊丹古絵図集成 伊丹史料叢書6』伊丹市役所 1982年
- 植木 学『近世伊丹酒造業の展開と小西家—酒造家資料調査によせて—』『地域研究いたみ』第18号 伊丹市博物館 1989年
- 吉岡泰英・月輪 泰他『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅲ 第4・13次、第20次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館 1990年